

# 日本と Bangladesh の橋渡しのために



日本・Bangladesh 交流メールマガジン

第 1 号 ~ 第 21 号 (2004 年 2 月 19 日 ~ 11 月 25 日発行)

2004 年 12 月 2 日

在 Bangladesh 日本大使館

## 目次

### **1 . 堀口大使メッセージ . . . . . 5**

- ( 1 ) バングラデシュ人の親日感とバングラデシュの持つ魅力 . . . . . 5
- ( 2 ) バングラデシュと国民的アイデンティティー . . . . . 6
- ( 3 ) バングラデシュから学ぶこと . . . . . 7
- ( 4 ) バングラデシュの医療と「クムディニ精神」 . . . . . 8
- ( 5 ) 「ガバナンス」について . . . . . 9
- ( 6 ) バングラデシュ人と「ムガールの末裔」 . . . . . 10
- ( 7 ) バングラデシュ開発フォーラムに出席して . . . . . 11
- ( 8 ) ラロン・シャー橋開通とパドマ川 . . . . . 12
- ( 9 ) 二つの絵画展示会 . . . . . 13
- ( 10 ) バングラデシュの私立大学 . . . . . 14
- ( 11 ) 援助広報活動の強化 . . . . . 15
- ( 12 ) ジョソールの砒素対策プロジェクト再訪 . . . . . 16
- ( 13 ) バングラデシュ国土改造構想 . . . . . 17
- ( 14 ) バングラデシュ民間セクターの躍進 . . . . . 18
- ( 15 ) アワミ連盟集会爆破事件と新たな動き . . . . . 19
- ( 16 ) チャクマの若者によるファッションショー . . . . . 20
- ( 17 ) 洪水被災地域へ視察 . . . . . 21
- ( 18 ) パドマ橋建設協力と民主化支援 . . . . . 22
- ( 19 ) 国際下痢研究所と保健セクター改革 . . . . . 23
- ( 20 ) モエナマティ墓地における戦没者慰霊祭 . . . . . 24
- ( 21 ) スリランカとバングラデシュ . . . . . 25

### **2 . 駐バングラデシュ歴代大使の証言 . . . . . 26**

- ( 1 ) ダッカ電話網整備計画とビマン航空機の遭難 . . . . . 26  
( 第 5 代大使 : 小林俊二氏 )
- ( 2 ) バングラデシュの対日配慮 チョウドリ外相の思い出 . . . . . 28  
( 第 6 代大使 田中 義具氏 )
- ( 3 ) 深夜の会談 . . . . . 30  
( 第 8 代大使 : 齋木俊男氏 )
- ( 4 ) メグナ・グムティ橋 . . . . . 32  
( 第 9 代大使 : 竹中繁雄氏 )
- ( 5 ) バングラデシュ : 繰り返される政情不安のシナリオ . . . . . 33  
( 第 10 代大使 金子 義和氏 )
- ( 6 ) バングラデシュ : 総選挙に思う . . . . . 34  
( 第 12 代大使 : 小林二郎氏 )

### 3 . 特別寄稿 . . . . . 3 6

- ( 1 ) 「砂と水の国」でおいしい飲み水を創る . . . . . 36  
( アジア砒素ネットワーク・ダッカ事務所長 川原 一之氏 )
- ( 2 ) 国際ヨットレースからストリート・チルドレンへ . . . . . 36  
( NGO エクマット口代表 渡辺 大樹氏 )
- ( 3 ) ニームクラブのポリオ接種デー体験記 . . . . . 37  
( ニームクラブ 矢嶋 ルツ氏 )
- ( 4 ) バングラデシュの総合雑誌「遡河」を編集して . . . . . 38  
( 広島大学大学院国際協力研究科助教授 外川 昌彦氏 )
- ( 5 ) パン・パシフィック・シヨナルガオン・ダッカ 813 号室から . . . . . 40  
( パン・パシフィック・シヨナルガオン・ダッカ副総支配人 小松 学氏 )
- ( 6 ) チッタゴン丘陵地帯の問題に取り組む日本の NGO . . . . . 41  
( NGO ジュマ・ネット 下澤 嶽氏 )
- ( 7 ) バングラデシュ人気質 . . . . . 42  
( ダッカ日本語学校校長 ブイヤン 和子氏 )
- ( 8 ) バングラデシュの「日本のバス」 . . . . . 43  
( 豊田通商・ダッカ駐在員事務所長 阿辺 剛氏 )
- ( 9 ) 日本トレードショー顛末記 . . . . . 44  
( ジェトロ・バングラデシュ事務所長 西川 壮太郎氏 )
- ( 10 ) JDS 「人材育成奨学計画」の挑戦 . . . . . 46  
( JICE 国際交流部留学生二課 中山 映氏 )
- ( 11 ) バングラデシュへ ふたたび . . . . . 47  
( 詩人 白石 かずこ氏 )
- ( 12 ) 砒素の村で山羊を貸す . . . . . 48  
( アジア砒素ネットワーク・ジョソール事務所 中村 純子氏 )
- ( 13 ) シレット洪水緊急援助報告 . . . . . 49  
( 13 年度 2 次隊・ポリオ対策 阿部 久美子氏 )
- ( 14 ) バングラデシュ空手事情 . . . . . 50  
( JICA シニア海外ボランティア 北村 哲郎氏 )
- ( 15 ) マングローブ植林を体験 . . . . . 52  
( 財団法人オイスカ 神田 亜紀氏 )
- ( 16 ) 真実の国際エンゼル協会とは . . . . . 53  
( NPO 法人 国際エンゼル協会 小川 勲氏 )
- ( 17 ) 校歌 ( ダッカ日本人学校校長 浅井 克悦氏 ) . . . . . 55
- ( 18 ) 村づくりのしごと . . . . . 56  
( JICA 専門家、バングラデシュ農村開発公社 海田 能宏氏 )
- ( 19 ) バングラに暮らして 15 年 . . . . . 58  
( チッタゴン日本人会会長 馬場 智樹氏 )
- ( 20 ) 和太鼓はぐるまについて . . . . . 59  
( NPO 法人・国際エンゼル協会 バングラデシュ事務所駐在員 小川 勲氏 )
- ( 21 ) 旭日双光賞を受賞して . . . . . 60  
( AOTS バングラデシュ・ネパール連絡代表、AOTS ニューデリー事務所顧問  
アジア文化会館同窓会会長 モアゼム・フセイン氏 )

#### 4 . バングラデシュ案内 . . . . . 6 2

( 大使館 広報文化班 河野秀美 )

( 1 ) 独立戦争博物館 . . . . .	62
( 2 ) パクシー橋からジャムナ橋への旅 . . . . .	63
( 3 ) カウランバザール . . . . .	64
( 4 ) ショドルガット . . . . .	65
( 5 ) ラルバーグフォート . . . . .	66
( 6 ) アーサン・モンジール . . . . .	68
( 7 ) ダッカ近郊の家庭訪問 . . . . .	69
( 8 ) バングラデシュの洪水 . . . . .	70
( 9 ) 女性ショミティ訪問 . . . . .	71
( 10 ) 少女ショミティ訪問 . . . . .	72
( 11 ) カーゾン・ホール . . . . .	73
( 12 ) 国立博物館 . . . . .	74
( 13 ) ボンゴボンドウ記念館訪問 . . . . .	75
( 14 ) プラネタリウム . . . . .	76

## 1. 堀口大使メッセージ

### (1) バングラデシュ人の親日感とバングラデシュの持つ魅力

当館メルマガ発刊に当たり一言ご挨拶申し上げます。

早いものでバングラデシュに来て9ヶ月が過ぎました。この間とくに気付きの点として2点申し上げたいと思います。

一つは、バングラデシュ人の日本および日本人に対する親しみ・信頼・尊敬です。これはバングラデシュのどこへ行っても誰と話しても感じる点です。この財産は、1971年末の当国独立以来、日本が政府・民間双方のレベルで親身の協力を行ってきた結果です。この成果は政府および民間の先達による大変な努力の上に築かれたものであり、この友好関係を維持発展させることが、現在当国にいる私たちの責務だと考えます。

縁あって同じ時期に当国に勤務し、あるいは関わることになった私たちが、仕事上、生活上遭遇する障害に対して力を合わせて克服しながら、最高に近い二国間関係を次に来る人たちにバトン・タッチしていければと考えています。

もう一つは当国のイメージについてです。昨年5月当地に来てから会った多くの外国人から一様に、当国の印象は事前の予想より遙かに良かったとの話を聞きました。おそらく当国についての事前の知識が、洪水、サイクロン、貧困といったものであったために、ダッカの街を走る車の数や林立するビルのさまを見て、思っていたより発展しているとの良い印象になったものと思われます。

また、当国には、1943年の大飢饉のさまを鬼気迫るタッチで描いたアベディンや、日本留学組の先駆で深みのある画法を得意とする画壇の大御所キプリアなどによる絵画や、フォルダ・パルビン女史のラロンに代表される伝統歌謡、あるいは紀元前3世紀から脈々と続いてきたテラコッタ（粘土彫刻）などの誇るべき芸術があります。これらの異なったジャンルに共通するのは、サイクロンや洪水などベンガルの荒々しい風土がもたらす激しさ、躍動、鮮明さではないかと思えます。

さらに、着任以来もっぱら週末を利用してバングラデシュ各地を見て回りましたが、マングローブの原始林シュンドルボン、世界最長の海岸コックス・バザール、シレットのティー・ガーデンなどの美しい自然や、パハルプール、モエナマティーなど規模においてインドのナーランダ学院に引けを取らない仏教遺跡もあります。

これらバングラデシュが持つ魅力については、外国人はもとより当のバングラデシュ人でも知っている人は余り多くはないようです。今後、これらの魅力が内外に広く知られていけば、外国における当国のイメージも改善するだけでなく、バングラデシュ人の自国に対する誇りも増していくのではないかと期待されます。これらの魅力をできるだけ多くの人たちに知って貰うようお手伝いすることも、わが国と当国の友好関係を増進する一助になるのではないかと考えています。(2004年2月19日)

## (2) バングラデシュと国民的アイデンティティー

去る2月24日、バングラデシュが生んだ世界的な高僧アティーシャ・ディパンコール(982?1054)の1022年の生誕記念式典が、生地ムンシガンジで行われました。同式典には主催者である同地選出のイスラム土地大臣、ハスナ・モドウッド法務大臣夫人、7名の中国仏教代表団、スリランカ大使、安藤京都大学助教授、矢嶋JICA専門家、私ほか日本大使館員などが出席し、場外の見物者まで入れると1千人近い人たちが見守っていました。

文献に裏付けられたベンガル史は、4世紀インドの仏教王朝であるグプタ朝から始まりますが、7世紀初めに至りグプタ朝の下で最初のベンガル王ササンカが登場します。そして8世紀半ばベンガルを本拠地とした仏教王朝パーラ朝が興って12世紀まで400年以上栄え、この間マハスタン、パハルプールなどの僧院で多くの仏僧が仏教を学びました。このパーラ朝は一時はベンガル、ビハールを中心に東インド一帯を支配下に収め、「ベンガルペディア」はパーラ朝について、ベンガル初期の歴史における最も栄光に満ちた時代であったと評価しています。オテイッシュはこの時代に活躍し、その高名ゆえにチベット王に招かれてチベットに渡り、チベット仏教中興の祖としての実績を残しました。

なお、12世紀末パーラ朝に代わったヒンドゥー王朝のセーナ朝が13世紀前半まで1世紀以上続き、やがてアフガン、中央アジアなどから次々とやってきたトルコ系のイスラム諸王朝がベンガルを支配し、1576年にインドから来たムガル帝国のカーン・ジャハンがベンガルを征服しました。そして早くも17世紀半ばになると、英東インド会社がベンガルにも触手をのばし始め、19世紀半ばに英領インドの一部に編入されました。

バングラデシュの一知識人によれば、当国民のアイデンティティーは、ベンガル人であることとイスラム教徒であることの二つからなり、この双方を認めることによって、周囲の国民とは異なるバングラデシュ人としての固有のアイデンティティーが生まれるはずであるが、現状では、むしろアワミ連盟はベンガル人という属性を基礎にし、BNPはイスラム教を基礎にした政党として、それぞれの特性を過剰に強調して対立しているため、国民のアイデンティティーが二つの政党により真っ二つに引き裂かれた不幸な状況におかれているとのこと。

一方、当国の仏教徒の立場から見れば、上記の通りベンガル史における仏教王朝の期間はかなり長く、この時期を正當に捉えない限り、この国の歴史と国民的アイデンティティーを正しく理解することは難しいのではないかと、また、調和を尊ぶ仏教やその他の宗教をも踏まえながら、イスラム教とベンガル人であることとの融合を図ることによって、はじめて真の国民的アイデンティティーの確立が可能となるのではないかと、という意見が出てきても不思議ではありません。バングラデシュは近年東方外交を推進していますが、ベンガル史における仏教についての正しい評価は、東方の仏教諸国との関係強化に資することも予想されます。今回のアティーシャ・ディパンコールの生誕式典がその一助となるよう、私たちとしても心がけていけたらと考えています。(2004年3月4日)

### (3) バングラデシュから学ぶこと

3月12日、バングラデシュの名門スコラスティカ校の高校生による英語劇「不思議な国のアリス」を見る機会がありました。舞台装置、衣装、照明の素晴らしさもさることながら、出演者たちが話す英語の発音はネイティブに限りなく近く、英語劇の完璧なできばえに、米・豪の大使などとともに惜しみない拍手を送りました。これまでもこの国の様々な分野の第一線で活躍している人たちのみならず、ダッカ大学などの大学生の話す英語のレベルの高さに感心していましたが、今回の英語劇で高校生までもがこのように立派な英語を駆使しているのを見て、いろいろ考えさせられました。

第一に、日本人は中学から大学まで少なくとも10年は英語を勉強しているのに、この高校生の英語の足元にも及ばないのは何故だろうという古くて新しい疑問です。その理由はいろいろ挙げられますが、中でも、バングラデシュでは英語を学び始める時期が早く、多くの家庭でごく小さい時からベンガル語とともに英語を話していること、そして、日本では「教養としての語学」になりがちで、必ずしも会話能力は重視されないのに対し、バングラデシュでは、とくにスコラスティカなどの名門校で学ぶ人たちは、その後ノース・サウス大学やインディペンデント大学などの名門私立大学に入り、さらに欧米(豪を含む)の大学院に進むか、或いは直接欧米の大学に進もうと考えている学生が殆どで、彼らは何が何でも英語を話す能力を身につけようと決意していることが、日本人との大きな違いのように思われます。

グローバル化の時代に日本人が国際社会で重要な役割を果たすためには、どのような職業に就こうとも、もっと危機感を持って英会話能力を高めなくてはならないとの点は、例えば船橋洋一氏の「あえて英語第二公用語論」に詳しく論じられている通りですが、日本人も何が何でも英語を話すようになるのだとの決意をバングラデシュの学生から学ぶべきことを痛感しました。

第二に、これらの学生は、これまでは欧米の大学で学んだ後そのまま欧米の大学や企業、或いは国際機関に職を見つけ、バングラデシュには戻って来ないケースが殆どで、この「頭脳流出」は本来バングラデシュの開発のために不可欠の優秀な人材をみすみす失う結果をもたらしていました。スコラスティカなどの名門校に行ける富裕層の優秀な子弟が当国の開発に参加しない状況では、日本はじめ多くの開発パートナーが人材開発のためいくら協力しても限界があることは明らかです。もとより彼らにすれば、働きたくても留学の成果を生かせる適当な職がないという切実な問題がありました。

ところが最近いろいろな所で、欧米で勉強し数年の実務経験を積んだ後帰国し、父親の事業の跡を継いだり、ITなどの分野で新たな企業を興して成功している若い実業家に会ったり紹介されたりします。今日ダッカの至る所で建築中のビルの数や街を走る車の数に見られる経済の活況は、これら若手実業家が一翼を担っているのです。

流暢な英語を話す彼らと今後貿易や経済協力を進めていく上でも、日本人が子供の時から、何が何でも英語を話せるようになるとの決意をもって英語を学び、彼らと対等に話せるようになって欲しいと強く感じた次第です。(2004年3月18日)

#### (4) バングラデシュの医療と「クムディニ精神」

先日、タンガイル県のミルザプール郡にあるクムディニ病院を、草の根無償資金協力で供与した医療器材の設置状況を確認するため館員と訪ねました。同病院の建物は1946年に完成したのですが、ベッド数750とバングラデシュ最大級の病院で、天井は高く病室の両サイドが広い庭に面しているため天井のファンだけで涼しく、病院の中も外もチリーつ落ちていない清潔さが際だっていました。患者は病院の快適な環境を見ただけで病気の半分は治るとの創立者の信念を今も守っているとのことでしたが、医者と看護婦の献身的な働きぶりや、患者たちのリラックスした姿が大変印象的でした。

同病院の創立者 R.P. シャハは7歳の時に母クムディニを出産の際に失ったことから、成人して石炭の販売およびジュート・ビジネスで財をなすと、1944年故郷ミルザプールで村人への無料の医療を目指して病院を開設しました。彼はさらに同じ年に近代的な女性教育のための学校として、曾祖母の名を取った全寮制の女子学校「バラテスワリ・ホームズ」も設立し、1947年にはこれら事業の運営を目的とした「ベンガル福祉信託」を設けました。同信託は傘下のジュート業、河川運送業などからの収益をもって、これら病院、学校の運営に当たるための団体です。

R.P. シャハが1971年に息子とともにパキスタン軍に殺された後、シャハの娘が運営に当たり、2000年にその息子すなわち R.P. シャハの孫に交代しましたが、この間、「絶えざる前進、自己犠牲と人類救済」の信念のもとに、看護婦養成学校、女子医学学校、貿易訓練学校、手工芸学校を次々と設立する一方、収益部門としてガーメント会社や製薬会社を興し、従業員2500人、パート5000人を抱える一大コンプレックスとなっています。事業が大きくなった後も、同信託の主たる目的は上記福祉事業の費用を賄うこととされ、個人の利益を図ってはならないことが約款に明記されているそうです。

当地に着任して以来、少なからぬ数のバングラデシュ人が重病でもないのにタイ、シンガポールあるいはインドの病院に治療に行くのを見聞きするにつけ、独立後32年がたち、多くの優秀な医者が外国に留学などして個々の医療レベルは決して低くないにもかかわらず、当国に総合病院一つないのは何故だろうとの疑問を持ちました。いろいろな機会に保健大臣、大蔵大臣を含む多くのバングラデシュ人にその理由を尋ねてみましたが、問題は病院のマネジメントにあり、その改善のためには医者の兼業禁止が不可欠とのことでした。医者が仁術よりも算術を優先するのは他の国でも見られることですが、当国では度が過ぎているというのが多くの人々の意見です。同時に私益を公益に優先させているのは医者だけではないこと、従って政治家を含む当国のエリート全員に公益認識の徹底が重要であることを少なくない数のバングラデシュ人が指摘していました。

次の問題はこの総論的指摘をいかに各論的実践に移すかという点ですが、この難問について、「クムディニ精神」を共有する医者たちは比較的安い月給で同病院での治療に専念しています。同病院の60年におよぶ「絶えざる前進、自己犠牲と人類救済」の実績は、他の病院、さらに他の分野における公益優先思想の実現が決して夢ではないことを証明しているように思われます。草の根無償で供与した医療器材の確認作業

を見ながら、「クムディニの精神」が他の病院、他の分野に広がっていくことを心から祈った次第です。(2004年4月1日)

## (5)「ガバナンス」について

「バングラデシュ開発フォーラム」(BDF)が近づいてきました。昨年5月着任後間もなくBDFに出席しましたが、感心したことは、本来経済的社会的な問題が取り上げられるべきBDFの場で、「ガバナンス」の問題がかなりのウェイトをもって取り上げられていたことです。サイフル・ラーマン大蔵大臣率いるバングラデシュ政府代表団も、この難問から逃げることなく多くの質問に答え「反腐敗委員会」の設立を約束しました。

その時から1年が経ちましたが、「ガバナンス」がバングラデシュ発展の最大の鍵である状況に変わりはありません。確かにこの間(2月17日)「反腐敗委員会設立法案」が国会で可決されましたが、本会議での採択時に出席していた議員数は58名にすぎず、果たして反腐敗委員会の設立だけでどの程度「ガバナンス」が改善できるのかが気になります。

「ガバナンス」を一言で表す適当な日本語がないのですが、世銀代表によれば、法と秩序、人権、腐敗、民主化および地方政府の5つを指すそうです。それぞれが非常に重い課題ですが、バングラデシュの現状において最も緊急な課題は法と秩序の改善であり、さらに言えば法と秩序を悪化させている腐敗ではないかと思えます。グンナー・ミュルダールのいう「ソフト国家」の定義通りに、腐敗がこの国の至るところで法と秩序を蝕んでいます。その改善のためには政治家および国民の政治的意志が必要ですが、どうすればかかる政治的意志ないし国民的コンセンサスを形成できるのでしょうか。

現在、JICAの専門家グループがダッカ市の固形廃棄物処理システムのためのマスター・プランを作成中ですが、先日発表された中間報告によりますと、廃棄物処理システムには二つの柱があり、一つは技術的なもの、もう一つは精神的なものです。このうち技術的な柱は、いかにゴミを収集し、いかに集めたゴミを処理し、またいかに関連機器や施設のメンテを図るかなどであり、対応は容易ではないが非常に困難でもないといわれています。これに対し精神的な柱の方は、いかにダッカ市民にゴミを捨てさせないか、いかに街を清潔に保たせるかなど意識改革、行動改革を求めるもので、その実現には多くの困難が予想され、学校教育を含む長期にわたる国民的精神運動の必要性が指摘されています。

腐敗の問題は、少なくともダッカ市のゴミ問題と同じかそれ以上の取り組みが必要かと思われれます。「反腐敗委員会」の設立はいわば技術的な要件であり、腐敗を真になくすには精神的な取り組みが不可欠です。私が小学生当時、日本は敗戦後の社会秩序の再構築が喫緊の課題でしたが、どこに行っても「あなたが規則を守れば、規則があなたを守ります」とか「人は右、車は左を守りましょう」とかの標語を、街頭のスピーカーから耳にタコができるほど聞かされたものです。今振り返れば、日本においても「良い社会を築こう」との国民的コンセンサスは最初からあったのではなく、この

ような精神運動を通じて徐々に育っていったのだと思われます。バングラデシュでも先ず、立派な民族国家を築こう、そのためには社会から腐敗をなくそうという国民的な精神運動を始めてはどうかと思います。かかる運動を始めればやがて「ガバナンス」改善への国民の政治的意志ないし国民的コンセンサスが次第に育ってくるのかも知れません。今後機会を捉えて、このような考え方をバングラデシュの要人に伝えてみたいと思っています。(2004年4月15日)

## (6) バングラデシュ人と「ムガールの末裔」

先日「ムガールの末裔」(The Living Mughals)というドキュメンタリー映画を見る機会がありました。ムガル帝国最後の皇帝バハトウル・シャー二世(在位1837-1857)の末裔の家族の4世代にわたる歴史を初めて明かすとの宣伝文句に心を惹かれて見に行きましたが、映画では、同皇帝と第一妃アシュラフ・マハールの間の直系子孫に当たるライラ・ウマハニというハイデラバードに住む80歳の女性とのインタビューを中心に、ムガルの子孫たちがいかに時代の変遷に適応していったかを取り上げていました。

彼らにとっては困難な人生をいかに生き抜いてきたかが最大の問題であり、ムガル皇帝の末裔としての栄光など考えている暇はなかったということでしたが、生活が困難であればあるほど大きな支えになっていたに違いありません。

ムガル帝国は1525年成立してから、1707年第6代皇帝アウランゼーブの死とともに衰退を始め、各地で地方勢力が力を持つようになり、18世紀半ばにはデリー周辺を支配するだけの一勢力に転落します。そして英東インド会社の1世紀に及ぶ植民地化攻略によって、19世紀半ばには最後の皇帝バハトウル・シャー二世はデリーで年金生活を送るまでになっていました。

ところが、1857年セポイが中心になって反乱を興すと、英国の権威に対抗すべくシャー二世を皇帝として擁立するとともに、行政会議を招集しデリー政権を樹立しました。反乱はインド全土に広がり1年2ヶ月も続きますが、これをようやく鎮圧した英国は、インド王を「僭称」した同皇帝を国家反逆罪で有罪とし、流刑地ラングーン(ヤンゴン)に追放しました。彼は1862年同地で87歳の波乱に富んだ生涯を閉じます。

試写会に来ていたのは年配の人たちが圧倒的に多く、上映後、映画を作ったグプタ監督との質疑応答では、何人かの人から、自分は同皇帝と4人いた妃のうち一人との間にできた子供の子孫の誰それを知っているとの話があり、同監督はどんな断片的な話でも良いので知らせて欲しいと応えていました。同監督は質問に答えて、偶然出会った皇帝の子孫たちに、いかに長い間の沈黙を破り、自らについて語って貰うことに成功したかについて控えめに話していました。

また、私の隣にいた知人の元閣僚は、自分の左隣にいる上品な女性は最後の皇帝の子孫の一人であるが、彼女はそのことを死ぬまで誰にも知られたくないとしている旨耳打ちしてくれました。この女性の、自分のことは誰にも知られたくないが他の子孫がどうなっているかは知りたいという心理は、何となく分かるような気がしました。

ムガル王朝について、これまで会った比較的年配のバングラデシュ人の多くが親しみを持っていることに関心を抱き、その理由を尋ねてみたところ、創始者バーブルが父はトルコ系のティムール4代目の子孫、母はチンギス・ハーンの子孫であり、これまでのアリア系インド王朝に比しベンガル人に近いこと、また、ムガル帝国時代にベンガルの発展が進み、とくに、ベンガル語についてアラブ語やヒンディー語の影響をできるだけ取り除き、言語としての完成が図られたことなどを挙げていました。

ムガルの末裔たちへのバングラデシュ人の関心が、このようなムガル王朝そのものへの親しみに由来していることは間違いないようです。(2004年4月29日)

### (7) バングラデシュ開発フォーラムに出席して

5月8日から10日までバングラデシュ開発フォーラム(BDF)がショナルガオン・ホテルで開催されました。昨年のBDFは着任してから1週間後の出席であったため、暫定貧困削減戦略文(1-PRSP)と対処方針だけを読んで臨まなければなりません。今年のBDFについては、過去1年間「バングラデシュ・モデル」の下で、大使館の経済協力班、JICA、JBIC、JETROをはじめとする関係者全員が、農村開発、電力、教育、保健など10のセクターに分かれ、現場での経験を踏まえつつ、何度も議論を重ねながら最終的な対処方針を作成しました。

幸い議論の節目節目で話を聞くことができたため、対処方針の一語一語、そのニュアンスについて、問題によっては何故そのような表現が望ましいかを熱心に主張した専門家の表情などを思い出しながら、十分理解することができました。

こうして万全の準備をもって臨んだBDFにおいて、7つの議題のすべてについて、しかも中味のある発言をしたのは日本だけでした。その甲斐もあってBDF最終日、パテル世界銀行副総裁の総括の中で、経済成長・貧困削減の効果の高い海外直接投資(FDI)誘致のため、バングラデシュ政府が緊急かつ政治的意思をもって阻害要因解決に取り組むよう求めた日本の発言が引用されました。

日本の果たした貢献については、同世界銀行副総裁だけではなく、サイフル・ラーマン大蔵大臣、国連食糧農業機関(FAO)などの国際機関や他のドナー諸国からも直接高い評価を受けました。大蔵大臣はディナーの席で隣に座った私に、日本がバングラデシュの多くの問題について関心を持ち積極的に発言していることを評価する旨述べていました。

これらの評価は「バングラデシュ・モデル」メンバーの全員の活躍に対するものであり、さらにウェブサイトやメーリングリストを通してバングラデシュの開発問題に大きな関心を寄せて頂いている皆様のおかげであると感謝しています。

今回のBDFに関する報道ぶりを見ると、一部のドナーが法と秩序、腐敗、NGOの扱いなどの問題に関してバングラデシュ政府の対応を厳しく批判し、これに対し、大蔵大

臣が内政干渉であると反発したことについて、大蔵大臣をたしなめる意見と、ナショナルリスティックな立場から大蔵大臣を支持する意見が見られましたが、その両方の意見がともに、だから自助努力によって援助への依存を減らしていくべきであると結論づけていることが注目されました。

最近、IMF や一部ドナーの協力もあってバングラデシュの税収は着実に増えています。大蔵大臣もしばしば発言の中で、援助は今や GDP の 2.6% に過ぎないと強調していました。ダッカの街の各所で見られる建設ラッシュ、道路を走る車の急増ぶりに見られる好景気、あるいは私立大学の急増を支える中産階級の台頭ぶりが、これらの好ましい強気の発言の背景にあるものと思われます。

日本の対バングラデシュ援助の最大目的は、この国の自助努力を助け一日も早く自立経済の実現を図ることにあります。日本の ODA について量の増加が難しくなりつつある今、バングラデシュの自立に向けてますます知的貢献が求められています。

バングラデシュ経済の発展と自立実現を目指して、「バングラデシュ・モデル」が、これからもバングラデシュ国内をはじめ各地で活躍する援助関係者の知見を結集しながら、来年の BDF に向けて新たな活動を開始することを期待しています。

(2004 年 5 月 13 日)

## (8) ラロン・シャー橋開通とパドマ川

5 月 18 日、日本の資金協力で完成したラロン・シャー橋の開通式に出席しました。テントを張った会場には数百人の人がいましたが、その外には数千人の人々が見守っていました。

カレダ・ジア首相は挨拶の中で日本の協力に対する深い謝意を表しつつ、将来におけるフェリーのない道路網整備の目標について語っていました。私は日本の代表として首相始め多数の来賓の謝意を受ける名誉に感激しつつ、私の挨拶では最終部分でカタカナをふったベンガル語で、ラロン・シャー橋が両国の永遠の友情の象徴として長く記憶されることを希望する旨のメッセージを伝えました。

式典が終わるや、近隣から集まった数千人の人たちが「渡り初め」をしていましたが、これらの人々は長い間の悲願が叶い、パドマ川をどんな天候でも歩いて渡れるようになったことへの感慨や、これを可能にした日本国民への感謝の気持ちをもって渡っていたのではないかと思われました。

3 日後、週末を利用して、先般 JICA 調査団がパドマ橋の建設地点として決定したマワから対岸のカオラカンジにフェリーで渡ってみました。6 キロの川幅を渡るのに往路 1 時間、復路 1 時間半かかりました。乾期でも対岸が遥か彼方にしか見えないこの地点に、遠くない将来、ジャムナ橋をしのぐ大きな橋が架けられるのかと思うと大きな感慨にとらわれました。

ところで、バングラデシュにおいてはパドマなどの大河は、生活のあらゆる面で深く関わり合っています。最近の新聞報道では、パドマ、ジャムナ、メグナなどの大河に

面した地域における大規模な土地や農地の流失が多数報じられています。数日前の新聞に、カオラカンジから車で1時間ほどのシャリアトプール県のナリア郡でも、パドマ川のために広域にわたって土地や農地が流失し、多数の人が家を失い、生活の手段を奪われて困っているとの記事が出ていました。ここまで来たので、ついでに行ってみました。

カオラカンジから南下する道路は、ポリシャル、さらには観光地クワカタに至る幹線道路で、地図の上でも比較的太い線で描かれています。しかし、実際は道幅も広くなく、しかも粗末な舗装が至るところで抉られて大きな穴をあけており、四輪駆動車でも難儀しました。将来、パドマ橋ができれば、これらの道も劇的に変わるのでしょうか。ようやくナリア郡にたどり着きパドマ川の岸に行ってみると、確かに数カ所で大規模な浸蝕が見られました。元々護岸工事など一切されていないので、例えば川中の中州が、川の流れで形を変えたり消失したりすると、それまで中州のおかげで流れの矢面にならずに済んでいた対岸の部分が水流の圧力をもろに受け、やがて流失していくのです。

家や農地を失い途方に暮れている人たちには大変申し訳ない言い方ですが、かかる現象は太古の昔から繰り返されてきたのです。そして、しばらくは途方に暮れている人々も、やがてなんとか住む場所を探し、なんとか生きていくための手段を見つけていくのでしょうか。パドマの流れは太古の昔から、人々に試練と諦念と再び生きる勇気とを与えてきたのだと思った次第です。(2004年5月27日)

## (9) 二つの絵画展示会

バングラデシュに来て驚いたことの一つは、絵画展示会の数の多いことであり、毎週ダッカのどこかのギャラリーで、個展や複数の画家の展示会が開かれています。私のところには多数の展示会の開会式への招待状が来ますが、時間の許す限り行ってみることにしています。先日も同じ日時に二つの展示会への招待を受けたので、先にウッタラに新しくできたギャラリーでの展示会「50名の有名画家の作品展」を見に行きました。

日本留学組のキブリア画伯やダッカ大学のユヌス教授などの作品とともに、必ずしも未だ有名とは言えない若い画家たちの作品も並んでいました。先輩の画家たちが若い画家を世に売り出すべく協力することは、バングラデシュの絵画界の発展のために良いことですし、また「新興地」ウッタラに新しいギャラリーができたことも、ウッタラの発展を示すものであり結構なことだと思いました。

次に、ダンモンディーのギャラリーで開催が始まるストリート・チルドレン「トーカイ」を描いた作品展示会に行ってみました。これはダッカ大学芸術学部のラフィクン・ナビ教授が、架空の孤児「トーカイ」の目を通して社会を風刺すべく、25年間にわたって描いた作品を展示したものです。「トーカイ」というのはベンガル語で「モノを拾う人」の由ですが、「トーカイ」は、坊主頭でロンギだけまとった上半身裸の、栄養失調でお腹が出ている少年で、社会から顧みられない貧しい者の代表という設定です。

同教授が 25 年前主要紙に「トーカイ」の連載を始めた当初は、白黒のセリフ入りの風刺画でしたが、その後水彩画と風刺画を融合する画法を開発し、都会の片隅で大きな袋を脇に置いて物思いに耽る「トーカイ」の姿をペーソス溢れるタッチで描いた水彩画が中心になっています。

街角のゴミ置き場、ビルに囲まれた公園のベンチ、道を隔てる塀、電信柱などに寄りかかる「トーカイ」のそばには多くの場合、カラスと野良犬がいます。とくにこのカラスが印象的なのですが、教授はカラスを描くのが得意らしく、昨年発刊されたバングラデシュ芸術奨励協会の「現代絵画集」にも、迫真のカラスの絵が船着き場を描いた水彩画などとともに収められています。

ナビ教授については、昨年ダッカ大学芸術学部を初めて訪ねたとき、他の教授とともにお会いしたのですが、その時点では「トーカイ」の作者「ロノビ」と同一人物であることは知りませんでした。同教授は、ナビの方は大学で学生に絵を教え、ロノビの方は世の中の矛盾を「トーカイ」を通じて人々に考えさせるという役割分担で、両者は全く別の人格であると述べています。しかし、「トーカイ」が、「世間の人々は些細なことをいろいろ問題にしているが、バングラデシュが独立して 33 年になるのに、これしか発展していないことを全く気にもしていない」と嘆くくだりがありますが、この嘆きはナビとロノビ双方の嘆きであり、さらに、「トーカイ」の大勢のファンの嘆きであろうと思います。

私は今度「トーカイ」に会ったら、この嘆きから一歩進んで、皆が小異を捨て一日も早い国の発展のため力を合わせるよう呼びかけるようお願いしたいと思っています。  
(2004 年 6 月 10 日)

### (10) バングラデシュの私立大学

先日、ノース・サウス大学とともにバングラデシュ私立大学の頂点に立つインディペンデント大学(IUB)を訪ねました。先般日本政府が同大学に日本関係図書を寄贈したことから、今回チョードリ学長に招待されたものです。

IUB は 1993 年に設立され、教養学部その他、ビジネス学部、コミュニケーション学部、環境科学・管理学部の 3 つがあり、学生数 2133 名に対し教師は 144 名(フルタイム 98 名、パート 46 名)もいて、教師対学生比が 1 対 15 という教育の質の高さを誇っています。学長の説明によれば、IUB のもう一つの自慢は、時代のニーズ、社会の需要を絶えず先取りし、真に有用な人材を養成していることであり、例えば、当国がとくに必要としている人口環境学、環境行政学、病院経営学などの他、家庭内暴力学も正規の学問として取り上げている由です。

卒業生は 1997 年の 27 名から毎年増えて、2003 年は 228 名になりました。就職先としては、銀行・証券、教育、ガゼット関連など当国の一流企業の殆どに進出しています。公務員は給料が低いため全く人気がないそうです。なお、家庭内暴力学を専攻する学生は NGO に就職する由で、当国における NGO の存在の大きさを再認識しました。しかし、IUB の就職アドバイザーは、国内の一流企業への就職に拘ることなく、卒業

生が学んだ知識を活かして自ら起業したり、インターネットを使い外国企業に雇用を求めて外国で活躍することを奨励しており、IUBの教育が目指すのは、学生にかかる能力と実力をつけさせることにあります。

当国の私立大学は1992年、公立大学のみでは高まる高等教育のニーズに応じ得なくなっていること、公立大学では政治活動などで教育レベルが低下していることなどへの対応として設立が認められました。私立大学の数はしばらく20校位で推移していましたが、この2年間に30数校も増え現在は52校に達しています。このような急増の当然の結果として、その多くが授業料だけは高いにも拘わらず、校舎、図書館、研究室などの施設の未整備、有資格のフルタイム教師の絶対的不足、教育指導計画の欠如、利潤優先の理事会と教育優先の学長の対立などの問題を抱えています。

とくに大きな問題は、そもそも公立大学の教育の不十分なところを補うために設立されたはずの私立大学が、有資格のフルタイム教師を必要数集められないため、公立大学から引き抜いたパートあるいは若い教師に依存しすぎることとなり、その結果公立大学の教育の質を著しく低下させてしまっていることです。公立大学の教師が私立大学に完全に移籍するのであれば、公立大学は有資格の別の教師を採用できるのですが、公立大学の教師は公立大学の教師であることに大きな権威ないし意味があるため、給与が高くて私立大学にはフルタイムの教師としては移りたがらないのだそうです。

このような多くの問題を抱える当国の大学の中でIUBは光を放っています。チョードリ学長率いるIUBが、バングラデシュの国造りを担う人材の養成に益々大きな役割を果たすことを願っています。(2004年6月24日)

### (11) 援助広報活動の強化

バングラデシュの独立以来、わが国が官民レベルで行ってきた援助に対する当国の人々の感謝が、わが国への信頼、尊敬のベースになっていることは、以前記したとおりです。ただ最近時折感じるのは、当国の知識人といわれる人々についても、わが国の援助に関する知識が意外に不十分なことです。この点について、バングラデシュの政府および国民がわが国の援助について全体的に高い評価をしているのであれば、必ずしも援助の詳細について知らなくても良いのではないかとの意見もあろうかと思えます。

とくに、日本社会では自らの善行を吹聴しないことが美德であり、自己宣伝を潔しとしない価値観があります。そのため他人が評価してくれるまで待つ、さらには、必ずしも他人に知られなくてもよいとの美意識すら見られます。また、語学のハンディもあってPRに対する苦手意識が加わる場合もあります。

しかし、各国が時には国内ニーズを後回しにしてまでも、貴重な税収を外国援助に当てるのは、国際社会における先進国の義務感もあります。二国間援助の場合、被援助国との良好な関係を築くためです。そして二国間関係を良好にしていくためには、わが国が国民の税金を使って当該国を援助していること、援助によって具体的成果が挙げられていることを当該国民によく理解して貰うことが重要です。

この場合、単なるムード的な評価よりも、出来る限り正確な知識にたった評価の方が強固な友好関係の基礎になることから、出来る限り正確な事実に基づく評価の確立を目指してさらなる努力を払うべきものと思われます。そこで当館では、経協関係業務では担当者の時間の半分位をPRに割くようなつもりで広報に力を入れています。

例えば草の根・人間の安全保障無償案件では、一案件ごとに、協定の署名時期、小切手を手渡す時期、案件の完成時期の少なくとも3回は英文およびベンガル語のプレス・リリースを出し、プレスに報道して貰っています。また、新規案件だけではなく昔の案件についても、機会を捉えて繰り返し広報するようにしています。例えば、1992年から1997年まで、当館の発意でユネスコの日本基金を使って当国の世界遺産であるパハルプールとバゲルハットを修築したことがあります。昨年ユネスコの松浦事務局長が当地を訪問された機会を捉えてプレス・リリースを出して広報した結果、各紙に再び広く報道されたことがありました。さらに最近、わが国の援助についてのベンガル語の広報パンフレットを2万部作成して、全国の学校への送付などを含め広く配布しつつあります。

援助広報については、対象に応じた様々なアプローチが必要です。先日、当館の紀谷参事官が当地経協関係者のメーリングリストで提案していたバングラデシュ人全般を対象とした「ODA クイズ」等も面白いアイデアです。読者の皆さんからいろいろなアイデアを頂きながら、わが国の援助について少しでも多くのバングラデシュ人に理解を深めて貰うべく努力を重ねていきたいと考えています。(2004年7月8日)

## **(12) ジョソールの砒素対策プロジェクト再訪**

7月12日、ジョソールのシャルシャ郡で、アジア砒素ネットワーク(AAN)の皆さんが中心となって完成した、飲料水パイプライン開設式に出席しました。ちょうど一年前にジョソールに出張したとき、AANの皆さんから、砒素汚染対策として表流水の利用が最も有力な解決策であること、しかし、問題は水源地の確保にあり、既存の池はみな生活用水や養殖池として用途が決まっているため、水源池の確保がなかなか難しいことなどを伺いました。

それから一年がたち、この間AANは、近くのハオル(三日月湖)の利用許可を地方政府から取り付け、JICAの資金援助を得て本格的な処理施設を完成させました。同施設の能力は日産2.5立方メートルであり、これにより3つの村の300世帯、1,500名に1日10リットルずつを給水することができるそうです。このようなプロジェクトが成功するためには、水源地、資金を確保して水処理施設を建設することだけでなく、その維持、運営が鍵となります。そのためには、住民の意識改革が極めて重要となります。

住民にオーナーシップを持たせるべく、総経費140万タカ(約280万円)の10%を住民負担とし(残り90%はJICAが拠出)しかも建設後の管理を住民が責任をもって行う体制になっています。これらのことを実現するまでに、AANの皆さんが払われた努力はさぞかし大きいものであったに違いありません。

このプロジェクトでは、もう一つ特記すべき点があります。それは、本プロジェクトのために作られたPRの巧さです。「ゴンビラ」という、お爺さんと孫による掛け合い漫才の形で、本プロジェクトの意義やAANとJICAの貢献を、村民に啓蒙するのです。たとえばこういうやり取りがあります。

(孫の歌)ハオル(三日月湖)の水には砒素や鉄がない。きれいにして飲めば一番安全だ、ナナヘー。病原菌は塩素の粉を入れればいなくなる(繰り返し)。フィルターの石と砂が水をきれいにする。運が向いてきた。今まで知らなかった。AANのことを私たちは忘れない。

(中略)

(お爺さん)なら、この石と砂が汚れたらどうするんだ？  
(孫の歌)汚れたら砂の上を1? 2ヶ月ごとに1cm削り取らないといけない、ナナヘー。砂利が汚れたら、時々洗わないといけない(繰り返し)。そうしないといい水が出ない。運が向いてきた。今まで知らなかった。AANのことを私たちは忘れない。

この「ゴンビラ」が終わるまで、みな熱心に観ていました。娯楽の少ない村の人々でなくても、十分楽しめる内容でした。頭のいい人がいるものだと感心するとともに、AANの飲料水パイプラインがこれから多くの地域に普及していくことを確信しました。(2004年7月23日)

### (13) バングラデシュ国土改造構想

今回の洪水では、バングラデシュ全土の3分の2が冠水し、その規模は1998年の洪水を上回るといわれています。胸まで水に浸かりながら救援物資の配給を待つ人々の長い列を新聞写真で見て、様々な思いにとらわれました。

とくに気になったのは、今回のような大きな洪水の間隔です。東パキスタン時代の1954年の大洪水の後、1974年に大洪水に見舞われていますが、この時の間隔は20年です。次の大洪水は1988年ですから、前回との間隔は14年です。その次が1998年と間隔は10年となり、そして今回の洪水まで間隔はわずか6年に縮まっています。

洪水の原因については、上流地域での豪雨や、ヒマラヤ山系の溶雪が、温暖化現象で急増しているとの事情があります。さらに、ヒマラヤ山系から、年間20億トン以上の土砂がガンジスやブラフマプトラなどの大河に流れ出し、一部が川底に沈殿して河川自体が浅くなっていることなどが挙げられています。これらのことから単純に予測しますと、実際には起こらないことを祈りますが、次の大洪水は6年以内にやってくる可能性があります。

今回の洪水対策として、バングラデシュ政府は、国際社会の援助も得ながら、被災者に対する食料、飲料水、医薬品の提供などの短期的対策に取り組みつつあります。このあと水が引けば、洪水で損壊した家屋や、道路などのインフラ、学校などの建物、工場など産業施設の修復、再建の中期的対策に取りかかることとなります。

ジア首相も言っていましたが、この洪水で過去何年分もの開発の成果が失われてしまい、これを取り戻すためには、大車輪で復興に取りかからなければなりません。ただ、何年後かわかりませんが、大洪水はまたやってくるわけで、これからの復興の努力を無にしないためにも、次の洪水に備えた長期的対策にも併せ取り組む必要があります。

長期的対策としては、村ごとにシェルターとなる二階建ての学校の建築、堤防建設、河川の浚渫などがあります。シェルターを村ごとに作れば、緊急時に人命を救い、救援活動の拠点になるメリットはあります。ただし、家畜や工場の施設などは救うことはできず、洪水が引いたらまたゼロからやり直さなければなりません。

そこで、より根本的対策として、途方もない時間と費用はかかりますが、「バングラデシュ国土改造構想」はどうでしょうか。バングラデシュ全土の、洪水になると冠水する全ての地域において、住宅地と工場地区を決め、地区ごとに頑丈なコンクリートの枠を作ります。そこに河川を浚渫して出る土砂をどんどん入れ、最初の十年で 50 センチ、次の 10 年で 1 メートル、その次の 10 年で 1.5 メートルと嵩（かさ）上げていくのです。もとよりこの土砂が固まるには、さらに年月を要します。オランダの干拓事業は一工事の期間が 50 年の由ですから、長い時間がかかるのは当然です。この土木工事と並行して、これから作る公共の建物や工場は、できるだけ二階建てとします。

一方、この大工事を全国一斉に始めるのは現実的でないので、地域ごとに住民の合意ができたところから始めるのです。これからやって来る大洪水のたびごとに、大きな富を救える地区とそうでない所とがはっきりします。それを見れば、後に続く地区が次々と出てくるでしょう。これを世界が援助するのです。そして、このような国土改造、ないし国造りの大事業を実現していく過程で、強固な国民的一体感と愛国心が育つことが期待できると思うのです。（2004 年 8 月 5 日）

#### **(14) バングラデシュ民間セクターの躍進**

昨年のバングラデシュ経済の成長率は 5.5% ですが、政府の統計に反映されない経済活動を含めれば 8% は超えているだろうとする指摘を、多くのバングラデシュ人から聞きます。確かに、過去 1 年ぐらいの間にグルシャン通りをはじめとするダッカの目抜き通りに建ったオフィスビルやショッピング・モール、あるいはアパートの数や、街を走る新しい車の数の増加ぶりは目を見張るばかりであり、この指摘にはもっともなものがあります。

また、当地に長く住んでいる何人かの外国人からも、これまで米英に留学しそのまま帰ってこなかった若者たちが、外国の進んだビジネス手法をもって帰国し、父親のあとを継いで事業を拡大したり、新たな事業を始めたりしているが、この傾向が続けばバングラデシュの経済はこれから良い方向に向かうだろうとの話を聞きました。

法と秩序や投資阻害要因に大きな改善がないにも拘わらず、これら若者の帰国が増えている理由は何か、何人かの人に尋ねてみたところ、次のようなことが分かりました。

一つは、インターネットやメールなど情報革命によって、バングラデシュに帰ってきても世界のビジネス情報を入手できるようになったことです。二つは、9.11事件以降、米国に住むイスラム系外国人に対し、警官などが絶えずやって来て身の周りのことをいろいろ尋ねるので、住みづらくなったことであり、三つは、9.11事件以来、イスラム系外国人の銀行口座に20万ドルぐらいの預金があると、やはり官憲が訪ねてきて、カネの出所、これからの使い道など詳しく聞くので、銀行にお金を置きづらくなったことです。四つは、やはり9.11事件による入管法の改正によって、そもそもイスラム系外国人の大学入学が難しくなっただけでなく、卒業後1年のインターンが終わると必ず帰国しなければならなくなったことです。

また、英国でも米国ほどでないにせよ、入国、滞在が難しくなったことに加え、50万人のバングラデシュ人の成人失業率が40%といわれるように、大学で得た知識を活かせる職は余りない状況で、米国から帰国した仲間が事業を興したとの話を聞いて、英国組の中からも後に続く若者が増えているとのこと。

以上のように、9.11事件によって、これまで米国や英国に住もうとしていたバングラデシュ人が、自分たちは祖国に住むしかないのだと覚悟を決め、進んだ知識や技能および資金とともに帰国して事業を始めることは、国の経済発展にとって甚だ好ましいことです。(もとより、長期的に見れば、アル・カーイダがイスラム教国にもたらした損害は膨大なものですが。)

日本としても、バングラデシュの経済発展を支援する上で、これら若き事業家と手を携え、民間セクターでのプロジェクトを是非とも成功させたいものです。先般発足した日本バングラデシュ商工会議所の会員の皆様とともに具体策を考えたいものです。(2004年8月19日)

### **(15) アワミ連盟集会爆破事件と新たな動き**

8月21日の爆破事件は、先般の洪水の水がようやく退き、復旧活動が始まって間もない時期に起こっただけに、バングラデシュに深刻な影響を与えることになりました。

これまでの爆破事件ではいずれも犯人が捕まっていますが、その理由の一つとして、事件がシレットなどインド国境に近いところで発生しているため、犯人が国外に逃走してしまうことが挙げられていました。その点、今回の事件はダッカの街中で起こっているだけに、法と秩序の問題に止まらず、国家の権威そのものへの挑戦といってもよく、バングラデシュ警察のメンツにかけても犯人を挙げ、法の裁きにかけてほしいと願っています。そうすることによってのみ、類似の事件の再発を防げるだけでなく、与野党が不毛な非難合戦に終止符を打ち、一致して山積する問題に取り組む環境が生まれることが期待されるからです。

今回の事件の後、ハルタルが続いて経済活動が停止し、洪水で休校となっていた学校がさらに無期限休校となり、国の将来を担うべき学生がいつまでも勉学の機会を奪われる事態に心を痛めていました。ところが、事件の数日後にはバングラデシュ商工会議所連盟(FBCCI)が与野党の話し合いを呼びかけるとともにハルタル反対を訴え、

やがて野党の一部もハルタルの続行に反対を表明し、さらに、事件から 10 日目までには野党寄りの新聞までが、何時までもハルタルを続けることに明確な反対姿勢を打ち出しました。このような声が国民の間でますます大きなものになることを願っています。

問題は、野党の指導者がこのような声に果たして耳を傾けるかですが、他の主要国の大使とも連絡を取りながら、一日も早く耳を傾けて貰えるよう働きかけていきたいと考えています。今回の事件の深刻さから、ハルタル反対の声が大きくなるにはもう少し時間の経過を待たなければならないかと思っただけに、上記の動きに大変勇気づけられました。

この変化が本当にバングラデシュの「新たな動き」と云うに値するものなのか、もう少し見守る必要がありますが、なかなか変わらないと云われるバングラデシュだけに、この動きが本物になれば、今回の不幸な事件で失われた多くの人命が、大きな意味をもってくるものと思われまます。(2004 年 9 月 2 日)

#### (16) チャクマの若者によるファッションショー

先週、チャクマの若者たちが企画、開催したファッションショーを見る機会がありました。チャクマ族はバングラデシュ最大の少数民族で、人口は 20 数万人とされ、チッタゴン丘陵のランガマティを中心に住み、殆どが仏教徒であり、独自の文化、生活様式を維持しています。

このファッションショーの特色は、ランガマティ地方で作られた、手織りの色彩豊かな様々な素材を使いながら、伝統的な民族衣装、洋風のいわゆる洋服、結婚衣装などいろいろな形の衣装にして、チャクマの若者のモデルが着て観客の前に現れるところにあります。色あでやかな色彩、ハツとするような模様は、ランガマティ地方の織り布の特色となっていますが、この織り布はバングラデシュの他の地方で作られるものとはかなり趣を異にしています。バングラデシュの絵画に特徴的な色彩の鮮やかさは、ベンガル地方のときに優しく、ときに荒々しい風土の産物であるように、ランガマティ地方の個性ある織り布も、同地方のカプタイ湖と丘陵が織りなす美しい自然の産物であろうと思われまます。

バングラデシュの主力輸出品目である縫製品は、本年末の多国間繊維協定の終了とともに、中国製品などとの激しい競争に曝される結果、かなりの影響を受けることが心配されています。このためバングラデシュ政府は、バングラデシュの繊維製品の競争力を高めるべく様々な措置を取りつつあります。競争力のある労働力を活かした低価格の規格品の品質向上、デリバリー期間の一層の短縮、そのためのチッタゴン港の大幅改善などとともに、個性ある製品の開発も指摘されています。

このような見地から、バングラデシュの若者たちが、持ち前の豊かな色彩感覚を活かして、個性的な製品を開発していくことは大変意義のあることです。とくにチャクマ族は、1960 年代のカプタイ水力発電所の建設により大規模な移住を余儀なくされ、また、ベンガル人の入植者の圧力で苦難を強いられてきましたが、そのような困難な状

況を跳ね返しなが、今回のファッションショーを成功裡に実現したことは特筆に値します。

この成功の裏には、チャクマを代表する画家のカナック・チャクマさんや、バングラデシュのパイオニア的デザイナーとして、各地方の手織り繊維を活かしなが、斬新な衣装を作り次々に市場に出しているビビ・ラッセルさんの、全面的支援がありました。これら既に名をなした人達が、若者たちの新しい試みを支援するのを見て、とても心強く感じました。

バングラデシュ中の若者たちが、チャクマの若者に倣って、新たなオート・クチュール事業でも、或いは新たなIT関連の事業でも、その才能を活かした事業を次々と起こしていけば、バングラデシュの明るい未来が見えてくるように思いました。  
(2004年9月16日)

### **(17) 洪水被災地域ヘリ視察**

先日、UNDP 主催のヘリコプターによる洪水被災地域視察に参加し、シレットのジャマルガンジ、タンガイル近くのジャムナ川中洲、そしてジャムナ川対岸のシラジガンジの3つの村の様子を見てきました。

ジア空港を飛び立つと直ぐ水に囲まれた家々の群れが見えてきますが、やがてシレットに近づくにつれて陸地が姿を消し、見渡す限り水だけの光景になります。傾いた電信柱、一列に並んだ並木などが頭を出しており、一見何もない水面も真上まで来ると、水面下に道路や畦の黒い線が見え、洪水の前まで人々が住んでいたことが分かります。

5、6件の家だけの小集落が、ところどころ見え始めて間もなく、水に浮かんだ村役場とおぼしき建物の庭に、周囲からボートで集まった数百人の見守るなか着陸しました。地区の役人やNGO関係者から、最も必要なものはシェルターと食料であるが、洪水は12月まで続くので、水が退いたら直ぐ農作業を始められるように、種と肥料が欲しい、また、そのためのクレジットが欲しいなどの要望がありました。

中長期対策としては、海のような洪水をコントロールすることは出来ないので、いかに被害を軽減するかが問題であり、今回も15日から20日くらい田畑の冠水を遅らせることができれば収穫を終わらせることができたので、その程度の高さの堤防が欲しい、5ユニオンの160の小学校を二階建てのフラッド・シェルターにして欲しい、また、家畜用の「シェルター」もできたら欲しいなどの要望が寄せられました。

次に、川幅10キロぐらいに広がり、川中に大小無数の中州を抱えるジャムナ川の上を旋回しながら、目指すスタールという島に、やはり周辺から集まった数百の人々が待ちかまえるなか降りました。

人々の話によれば、今回の洪水は水の勢いが早く、川岸の土地を大きく浸蝕しながら押し寄せた結果、通常の洪水の場合のような栄養分を含んだシルトの代わりに、大量の土砂をもたらし、中州全体に土砂が50センチも堆積してしまい、家だけでなく畑

も失われてしまった由です。いくつか残った家は、家の半分以上が土砂で埋まっています。先ず必要なものはシェルターと食料であり、次に土砂の土地でも栽培できる落花生や野菜の種や肥料であり、その次に雇用機会としての公共事業ということでした。

最後に降りたシラジガンジの町は比較的裕福で、家を流失した人々の一部は、洪水予防用の堤防の上に隙間なくトタン板の小屋を建てて住んでいました。堤防はこのような用途もあるのです。人々は、最も必要なものは道路、通信の復旧であるとしていましたが、当面の雇用機会は漁業、野菜作りぐらいで、中にはボグラなどの町に出かけて日雇いや乞食をする者もあり、一度町に出て行った者は7、80%がもう戻ってこないとのことでした。

日本政府は、国民の皆様のご理解と関係者のご協力を得て、今回の洪水に6.8百万ドル相当の緊急援助と食糧援助を行うことができ、カレダ・ジア首相以下バングラデシュの政府および国民から高い評価を受けました。これらの援助によって、上記のような洪水に苦しむ人々が一日も早く、正常な生活に戻って欲しいと願いました。

(2004年9月30日)

#### **(18) パドマ橋建設協力と民主化支援**

バングラデシュが独立する以前から、日本は当国の国造りに必要な人材養成のため、広範な協力を続けてきました。1955年以来現在までにJICA研修のため日本を訪れたバングラデシュ人の数は4000人を超えています。先日、ある席で会った当国の閣僚の一人にその数字を話したら、目を丸くして驚いていました。

先般もこのコラムで取り上げたパドマ橋について、現在もJICA専門家が建設に必要な調査のため熱心に作業しています。本年3月に架橋地点をマワとジャンジラ間に絞り込んだ後、フィージビリティ・スタディーの作成に入り、9月末に中間報告が発表されました。

同報告では橋の全長は5.58キロとジャムナ橋を上回ることで、また、橋の形状はサスペンションをいくつかつないだ、美しいエクストラドーズ型とすることが決まりました。この方式によれば、橋脚と橋脚の間の距離を、ジャムナ橋の100メートルに対し、2倍近い180メートルに延ばすことができ、口径30メートル、長さ約100メートルの橋脚数を減らすことにより、コストを大幅に少なくすることができるそうです。

橋とアプローチ道路の建設に伴う「社会環境および住民移転スタディー」は未だ作成中ですが、移転対象となる住民を強制的にではなく、あくまで納得ベースで移転して貰うべく、彼らをジャムナ橋建設の時に移転を余儀なくされた住民たちと直接会わせ、住民同士でいろいろな懸念をぶつけ、納得して貰う機会を今回初めて設ける予定の由です。

民主主義が未だ十分に育っていないバングラデシュにおいて、JICAが進めるこのよう

な対話は、民主主義教育という見地から画期的なものがあります。一部のドナーは、当国のできるだけ早い民主化を願うあまり、ときおり声高に民主化を求めたりしますが、識字率が約半分といわれる開発途上国において民主主義の実現を求めるには、いろいろな工夫があってしかるべきかと思います。

そのような見地から、上記の JICA 専門家が勧める住民同志の対話による問題の解決方式は、民主主義がどのようなものか必ずしも明らかでないバングラデシュの国民に対し、なるほどこれが民主主義というものを理解して貰う上で最適の方式のように思われます。

JICA の専門家が橋の建設に協力する過程で、民主主義の実物教育も併せ行うと言うことは、誠に素晴らしい試みです。この住民同志の対話が行われる時には、報道陣にも大勢入って貰って、是非とも国民に広く伝えて欲しいものです。また、他のドナーにも日本的な民主化支援方法があることについて理解して貰えるとともに、他の方法について工夫して貰える良い機会となるのではないかと期待しています。

(2004 年 10 月 14 日)

### **(19) 国際下痢研究所と保健セクター改革**

ベルリンに本部を置くトランスペアランス・インターナショナルが、4 年連続でバングラデシュを最も腐敗した国であるとする報告を発表しました。バングラデシュを最悪とすることには異論があり得ますが、政府の各セクターに問題のあることは確かです。保健セクターについても、公立病院の共通した問題点として、医師などの無断欠勤、勤務時間中の私的診療、薬品の抜き取り、給与支払い・監査・調達時の不正、資金の目的外使用、労働組合の妨害などが問題点として指摘されており、政府が改革に緊急に取り組むことが求められています。

この改革に勇気を与えてくれるのが、先般このコラムで書いたクムディニ病院と、先日見学した国際下痢研究所 (ICDDR,B / 正式名称: 国際保健人口研究センター) です。同研究所は 1960 年にコレラ研究所としてダッカに設立されましたが、1978 年国際機関として再出発しました。同研究所が 1960 年代に開発した経口補水塩 (ORS) は、下痢の簡便な特効薬として今では世界中で使用され、年間 3 百万人の命を救っているそうです。この功績に対し、2001 年ビル・ゲイツ賞 (賞金百万ドル) が授与されました。

同研究所の素晴らしいところは、世界最高レベルの研究をしているだけでなく、年間 12 万人の患者を治療し、さらに多数の医師、医療関係者の研修を行っていることです。この「三位一体」の活動を通し、例えば下痢の治療方法について、最も廉価で効率的な方法を開発し、全国の病院、クリニックに提供しています。また、病気が治ったあと、原因としての栄養失調を改善しない限り、再び発病して入院することになるので、母親に、野菜を主体としつつ必要なカロリーを確保する持続可能な料理を教える教室に通わせた後退院させており、この方法も地方の病院などに教えている由です。

同研究所は現在は下痢だけではなく、母子保健、家族計画、 Dengue 熱、結核などの感染症、栄養、安全な水、HIV/AIDS など幅広く取り組んでおり、さらに、老人問題、暴

力、スラム住民の保健なども取り上げ、社会科学も研究ツールとして取り入れているそうです。

サクソ社長はこの病院、研究所、研修所を併せた同研究所の経営成功の秘訣として、治療方法の失敗はリカバーできるが、倫理と金銭面については失敗は許されないので、特別に注意している、それだけです、と述べていました。もとより、同所長を始め日本人の我妻ゆき子博士など全所員の献身的な努力は当然の前提です。

同研究所がこのような病院経営の精神、方法についても人材を養成し、全国の病院、クリニックに提供していけば、当国の保健セクターの改革は少しずつ進んでいくことが期待されます。(2004年10月28日)

## (20) モエナマティ墓地における戦没者慰霊祭

11月6日、モエナマティの英連邦墓地において行われた戦没者慰霊祭に出席しました。昨年、当地に着任してすぐコミラを訪ねた際、よく手入れされた芝生の斜面に陽光を浴びて数百の墓碑が整然と並ぶ英連邦墓地の美しさに目を見張りましたが、さらに右手の一角に24名の日本人兵士の墓碑を見ていくつかの感慨にとらわれました。

日本は明治維新によって近代化を開始し、日清、日露の戦勝を経てわずか半世紀の間に五大国の一つに列せられるに至りましたが、この過程で、例えば東大工学部を創設したヘンリー・ダイアーなど多くの英国人に沢山のことを教えて貰い、また、日英同盟によって国際社会における地位の向上に英国から大きな支援を得ました。とくに、日英同盟の重要性は、第一次大戦後米の圧力を受けるなどして同盟を廃棄すると間もなく日本外交は漂流を始め、ついに無謀な太平洋戦争に突入し、全てを失ってしまったことを見ても分かります。

太平洋戦争勃発と同時に日本は英国を痛打し、戦争が終了した後、英国は数世紀にわたって営々と築き上げた殆どの英植民地の放棄を余儀なくされましたが、英国から見れば、日本がしたことは文字通り「恩を仇で返す」ものでした。それだけに、この美しい墓地に、ビルマ戦線から捕虜として当地に連れてこられた恨んでも余りあるはずの日本人兵士を、一緒に埋葬してくれた英国人の寛容さに脱帽せざるを得ない思いでした。

また、十数年前私がミャンマー大使館に勤務していた際、太平洋戦争末期インパール作戦で敗れた日本軍が マンダレーを通過してヤンゴンに敗走する途中、十数万といわれる日本兵士が飢え、病気、あるいは戦闘で命を落としましたが、その時の日本兵士の遺骨が何十年も経って土地の農民によって発見され、大使館に届けられたことが数回ありました。何十年も野原に捨て置かれた彼らと比べ、美しい墓地に埋葬された24名の兵士の霊は遙かに幸運であると思ったことでした。

今回出席した慰霊祭の式次第は、墓地正面のポールの周囲に、参列した英、加、豪、EU、ノルウェー、印、パキスタンの大使がそれぞれ持参した花輪を置き、英国人の女性牧師とバングラデシュ人のイマムがそれぞれお祈りをし、ラッパを合図に一分間の

黙禱をしていったん終了します。そして、全員が墓地を半周して日本人兵士の墓碑のある一角に移動し、日本大使夫妻が花輪を捧げ黙禱するのをその他の参列者が見ているというものでした。

このような式次第は、おそらく、この慰霊祭に日本が招待され始めたのが大分年が経ってからであったため、日本関係の式次第が付け足し的にになったこと、また、キリスト教牧師とイスラム教イマムの礼拝に、仏教徒の多い日本兵士を対象に含めることは適当ではないと判断したことなどの事情があったものと思われます。

その理由はともかく、勝者と敗者が同じ墓地に埋葬されながら、戦後 60 年も経って慰霊式は別と言うのは、今日の日英の緊密な協力関係から見ても実情にそぐわないとの印象を受けました。英大使にその印象を話したら、自分も奇異に感じたので、その旨の書簡を貰えれば本国政府に取り次いでみたいと述べていました。日本兵士の霊が、英連邦の兵士の霊ととともに恩讐を越えた平和の祈りに加えられれば、無念の思いでなくなった同胞の魂が少しでも癒されることになるのではないかと思いました。

(2004 年 11 月 10 日)

## (21) スリランカとバングラデシュ

イードの休暇を利用してスリランカに行ってみました。一番印象深かったことは、紀元前 5 世紀にベンガルから渡った王子によって開かれたシンハラ王朝が、インドからパーク海峡を越えてやってくるタミール人の攻撃を受けて、何度か遷都を強いられながらも、1815 年英国に滅ぼされるまで綿々と続いたという説明でした。本当かなと思いましたが、ダッカに住む何人かのスリランカ人に尋ねたら皆そう信じているそうです。

ダッカから訪れた旅行者が気が付くのは、第一に人の少なさです。スリランカの人口は二千万、首都コロンボは百万、国土はバングラデシュの三分の一余りということですから当然ではあります。第二は街にリキシャがないことで、乗用車もバスも人口比以上に少ないように見受けられました。第三は極端に貧しい人が殆ど見られないことで、貧しい層の人々も識字率の高さを感じさせ、表情も穏やかな印象を受けました。そして、第四は道路のゴミが目立って少ないことです。首都コロンボだけでなく地方を旅行したときも、人々が家の周囲を掃いているのをよく見かけましたが、箒を売っている店の多さにも感心しました。

ただし、コロンボの街がきれいになったのはここ数年のことだそうで、もしそうならいかなる政策、キャンペーンによって可能になったのかが分かれば、現在ダッカ市の廃棄物処理についてマスタープランを作っている JICA の専門にも参考になるので、現在スリランカの日本大使館に調査をお願いしています。

スリランカはさらに、シンハラ王朝の人々が遷都する先々で残した立派な仏教建築や彫刻、巨大な岩山や美しい海岸の自然美など観光資源が豊富で、ダイヤ以外の宝石は何でもあるという豊かな資源とともに、バングラデシュにない大きな利点があります。

他方、バングラデシュにはガス以外これといった資源のない代わりに、勤勉で進取の気性に富んだ人々、企業家精神と国際的センスを持った企業家群、高い英語力を持ったエリート層、さらに色彩感覚に優れた芸術家などがいます。また、タミール・タイガーなど、人種的理由から分離独立を求めて武力闘争するグループを抱えていないことは、スリランカにない大きな強みです。バングラデシュがガバナンスを改善し、政党間のいさかいを克服し、教育に力を入れて経済発展に力を集中できれば、短期間にLDCを卒業し、中進国入りすることは疑いありません。

両国の共通点としては対印関係の難しさが挙げられます。バングラデシュではインドの国際河川連結計画が大きな問題となっていますが、スリランカでも、インドがパーク海峡の浅い水域に30キロの海運用の漕を掘る計画を、スリランカとの協議なしに進めようとしていることが心配されています。

この深い漕を掘るとベンガル湾の潮流が変わり、海の生態も変わって多くの漁民が職を失い、パーク海峡に点在する85もの島々が水没しかねないと指摘されています。大国インドに、いかにすれば隣接国の利害を尊重して貰えるかが両国共通の課題であり、何とか良い知恵が出てくることを祈っています。

(2004年11月25日)

## 2. 駐バングラデシュ歴代大使の証言

### (1) ダッカ電話網整備計画とビマン航空機の遭難

(第5代大使：小林 俊二氏)

バングラデシュの8月は雨期の最中であり、乾期には顔を出している国土の何割かが水中に没します。1984年8月5日の午後、チッタゴン発ダッカ行のビマン航空ターボ・プロップ機がダッカ空港着陸寸前に沼に突っ込んで水没し、乗客乗員約50名全員が死亡する事件がありました。朝方からの豪雨は上がっていましたが、滑走路を含む空港一体が水浸しであったため、滑走路の位置を見誤って手前の沼に着水したのが事故の原因でした。乗客には住友商事の職員2名が含まれていました。1名は東京本社から出張した邦人職員、他の1名はロンドン支店から派遣された英人職員という説明を受けたように記憶しています。

この事故と日本の資金援助によるダッカ電話網改善事業との間に少なからぬ関わり合いがあったことを承知している人はほとんどいないのではないかと思います。犠牲となった住友商事の職員のためにもその事情を書き残しておきたいと考えたのはこのためです。

パキスタンの電話設備は東パキスタン(バングラデシュ)の分離独立前から西独シーメンス社の独壇場でした。このためバングラデシュの電話設備への進出を企図したわが国の電気通信業界はダッカ電話網改良計画を作成し、バングラデシュ政府に提案することを企画しました。83年12月、ダッカのホテルに担当閣僚であるカーン通信相(海軍参謀長兼戒厳副司令官)その他の関係者を招き日本側購送についての説明会が

開催されました。次いで翌 84 年 2 月には業界団体派遣の調査団がダッカを来訪して所要の調査に従事しました。

この動きに警戒の念を深めたシーメンス社は急遽西独政府を動かして電気通信担当相をダッカに派遣し、カーン通信相との間でひざ詰め談判を行わせました。その結果両閣僚間にバングラデシュにおける電話交換機は引き続きシーメンス社製品を使用するという趣旨の覚え書きが取り交わされたと伝えられ、日本側は計画の推進が容易でないことを覚悟せざるを得ませんでした。

しかし 6 月初旬、突然カーン通信相が更迭され、オバイドゥラ・カーン農業相と交代しました。オバイドゥラ・カーン氏は詩人でもある文化人であり、私が接触したバングラデシュ側指導層の中でも特に親日的な印象の強い人物でした。

通信相の交代がシーメンス社の工作と関係があったのかどうか定かではありませんが、この交代は悪い報せではないように思えました。6 月 14 日、私は調査団の報告書提出のため来訪した業界団体の幹部を伴って新通信相を往訪し、ダッカ電話網改良計画調査報告書を手交して検討を求めました。通信相は積極的な関心を示し、至急検討すべき旨を約しました。

その後私は通信省当局と次官レベルで接触を維持し、前向きの結論を促し続けましたが、シーメンス側も前通信相を巻き込んで種々画策していた模様であり、事態は円滑には前進しませんでした。7 月末、事務当局の結論は交換機を除く部分についてのみ日本の提案を受け入れるという結論に傾き、電気通信担当次官はその趣旨の書簡を发出するという意向を私に表明しました。

その矢先に発生したのが冒頭のビマン航空機水没事故でした。犠牲者の救出ないし遺体の回収のため海軍のフロッグマンが多数投入され、徹夜の作業が行われました。カーン前通信相（農相）は海軍参謀長として現場に駆けつけ、夜を徹して陣頭指揮に当たりました。ところが徹夜作業の疲労が祟ったのでしょう、同参謀長は翌朝、心臓発作を起こして急死してしまったのです。

8 月 8 日にはダッカの仏教寺院で邦人犠牲者のための法要が行われ、続いてヒンズー教徒用の火葬場で遺体が荼毘に付されました。火葬場といっても露天の河原に鉄の枠組みを設けただけの設備であり、この殺風景な設備での荼毘は余りに生々しく、遺族の参列を差し控えてもらっていましたが、私も途中でいたたまれなくなって大使館に逃げ帰りました。翌 9 日には遺族数名が住友商事の支店長に伴われて大使館を訪れました。

母親という婦人は私から何をお話しても目を見開いたままにこりともせず、凍りついたような表情を変えなかったのを忘れることができません。その表情はわが子の死を断じて諦めきれないと訴えているかのごとくであり、母にとって息子という存在のかけがえのなさを今更の様に思い知らされたのです。年末には住友商事の伊藤社長が殉職した職員の慰霊のためダッカを来訪されました。

事故の後、バングラデシュ当局による日本提案の処理はオバイドゥラ・カーン通信相の支持を得て順調な進展を見せ、9月初旬には経済企画庁に付託されたとの説明を受けましたが、同月中旬、同氏が駐米大使に任命され、通信相の任を解かれたことで問題は再び複雑化する気配となりました。しかし翌年1月20日には私自身が帰朝のため離任することになり、新任のスルタン・アーメド通信相（海軍参謀長）に日本側提案の採択を重ねて懇請した上で後事を後任の田中大使に委ねなくてはならなくなりました。

この問題をめぐるその後の推移は東京で風の便りに耳にするだけでした。しかし田中大使の努力もあったのでしょう、ダッカ電話網改善計画はやがて日本側提案が全面的に採用され、交換機を含め NEC 製品を中心とする包括的改善工事が円借款により実施されただけでなく、引き続き追加円借款により拡大計画も実現を見たことと承知しています。

施工契約の担当商社は住友商事でした。殉職した住友商事の職員はこの計画のためにバングラデシュに出張したわけではなかったのですが、事故から派生したカーン前通信相の急死が日本側提案の全面的採用を促進する結果になったことには疑問の余地がありません。ダッカの電話施設に日本製品が中心的な役割を果たすようになった事実の陰に住友商事職員の遭難という犠牲があったことをダッカ在留邦人その他関係者の皆さんが記憶に留めて下さる事を願って筆を置く次第です。

（2004年6月24日）

## **（2）バングラデシュの対日配慮　　チョウドリ外相の思い出** **（第6代大使：田中 義具氏）**

日本はバングラデシュに対する最大の援助供与国でしたので、ダッカ在勤中（1985年5月？1988年7月）の私の仕事のほとんどは経済協力にかかわる案件の処理でした。先方はこうした日本からの援助に深く感謝し、その気持ちを具体的な態度で表すために、その得意とする国連の分野においては、日本に協力することを惜しみませんでした。当時バングラデシュは、ほとんどが開発途上国である国連のアジア・グループ内においても、非同盟グループの一員としても大きな影響力を有していました。一方日本は、まだ国連における基盤がそれほど強固ではなく、その数年前1978年の国連における選挙では、独立間もないバングラデシュと安保理の議席を争って、よもやの敗北を喫していました。

私の在勤中、日本は1986年の安保理選挙へ立候補する方針を決定しました。その結果、南アジア諸国の支援の下に同じ年安保理理事国に立候補を予定していたバングラデシュと、また争わなければならなくなりました。本国からは、何とか今回は日本に安保理の議席を譲るよう、バングラデシュに立候補の1年延期を説得せよとの訓令がきました。そこで当時のフマイン・ラシード・チョウドリ外相を訪ね、86年の安保理選挙は日本に譲って欲しいとお願いしました。先方は、「他ならぬ日本からの要請なので検討してみる。しかしバングラデシュが86年の選挙を日本に譲って、次の年に立候補しようとする、87年にはネパールが立候補する事で関係国間の話し合いがついている。バングラデシュが日本に86年の議席を譲るためにはネパールの説得も必

要である。」と答えました。

この回答を東京へ取り次ぐと、ネパールの説得もバングラデシュに依頼せよとの訓令がきました。やや厚かましいと思いましたが、再度チョウドリ外相に会って、何とかネパールの説得もお願いしたいと依頼して帰ってきました。その後しばらくの間何の音沙汰もありませんでした。その内に、誕生間もない南アジア地域協力連合（SAARC）の外相会議がダッカで開催されました。会議閉幕の日になって、突然チョウドリ外相から電話がありました。「今ネパールの外相が帰国するので、自分は空港まで見送りに行く。その際安保理選挙の話をするから、貴大使も空港まで来て欲しい。」という内容でした。

急いで空港へ駆けつけると、両外相は既に空港に到着していました。チョウドリ外相は早速ネパール外相に向かって安保理選挙の話をし、「バングラデシュは今年の安保理選挙を日本に譲ることにするので、ネパールも来年の立候補を1年遅らせて欲しい。そしてこの3国の立候補計画を、今後3年間にわたって3カ国が一致協力して支持していくことにしよう。」と提案しました。こうして「ダッカ空港での3国間合意」が成立することとなりました。バングラデシュによる特別の配慮があってなお、こうした三国間取引を快く思わない一部諸国が正式には立候補していないインドに投票する動きなどがありました。その年の安保理選挙で日本は辛うじて当選する事ができました。

次に特別お世話になったのは、1988年の世界保健機関（WHO）事務局長選挙の時でした。日本は戦後初めて主要専門機関の事務局長ポスト確保をめざして、中島氏のWHO事務局長への立候補を推進していました。その一番の山場は、30カ国から成るWHO執行理事会での選挙にありました。同理事会における各国の票争いは熾烈を極めていました。バングラデシュは執行理事国の一国でした。本国からは、バングラデシュの支持が不可欠との訓令がきました。通常の間関係機関の選挙では、バングラデシュの支持は間違いありませんでした。しかしこの時は、パキスタンからも立候補者がいて中島候補と争っていたのです。

バングラデシュは、ついその10年余り前までパキスタンとは同じ国であった間柄で、両国間は特別の関係にありました。しかも当時ダッカに駐在していたコッカー・パキスタン大使は、その後駐印、駐中国大使等も歴任し、現在は外務次官として活躍中の極めて有能な外交官で、ベンガル語を解し、任国の各界に豊富な人脈を築いて、他国の外交官の追隨を許さない活躍をしていました。

バングラデシュ外務省は中島候補への支持を表明していましたが、パキスタンは相当な巻き返しを行ったようでした。選挙が間近に迫った頃には、バングラデシュが最終的にはパキスタンを支持するのではないかとの情報が入ってきました。もう政府関係者は皆年末年始の休暇に入っていた時でしたが、チョウドリ外相に急遽面会を求めました。

チョウドリ外相はすぐ会ってはくれましたが、やはり調整にはかなり苦慮しているようでした。しかし日本へのコミットは守ると言ってくれました。88年初頭のWHO執行

理事会での投票で、バングラデシュは中島候補に貴重な一票を投じてくれました。チョウドリ外相にはこうして在任中色々とお世話になりましたが、それだけに止まりませんでした。

2000年2月私は久しぶりにダッカを訪問しましたが、すでに外務省は退官して、参与として軍縮問題に携わっていました。その頃日本は包括的核実験禁止条約（CTBT）の発効をめざして、各国への説得工作を強化していました。南アジアではこの条約の発効要件国の3国（インド、パキスタン、バングラデシュ）がいずれも批准を見合わせていました。私の仕事は、バングラデシュにこの条約の早期批准を促す事でした。

フマイン・ラシード・チョウドリ氏は当時国会議長になっていました。ダッカの日本大使館では先方外務省との正式の会談のほかに、同議長とのアポイントも取っていました。チョウドリ議長は私を喜んで迎えてくれ、私のダッカ在勤時にバングラデシュを訪問した倉成外務大臣の思い出話などをされた後、「バングラデシュとして、CTBTの批准に特別問題があるわけではない。貴方がわざわざ東京から来たのだから、自分としても出来るだけのことはしてみよう。」と言って頂きました。東京に帰ってまもなく、バングラデシュがCTBTを批准したとの公電が入りました。

チョウドリ議長はその後他界されたことを知りました。日本にとって大切な理解者の一人を失った損失は大きく、心からご冥福をお祈り申し上げます。

（2004年5月13日）

（フマイン・ラシード・チョウドリ氏は2001年7月に他界されました。）

### **（3）深夜の会談**

**（第8代大使：齋木 俊男氏）**

大使として着任して1年経った1992年3月初め、首相府から突然連絡があり、ジア首相が緊急に会いたいから夜の十時に来てくれと言われました。時刻はもっと遅かったかもしれませんが。ダッカでは「深夜」といってよい時間帯です。途上国勤務が長く、時でもない時刻に呼び出されることには慣れていましたが、これはいささか異常でした。用件は「カフコ」でした。

「カフコ」は当時の第一次ジア政権の前、エルシャド独裁政権末期に計画が出来たプロジェクトです。現地の天然ガスから肥料をつくり、それを輸出して外貨を獲得する計画ですから、本来バングラデシュの利益にかなうものですし、また国際的民間投資事業だから「ODAも投資も欲しい」というバングラ側の希望にもぴったりのはずでした。ところが新政権はストップをかけました。理由は「独裁政権が決めたことは疑わしい」ということでした。そう疑うとバングラ側には不利と思われるような条件がたくさん出てきました。

実際には、それらは「カントリーリスク」をカバーするためのやむを得ない諸条件でしたし、バングラ側が国際的な投資慣行や法理をよく知らないために生じた誤解もありました。しかし企業側による説得は難航しました。やがてバングラ政府による債務保証状の発給が緊急の問題として出てきました。バングラ側は「政府による債務保証

は主権に抵触する」と主張してその発給を留保しました。これこそまさに国際ビジネスを知らないための主張でしたけれども、そう言っても効き目はありませんでした。このギャランティー・レターなしには投融资が動き出さないのです。計画は立ち枯れになる重大な危機に直面しました。私が着任したのはその時期でした。

「カフコ」は民間事業ですが計画には一部日本の政府系資金が入っています。また丸紅を中心とする日本企業は最大の出資者ですから、危機打開のため日本大使の私が努力するのは当然でした。それに事業はおよそ 10 カ国の企業が関係する国際的な広がりを持ち、世界的に注目されていました。もしバングラデシュがこのプロジェクトをつぶすようなことをすれば、国際的信用は地に落ち ” 最貧国 ” として享有する同情も失われてしまいます。そうなれば日本による ODA 供与も困難になります。そこで私は全力を挙げて関係大臣や政府要人に保証状発給の必要性を説いてまわりました。

やってみると「のれんに腕押し」でした。大臣や要人たちは、ほかのことならともかく問題が「カフコ」と知ると逃げてしまいます。会ってくれても目立たない場所を選ぶなど極力人目を避けようとしていました。「カフコ」に反対というよりも、問題にかかわって疑惑の的になるのをいかに避けるかが要人たちの関心事でした。新政権にとって「カフコ」はまさに政治的疫病神だったのです。

このようにしてずるずると一年近くが経ってしまいました。私はあきらめず説得をつづけましたし、出先の私だけでなく、本省その他あらゆるレベルで危機打開の努力がされました。関係援助国も協力してくれました。そのうちバングラ側には「このままの状態がつづく ODA に影響が出かねない」と本気で懸念する空気が出始めました。いろいろな機会にその可能性が指摘されていたからです。筋論に立って説得を重ねる誠意もある程度通じました。

ジア首相との深夜の会談の場所は、首相のオフィスではなく迎賓館の奥まった部屋でした。時間も場所も明らかに人目を避けた設定でした。先方は首相一人。練達の官僚上がりと思われる年配の人物が通訳に当たりました。やり取りの内容については守秘義務があるけれども、結局私はこの場で首相の口から直々に「保証状を発給する」という回答を聞くことができました。感無量でした。もちろんバングラ政府としての結論は会談の前に出ていたのでしょうか。しかし会談は単なるセレモニーではありませんでした。

途上国大使ポストの良いところは、その国の最高首脳と比較的容易に会えることです。しかしサシの会談で、まして実質重要事項について首脳と直接やりとりする経験はまれにしかありません。ましてその会談相手が若くて美貌の女性首相というケースはめったにあることではないでしょう。この会談は私の外交官生活の中で長く記憶に残る出来事になりました。

「カフコ」については私の離任後もまだ相当の紆余曲折があったようです。しかし聞くところによると最近の業績は良好だそうです。これまた感無量ですし、バングラデシュのために大変喜ばしいことです。(2004年5月10日 記)  
(2004年5月27日)

#### (4)「メグナ・グムティ橋」 (第9代大使：竹中 繁雄氏)

去る5月、10年ぶりに1週間ほどダッカを訪れる機会に恵まれました。その間に私がその建設に関する日本・バングラ間の交渉に深く関わった事のあるジャムナ橋の視察を思い立ち、車で片道3時間半の道のりを往復してきました。かつてジャムナ川の橋梁建設予定地をヘリコプターで1回、ボートで1回現地視察することがありましたが、今そこには長大な橋が見事な弧を描いて立っています。川面のそばまで下りて、橋の先端が小雨に煙る遙か向こう岸に消えていく様子を眺めているうちに、記憶のかすれた10年前のメグナ・グムティ橋の開通式のことを突然よみがえって来ました。

メグナ・グムティ橋は首都ダッカからバングラの海の玄関であるチッタゴンに伸びる幹線にかかる日本の無償協力の象徴とも言える大プロジェクトです。橋の長さこそ1,400メートルでジャムナ橋には及びませんが、その国民経済的な価値に関してはバングラ国内のどの橋にもひけを取りません。

こういう大きな経済協力案件の完成式には日本から有力な政治家に来てもらうのが通例で、この時もこの日本の貢献にふさわしい方に出席して欲しいと考えて、本省といろいろ相談した結果、日本・バングラ議員連盟の三塚会長と同連盟の幹部である櫻井新、河村健夫両議員に出席してもらう事になりました。日本からの出席者も固まり、開通式の準備が着々と進みましたが、その過程でバングラ政府側から出て来た式次第の原案を見てみると、式場のひな壇には三塚会長と私だけしか着席できないことになっています。

私としては、スピーチはこの2名だけにしてもひな壇の着席者については日本から折角やってこられた議員全員が何とかその中に加えられないかと思い、館員に色々交渉してもらいましたが、バングラ側の態度が固く、一向に埒があきません。そこでほかに打ち合わせたい話もあって、開通式の数日前に私がオリ・アーメッド道路大臣のところへ乗り込み、直談判することになりました。

こちらの要望に対する道路大臣の反応はバングラ側にも壇上に乗せろと要求する有力者が多く、それらを何とか抑え込んでいる状況にあるので私の要望についても勘弁して欲しいというものでした。相手の事情はよく分かりましたが、ここで完全撤退するのも芸がありません。そこで私の方から「自分のアイデアは断念するが、その代わりにあなたのスピーチの中でお2人の貢献について言及してくれないか」と代案を出してみましたところ、「そちらが英文でその部分を書いてくれたら、それを読み上げても良い」とも前向きな返事を得ました。私は早速事務所に帰るとお2人とその2人に代表される日本・バングラ議連のメンバーの皆さんの二国間関係発展への貢献振りを文章にしたため、大臣の所に届けておきました。

さて、開通式の当日は日本の初秋を思い出させる様なカラッと晴れ上がった絶好の天気です。この日の為に急拠作られた特設の会場は2,000人を超えると思われる出席者で立錫の余地もありません。ヘリコプターでダッカから駆け付けたジア首相が会場前方に作られたひな壇を登るとすぐにイスラムのお祈りが会場に流れ、式典が始まりま

した。まずはプロジェクト完成にいたる経緯の報告があり、それから関係者の演説が続きます。日本大使の私のスピーチの後がいよいよ道路大臣の出番です。

アーメッド大臣は最初の 20 分ほどベンガル語で話していましたが、流石に政治家だけあって話がうまく、それに観衆が反応している様子がベンガル語の分からない私にも手に取るように分かりました。話が一段落すると大臣は会場最前列に坐っていた日本からの来賓 2 人を手招きで壇上に誘い、2 人がプラットフォームに上がった所を見計らって会場に向いてふた言み言語りかけました。すると会場を埋め尽くした大観衆から 2 人に向かって一斉に大きな拍手が起こるではありませんか。

議員の先生方も観衆の方を向いて両手を大きく振ってこれにごく自然に応えたことは言うまでもありません。これに呼応して拍手はますます大きくなり、こうした壇上と観衆とのやり取りの中でついに拍手は会場を揺るがさんばかりになりました。結局この時がこの日の式典の中でも最も印象的で、盛り上がった場面となりました。アーメッド大臣は私の作った官僚的な作文よりもはるかに効果的にバンガラ人の心をつかむ術を知っていたのです。

1 つの橋が、単にその両側の岸を結びつけるだけでなく、二つの国の人々の心までを結びつける効果も生めるのだと実感し、経済協力担当者の喜びを噛みしめることのできた一瞬でした。櫻井議員は現在は議連の会長代行として、河村議員は文部科学大臣としてそれぞれ活躍しておられることは読者の皆様のご承知の通りです。

(2004 年 7 月 8 日)

### (5) バングラデシュ：繰り返される政情不安のシナリオ

(第 10 代大使：金子 義和氏)

私は 1995 年 11 月から 99 年 9 月まで、3 年 10 ヶ月の間バングラデシュ大使を勤めさせて頂きました。今回、私の在任中のエピソードなどを書いてほしいと依頼を受けましたので、隠遁生活に慣れきった頭を切り替えて当時を思い起こしてみることにします。

私の在任中はバングラデシュでは実に色んな事がありました。反政府運動がピークに達するなかの信任状奉呈(ちなみに離任時の大統領への挨拶の時もハルタルでした)、KAFCO 問題、ハシナ首相と外相の訪日、ジャムナ橋開通式典等々忘れられない出来事が数多く想起されます。ここでは、しかしながら、着任時の政情不安な中での出来事に絞って記したいと思います。

91 年 2 月に発足したジア政権に対して、数年を経ずして国民の色んな不満が徐々に高まってきますが、野党アワミ連盟は、94 年 3 月の補欠選挙の不正を契機に、次期総選挙の実施方法を反政府運動の主眼として、ジア首相の退陣を求め強烈な反政府運動を展開します。そして、95 年を通じハルタル、鉄道・道路封鎖、デモ等が日常茶飯事のごとく頻発され、バングラデシュの経済活動は麻痺状態となっていきました。ジア政権は、事態の打開を計るべく 11 月には議会を解散し、次期総選挙を 96 年 2 月に行うと発表しますが、野党はジア首相の下での選挙を拒否し、選挙管理内閣の樹立を主張して対立はさらに激化しました。

この間私は、米、英、仏、独、伊、豪の大使とともに野党のハシナ総裁とジア首相を訪問して総選挙への参加、話し合いによる解決を呼びかけましたが、両者の話し合いは実現せず、野党がボイコットする中で2月15日に総選挙が行われ、当然のことながらジア首相の与党が圧勝しました。野党はこの選挙を「茶番」と嘲笑、翌日から1ヶ月にわたる「非協力運動」を宣言して、休日以外は毎日がハルタルの状況となりました。

さらに、選挙を監視したNGOが選挙に不正があったと発表し（投票率の改ざん等）、これを問題視した西側各国大使までが選挙結果を認めがたいと非難しました。与党だけが参加する選挙で不正とは不可解ですが、この時点での反政府運動の高まりは、このような指摘を受け入れるべくもなく、総選挙は「茶番」とする見解が大勢を占めるに至りました。（ジア首相は、しかし、総選挙後の議会で、選挙管理内閣の下で総選挙を行えるよう憲法を改正した上で国会を解散し、最後まで筋を通したのは立派でした。その後2001年の総選挙ではハシナ首相が選挙管理内閣を非難する事態となりますが、まことに皮肉なことです。）そして政治、経済の機能麻痺状態はさらに悪化し、外国企業の撤退も不可避の状況となりました。

チッタゴンの輸出加工区の日本企業も港の長期間封鎖で輸出が滞り大打撃を受けました。私はチッタゴンの日本企業、邦人の安全につき政府ではなく、野党のハシナ総裁に申し入れを行わざるを得ませんでした。ちなみに事態改善後に日本企業の輸出が優先されたことは、ハシナ総裁への働きかけも一因だったと思っています。

邦人企業からいつまでこんな状況が続くのかとの悲鳴に似た質問を受けた時に、「あと一週間待ってください」と答えましたが、根拠のないものではありませんでした。事実このような事態が続くわけもなく、3月末に至り国家公務員がストに突入し、次官の何人かが反政府デモに参加するなど、行政が機能しなくなり、ジア政権が崩壊しました。

96年6月の総選挙でハシナ総裁が勝利しましたが、総選挙では、ハルタルに専念して経済を悪化させた野党が悪いのか、野党の勝手なハルタルに無策だった政府が悪いのかが争点となったと言えます。今日現在バングラデシュから聞こえるニュースの現状が95年末に酷似しているように見えます。現政権は政権死守に努めるだろうし、ハルタルに強いアワミ連盟の攻撃は激化するでしょう。そして結局は、過去と同じような進展となる恐れが高いのではないのでしょうか。日本企業もハルタルに辟易しつつも、過去に学んで自衛策を講じてほしいと願わざるを得ません。（2004年4月29日）

## **（6）バングラデシュ：総選挙に思う** **（第12代大使：小林 二郎氏）**

ダッカを離れて一年になりますが、在任中の前半（2001年）は総選挙の年にあたり与野党の政権交代を目にし、また後半（2002年）は日本・バングラデシュ友好30周年を祝賀する機会に恵まれました。ここではバングラデシュの政治について感じた一端を記してみます。

「バングラデシュは何と政治色の強い国であろうか」というのが赴任した頃の率直な印象でした。全てが二大政党対立構造の中で捉えられる国柄に驚きました。与野党対立の激しさ、あの銅鑼・太鼓をたたいての選挙キャンペーン、「人」を見ると常に「どちらの系統に属するのか」という目で見勝ちなのはどういうわけか。「バングラデシュは未だ30歳の若い国ですから」とか「Winner takes all. という南アジア特有の政治力学が働いているからです」との説明を聞いても、実際に総選挙で政権が入れ替わり、政府の要職にあった官僚達の殆どが軍・警察を含め、2?3ヶ月のうちに入れ替えられていくのを目のあたりにするまでなかなか信じられませんでした。「今日でお別れです」と言って次々と去っていく友人に複雑な思いを抱いたものです。

2001年4月、ハシナ首相がラムナ公園での爆破事件で負傷した人を病院に見舞っているJapan Timesの写真を目にしながら赴任したのを思い出しますが、当時既に選挙戦は終盤を迎え熱気を帯び、各地で爆破事件が相次ぎ与野党の非難合戦とハルタルによる攻防が繰り返されていました。

着任後の与野党首脳への表敬訪問でも、「日本からも選挙監視団を送ってほしい」との要望が出されましたが、正直言って個人的には若干戸惑いの感を拭えませんでした。それというのも「選挙は自分達で立派にできるから、外国からの監視団などは不要です。」というのが一般的な反応ではないかなと思っていたからですが、この点をバングラデシュの友人にぶつけてみると、「まだそこまでバングラデシュの民主主義は成熟していません。それまでには未だ時間がかかります。もう少し長い目で見てください。」とのことであり、自分の不明を恥じた次第です。

ハシナ政権は憲法の規定に則り7月の任期満了で退陣し、その後の選挙管理内閣を経て、10月1日に総選挙が行われました。結果は5分5分との事前の大方の予想に反し、議席数ではBNP野党連合の圧勝でした。尤も、得票率では互角でしたが、小選挙区制であるために、議席数では大きな差となったようです。

9.11の余波で治安が懸念されましたが、結局わが国からは桜井新参議院議員(日・バ友好議連副会長/当時)を団長とする選挙監視団にお越しいただき、ダッカ市内と郊外で監視活動をしていただきました。自分も同行して幾つかの投票所を廻って見ましたが、女性の姿が目立ったことと皆整然と並んで投票している姿が印象的でした。桜井団長には「選挙は概ね自由且つ公平に行われた」との結論をいただき、記者会見で発表していただきました。EUなど他の諸国の監視団もほぼ同様の見解であり、これらの意見はその後の政権交代と政治に一定の役割を演じたものと考えます。選挙結果の大勢が判明した選挙翌日、桜井団長は与野党の党首をそれぞれ自宅に訪ねましたが、両総裁とも快く応じてくれました。ジヤ総裁との会見は夜10時過ぎの遅い時間帯であったにも拘らず、「疲れた」と言いながらも笑顔でお会いいただいたのが印象的でした。

あれから既に2年半、現政権の任期も後半に入りましたが、再び選挙戦は昂じていくのでありましょう。30年で世の中は変わるとの説があります。そろそろ外国の選挙監視団など要らない選挙を立派に行い、自立した姿を世界に示して欲しいと願うものです。(2004年6月10日)

### 3 . 特別寄稿

#### (1)「砂と水の国」でおいしい飲み水を創る (アジア砒素ネットワーク・ダッカ事務所長 川原一之氏)

1998年に世界銀行援助のプロジェクト(BAMWSP)が音頭をとって、砒素汚染対策が始まった。それから6年、緊急対策から長期対策の時期に移ろうとしているが、安全な水確保の活動は、多くの試行錯誤をへて、なお納得のいく結果は得られていない。技術の問題に行政システム、社会システム、経済的な問題がからんで、簡単にはいかない。

私が初めてバングラデシュの砒素汚染地を訪ねてから、7年がたった。砒素を含むチューブウエル(管井戸)に替わる、代替水源の普及を第1の仕事にしてきた。困難な経験を通して思うのは、「安全な水」であることをわかってもらうのは難しいが、「おいしい水」は喜ばれるという単純な事実である。アジア砒素ネットワークは、柵で囲った池に水を貯え、砂利と砂のろ過装置(ポンド・サンド・フィルター)を通して飲料水を創る方法を推奨してきた。この水を飲んだ人が「ポンド・サンド・フィルターの水はおいしい」「チューブウエルをやめてポンド・サンド・フィルターに替えて、腹にガスがたまらなくなった」という話を広めて、2キロも3キロも離れたところから、自転車をこいで汲みに来る人もでている。

ポンド・サンド・フィルターは、建設費が高いこと、池を提供する人がいないこと、乾季の末期に池の水がなくなることなど、いろんな壁にぶつかっている。それでも「安全」に加えて「おいしい」水であることをわかってもらうことで、普及させたいと願っている。このイード休暇に、シレットで飲んだおいしい水。インドの山からくだって、ゆっくりゆっくり地下を流れるうちにうまれる、ミネラルを含んだ甘い水。それに近い水を、緩速ろ過(スローサンドフィルトレーション)によって創ってみたいと思う。(2004年2月19日)

全文は以下のサイトに掲載しています。

<http://www.bd.emb-japan.go.jp/mag190204.htm>

アジア砒素ネットワークについては以下のサイトをご覧ください。

<http://www.asia-arsenic.net/>

#### (2)国際ヨットレースからストリート・チルドレンへ (NGO エクマット口代表 渡辺大樹氏)

(渡辺さんは帰国留学生会(JUAAB)・大使館共催の「外国人によるベンガル語スピーチコンテスト(2月21日、於:ダッカ大学)」で見事優勝されました。今回の特別寄稿はその時にベンガル語で話された内容を元に書いて頂いたものです。)

2001年12月、当時大学4年生でヨット部に在籍していた私、渡辺大樹は、最後に国際ヨットレースに出場する機会を得て、その開催地であるタイに行きました。これがそもそものきっかけでした。

ヨットというスポーツの性格上、周りは世界中から集まった大金持ちばかりで、そのため毎日豪華パーティーが開催され、移動もまた超豪華2階建てバスという生活、これが1週間以上も続きました。その何日目でしょうか。いつものようにレースを終え、2階の窓際に座りバスで移動していた私の目に、脇に広がる巨大なスラムが目に飛び込んできました。そしてスラムの入り口のところで、こちらを見上げているみすぼらしい格好をした男の子。その彼とふっと目が合ったのです。そのとき大きな、大きな衝撃が私の中を突き抜けていきました。

‘なぜ俺はこんな豪華なバスから彼を見下ろしているのだ？’

‘なんであの子はあんなみすぼらしい格好で俺を見上げているのだ？’

‘俺は努力に努力を重ねたわけでもなければ、あの子は怠け人生を放棄したわけでもない。’

‘たまたま日本に生まれた俺と、たまたまタイのスラムに生まれたあの子。ただそれだけ。それだけについてしまうこの差。自分は自分次第でなんにでもなれた。気が遠くなるような選択肢が目の前にあったのだ。でもあの子は……。タイのスラムで生まれた瞬間にほとんど選択肢が残されていない。頑張っても、いくら努力しても抜けられない、まるで蟻地獄……。’

そしてそれから一年後、一年経ってもあのときの衝撃は消えるどころか日に日に大きくなり私を突き動かしつつありました。そしてこの衝撃を形に変えたい、そう決意しやってきたのがバングラデシュでした。幸運にも、バングラデシュ人の中でも同じように何かしなければという強い信念と行動力を持った仲間たちと巡り合い、彼らと経験の共有と議論を重ね、特にストリート・チルドレンに対する活動をはじめ決意をしたのです。

私たちはストリート・チルドレンと聞くと‘路上で生活しているかわいそうな子供たち’、というひとつのイメージで捕らえがちですが、実はそうではなくさまざまな子供たちが存在するのです。私たちがこのプロジェクトで取り上げている路上娼婦の子供たちというのは、その中でももっとも悲惨な立場に置かれているグループのひとつといえるでしょう。なぜなら彼らは小さいころから父親の愛情を受けずに育ち、母親の職業のせいで差別される。また、夜中に起きた子供が隣で母親が仕事しているところを見つけてしまうこともあるのです。

考えてみてください。このような環境でいったい誰がまともな大人になれるのでしょうか。彼らの失いつつある意欲をかき立てるため、人間として生きる希望をもたすため、そして彼らに自分の手で未来を切り開く勇気を与えるため……。私たちは活動をはじめたのです。私は夢見ています、いつか彼らが一人の人間として社会から正當に扱われる日がくることを。(2004年3月4日)

### **(3) ニームクラブのポリオ接種デー体験記** **(ニームクラブ 矢嶋ルツ氏)**

ニームクラブは、ダッカ在住の主婦を中心に「バングラデシュ理解とバングラデシュでの生活を楽しむために見聞し、体験し、行動すること」を目的に活動しています。

定期的に NGO の見学やマザーテレサ・ホームの訪問を行い、今年に入ってからアシッド・サバイバル・ファウンデーションやユニセフ見学など活発に活動しています。

2月29日には全国ポリオ接種デーに参加しました。この活動は2000年11月以来地元ボランティアと協力して続けています。日本はポリオワクチンの資金援助や協力隊員の派遣など協力していますが、今回は実際にどのような活動が行われているか事前にシニア協力隊員の泉田さんからお話をお聞きしました。

全国ポリオ接種デー当日は、街の各所に赤ちゃんが描かれた黄色い旗を掲げた臨時接種所が設けられ、お母さんやおばあちゃん、小さな兄妹に連れられた子供達が朝早くからやって来ます。新生児から5歳児にポリオワクチンを(今回はビタミンAも)飲ませ、終わった子供の手には印をつけます。初めは「言葉が分かるかしら」と不安げだった参加者も気がつく「一列に並んで」「ミスティ(おいしいよ)」と子供達に声をかけています。泣き出した子供もニームクラブの現役お母さんにあやされてにっこり。接種所の近くを「ポリオだよ、まだの子はいる?」と呼びかけて歩くとたくさんの子供達が一緒に呼びかけてくれたり、おじさんが子供のいる家に案内してくれたりとみんなとても好意的です。いつもは車の窓から眺めるだけの街も、そこに生活する人々の顔が生き活きと見えます。おもしろかったことに子供の年齢の見分け方があります。手で頭越しに反対側の耳をつかめたらその子は5歳以上でポリオワクチンを飲まなくて良いのです。

これまで見学者を含め50人以上の日本人女性がポリオ接種デーに参加してきました。バングラデシュでは2000年を最後にポリオが発生していません。バングラデシュでポリオ撲滅宣言が出された時、日本人もポリオ対策に参加したことの実感を持って喜ぶことができるのは価値あることだと思います。(2004年3月18日)

ニームクラブは、当地に在住する邦人女性の方を中心とするボランティアグループです。会費は毎月50タカです。

#### **(4) バングラデシュの総合雑誌『遡河』を編集して (広島大学大学院国際協力研究科助教授 外川 昌彦氏)**

『遡河』(そか)は、ベンガル語文学の翻訳家としても知られる鈴木喜久子さんが1988年に創刊したバングラデシュの社会と文化に関する専門誌で、以来、年に1回のペースで刊行が続けられています。

もともと、バングラデシュと関わりのある方々の寄稿によって編集される同人誌でしたが、様々な分野で日本とバングラデシュの交流が深まることで、やがて読者の裾野も広がり、日本では唯一のバングラデシュの総合雑誌として知られるようになりました。

寄稿者の皆さんとバングラデシュとの結びつきは様々ですが、誰もがバングラデシュとの関わりを深めるにつれ、知らず知らずに愛着やこだわりを持つようになるようです。とかく貧困や開発と結び付けて語られることの多い日本でのイメージとのギャッ

プに、戸惑いを覚えることも多くなりました。

筆者もまた、まだ大学生の頃にバングラデシュを訪れて以来、その不思議な魅力に取りつかれ、気がついたらバングラデシュと関わる仕事をするようになっていました。そして、今ではこの『遡河』の編集が、数少ない仕事の息抜きとなっているような毎日です。

『遡河』は、そんなバングラデシュの人々や社会を、様々な形で日本の読者に紹介することを目的に刊行されています。バングラデシュについてこれから知りたいと思っている方にも、またバングラデシュに深いこだわりを持っている方にも、興味の持てる内容となっています。13号からは、編集部の若返りをはかり、また紙面のレイアウトなども一新することで、一層の内容の充実に努めています。

このたび刊行された最新号(第14号)では、「バングラデシュの歴史と文化」という特集のもとで、尽きないバングラデシュの魅力を紹介しています。また、話題の映画紹介やダッカの最新情報、連載読み物なども掲載しています(『遡河』第14号・目次は下記をご参照下さい)。

これまで刊行された『遡河』のバックナンバーの目次は、最新号の巻末に紹介しています。また、インターネットでも公開されています。『遡河』の購読のお申し込みやバックナンバー等に関しては下記のアドレスをご参照下さい。

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~folk/Soka-bak.htm>

『遡河』編集部では、読者の皆様の感想やご意見を取り入れつつ、紙面づくりに反映させたいと思っています。また、様々なバングラデシュとの関わりを通じた『遡河』への寄稿も歓迎しています。この機会に、定期購読をお勧めします。

(2004年4月1日)

< 『遡河』第14号・目次 >

特集・バングラデシュの歴史と文化

グラビア写真 現代バングラデシュ絵画の形成より

鈴木喜久子 バングラデシュのカトリック(1)? ポルトガルの支配時代?

重松伸司 「たいが」の文明、「おおかわ」の文明

白田雅之 現代バングラデシュ絵画の形成

谷口晋吉 18? 20世紀ベンガルの富農層研究についての覚え書き

小野理恵 バングラデシュ農村の女性の知恵 しとやかさとしたたかさ

南出和余 バングラデシュ初等教育の歴史

ハリマ・カトウ作/前村恵訳 チョラ 迷子の小さなトリのひな

福井宗芳 渡辺天城上人の一周忌

高田峰夫 FEER 事件が物語るもの

矢嶋ルツ 映画『マティル・モイナ』(タレック・マスッド監督)の紹介

外川昌彦 ベンガルの季節めぐり(2)

藤原敬介 ムル人の文字

岡田菜穂子 第一回日本人によるベンガル語スピーチコンテスト

<書評>

バングラデシュへの扉を開く・『花の香りで眠れない』

フマユン・アザド著 鈴木喜久子訳 渡辺一弘

『バングラデシュを知るための60章』

大橋正明・村山真弓編 平山雄一

### (5) パン・パシフィック・シヨナルガオン・ダッカ 813号室から

(パン・パシフィック・シヨナルガオン・ダッカ副総支配人 小松 学氏)

私が副総支配人としてパン・パシフィック・シヨナルガオン・ダッカに着任してまだ間もない昨年5月、国際会議のVIPを送るためにホテルの宴会玄関でスタンバイしていると、ダークグレーのパリッとしたスーツを着こなし、こちらのトップクラスのビジネスマンという雰囲気紳士が、「このホテルは私とゴトーさんとで作ったんだ。」と日本語で話かけてきました。「ゴトー」は、私が入社したときの東急グループの五島昇会長のことだとすぐにわかりましたが、果たしてこの紳士はだれなのか、ホテル建設に取り掛かるまでの苦労話を5分ほどお聞きしてもまったく見当もつかず、そのまま紳士はバングラデシュの国旗をつけた車にて立ち去ってしまいました。結局、その車のドアを閉めたドアマンに聞いて、メルセデス・カーン外務大臣だとわかりました。

正式には、国際経済協力基金(現JBIC)によってバングラデシュ政府にホテル建設資金の融資がなされ、当時、日本・バングラデシュ協会及び日本・バングラデシュ議員連盟の会長であった早川代議士の尽力によって、ホテルの海外進出を始めていた東京急行電鉄の2代目社長の五島昇にホテル運営の打診があった、とのこと。日本のODAのプロジェクトとしては珍しい、世界の最貧国に国際級クラスのホテルを建てるというプロジェクトを実現したのがこのパン・パシフィック・シヨナルガオンです。パン・パシフィックというホテルブランドは、五島昇が1970年代から提唱した環太平洋経済圏を起源としています。

日本の開発援助の目に見える成功例としてこのホテルは、バングラデシュの迎賓館の役目を23年間担ってきました。クリントン米国大統領、ムシャラフ・パキスタン大統領、メガワティ・インドネシア大統領、クマーラトウンガ・スリランカ大統領などの国家元首、ソフィア・スペイン王妃、マリア・テレサ・ルクセンブルグ大公妃などのロイヤルファミリー、オードリー・ヘップバーンなどのUNICEF親善大使などの世界的な著名人が宿泊したのが最上階の最西端に位置するインターナショナルスイート813号室です。

バングラデシュの受け入れ側の責任者と、宿泊するVIPの事務方とのやり取り。もうほとんどの国では行われなくなったVIPへの食事検分(毒見)を厳密に行おうとするバングラデシュのドクターと、熱いものを熱いまま食べてほしい熱血シェフの対決。ここでは書けないようなこの部屋のお客様にまつわるエピソードが、いままでの一年の間の私の勤務中にも生まれました。

この部屋に泊まっているVIPと話す機会がある毎に必ずといっていいほど聞きたくて

も聞けなかった質問があります。

“ お部屋からの眺めはいかがですか？ ”

1995年この部屋に泊まったヒラリー・クリントンがその著書“リビング・ヒストリー”で、その質問に答えてくれました。

I could see a wooden fence that ran between shanties and garbage heaps on one side and the swimming pool and cabanas where visitors like me could enjoy a drink and a swim on the other. It was like looking at a stereopticon of the global economy. ( 宿泊先のダッカのホテルの窓から木製の柵が見えた。それを境にして向こうには掘っ立て小屋とゴミの山。こちら側にはプールと脱衣所があり、私のような旅行者がお酒や水浴びを楽しんでいた。まるで世界経済をステレオ幻灯機に映して見ているような眺めだった。( 酒井洋子訳 ) )

この本を読んだ後、外務大臣に聞いてみたいことが、ひとつ増えてしまいました。( 2004年4月15日 )

#### ( 6 ) チッタゴン丘陵地帯の問題に取り組む日本の NGO ( NGO ジュマ・ネット 下澤 嶽氏 )

チッタゴン丘陵地帯はバングラデシュの南東部に位置し、ムガル帝国以前より、モンゴロイド系の住民が焼き畑農業を中心として定住してきました。人口の1%にも満たない11とも13ともいわれる民族がそこでは暮らしています。しかし、平野部にすむベンガル人との接触が徐々に増えるとともに、先住民族との間に緊張関係が高まってきました。

バングラデシュ政権になってから強い政治的抑圧が続き、とうとう武力抗争が始まりました。人々への抑圧は厳しく、拷問、レイプ、虐殺、土地の収奪など厳しい状況が続いてきました。またバングラデシュ政府の政策により平野部より入植者が移住するようになり、状況はさらに複雑になっていきました。現在人口の半分がベンガル人という状態です。

長い抗争の末、1997年に先住民族と政府との間で和平協定が結ばれました。しかし、残念ながらその内容はほとんど実施されないままです。昨年8月には、ベンガル人入植者と軍が一体となった襲撃事件がモホルチョリで発生し、400世帯近い家が焼き討ちにあいました。このように、紛争がいつ再開するかわからない状態が続いています。

バングラデシュに関心をもつ日本の NGO や個人が増えてきましたが、残念ながらチッタゴン丘陵の問題はあまり知られてはいません。ジュマ・ネットは、こういったチッタゴン丘陵問題の現状を平和的解決に向けていくよう有志やグループが2002年に集まって作られたネットワークです。これまで進めてきた活動は、日本市民に状況を知らせる場づくりや学習会の開催です。

昨年は現地からスピーカーを招いてシンポジウムを開催しました。最近では、襲撃事

件のあったモホルチョリの復興事業として、農業機械や種、毛布、教科書配布などの支援を行ないました。将来的な活動として、緊張関係の高まっている場所へ日本からの平和ミッションを派遣、チッタゴン丘陵白書の発行と配布（これは日本の政府や関係者の方々に配布したいと思います）そして日本政府や援助関係者の方々との懇談会などを開いていければと思っています。

平和や権利を叫ぶだけでなく、双方の立場にたった具体的な提案や、ODAの平和利用、多様な国際機関の調整などを徐々に実現していけたらと思っています。また、平和のための戦略ペーパーも先住民族の人々と共に作れたらと思っています。まだボランティア中心の会ですが、本年度からは事務所を置き、アルバイトが置けるぐらいの規模の活動にしていきたいと思っています。どうぞ皆さんこれからもアドバイスをお願いします。（2004年4月29日）

### （7）バングラデシュ人気質 （ダッカ日本語学校校長　ブイヤン　和子氏）

日本人でバングラデシュに数日間でも滞在したことのある人なら、一度はバングラデシュ人から「是非我が家に遊びに来てください。」とか、「我が家で食事してください。」等と誘われた経験があると思います。時として、それが初対面の人であったり、あまり親交のない人であったりすれば、日本人である私達は、何か下心でもあるのではないかとつい疑ってしまいます。

これについて考えられることは二つ、一つはバングラデシュ人は一般的に、元来の人懐っこい気質に加えて、日本人に対して特別な好感を持っており、他のどの国の国民に対するより親近感を抱いていること。もう一つはこの国の人々が、大のもてなし好きであることです。

田舎の貧しい人達、町の低所得層の人達でも、普段は質素な生活をしていても、客に対しては、人から借金してでも最高のもてなしをしようとします。それはほとんどの場合見栄などではなく、客に喜んでもらいたい一心からなのです。

それにしてもこの国の人々は人寄せが好きです。結婚式（町の中流クラスの平均的な結婚式でも招待客は300? 400人を下らない）は元より、子供の誕生日、アキカと言う命名式、結婚記念日、その他機会あるごとに親類縁者、友人、知人等大勢の人を招いて大振る舞いをします。

バングラデシュの社会にはまた、赤ちゃん誕生、就職、卒業試験や国家試験で良い成績を修めた時などの家族の慶事に、親類縁者や日頃親しくしている人達に、ミスティーというみんなの好物の甘いお菓子を配り、一緒に喜んでもらい、またこれからの幸運を祈ってもらう習慣があります。祝ってあげたい人が入学祝い、就職祝い等をあげる日本の習慣とは逆であるところがおもしろいと思います。

もう一つ私達日本人にとって興味深いことは、バングラデシュ社会では友人同士でも割り勘ということほとんどしないことです。学生の間でも、仲間同士でいっしょに

お茶を飲みに行き、各々が自分の飲み食いした分を支払うことはほとんどなく、その内の誰かが全員の分を払う形になります。それはその日みんなを誘った人であったり、その時お金を持ち合わせている気前のいい人であったり、親分肌の人であったりする訳だけれど、その人はそのためにたとえ財布が空になっても、みんなにおごってあげたという満足感で心は十分満たされるのです。

しかし、こうなると往々にして、人によっては「ギブ・アンド・ギブ」あるいは「テイク・アンド・テイク・アンド・テイク」になってしまう訳ですが、そんなことは両者のどちらも気に留めません。

バングラデシュ人のこのもてなし好き気質は、同じ民族であるコルカタに代表されるインドの西ベンガル地方の人とは全く異なる故、これはやはりバングラデシュ人特有のものらしいのです。(2004年5月27日)

(ブイアン和子さんは1974年よりバングラデシュ工科大学で希望者に対する日本語講座を開始され、76年からは現「ダッカ日本語教室」(72? 95年までは「大使館日本語講座」として開講)にて、のべ1300名の卒業生を送り出し、30年間にわたり当地で教鞭を執られ、バングラデシュにおける日本語教育の振興に貢献されてきました。今後の更なるご活躍を期待しております。)

#### **(8) バングラデシュの「日本のバス」** **(豊田通商・ダッカ駐在員事務所長 阿辺 剛氏)**

自家用車は勿論、鉄道網もまだ限定的なバングラデシュでは、全土への移動を可能とする唯一の交通手段として「バス」が国民の「足」となっています。昨今では道路整備も進み、更に日本等の援助で建設されたメグナ橋、ジャムナ橋、パクシー橋など大河を跨ぐ橋の開通により、東西南北を結ぶノンストップ長距離バスなども登場、バスを使えばどこの町・村へも1日で辿り着くことができるようになりました。

これらバスを見ると、多くがお馴染みの日本メーカーのロゴをつけています。しかし、あの独特なデザインと傷だらけのボデーを見て「日本のバスだ」と言って信じる日本人は少ないでしょう。ところが何を隠そう、長距離都市間バス(ダッカ? チッタゴン間等)では8? 9割、市内/近距離運行のミニバスでも約3割が、「日本のバス」です。

但し「日本のバス」と言っても、完全な「日本製」ではありません。バスは、エンジンを含むシャシ(フレーム)部分のみCKD(バラ部品)形態で日本から輸入され、当地でシャシ部分を組立てたところでバスオーナーに販売されます。バスオーナーはシャシを地元のバスボデー業者に持ち込み、希望のバスボデーを架装します。バスボデーは一般的に3? 5年が寿命となる為、大手バスオーナーは3年程度でバスを転売し、また新しいシャシを購入します。

一方、中古を買い取ったオーナーはバスボデーのみそっくり載せ替え(或いは修理・改良し)再生します。バスオーナーは資金力に応じて何代目の中古バスを購入するかを決めればよく、こうして転売を繰り返しながらもバスはスクラップされることな

く未永く使われます。85年に当地で輸入された日本メーカーのバスが最近まで走っていたのも事実です。

さて、上述のようなバスであることから見た目は「バングラ製」となるわけですが、どこの国でも大体バスの基本的な形は似ているものです。しかしバングラのバスは「何か」違います。

最近当地バスボデーメーカーと共に「バスの見た目改善」会議を行いました。その席で、日本側から「ヘッドライトの位置が高すぎ、ずんぐりむっくりな顔付きになっている。テールランプも屋根に近い位置で格好悪い」「サイドウインドーが家の窓みたい」との意見が出たのに対し、バングラ側からは「ライトの位置は、リキシャ、ベビータクシー、更に他のバスがぶつかってきても破損しないように高い位置につけないと、バスオーナーが納得しない。リアランプは手の届くところだと盗まれる」、窓については「石跳ねなどでよく割れる為、どこでも売っている物を採用しないと、これもまたバスオーナーが納得しない(恐らく今主流なのは一般住居洗面所用の窓)」と、日本側の指摘を跳ね除けました。

ある意味、納得してしまいましたが、窓はともかく、あらゆる乗り物が「ぶつかる」ことが大前提なのはさすがバングラです。(日本からの中古バス完成車が当地であまり流行らないのは、こうした「予想される不測の事態」に対応できないのも一因です。)

しかし、最近ダッカ? チッタゴン間では欧州ブランド(インド組立)の豪華バスが走り始め、バスオーナーからも、「見た目」や「旅の快適さ」を気にする声を聞くようになりました。近い将来、外国人でも「快適な」バスの旅ができる日がくるものと期待しています。また、国策としてCNG(圧縮天然ガス)バスの導入が推し進められる等、バス業界にも新たな動きが出ています。バスセクターのCNG化は近隣アジアの天然ガス埋蔵国では以前より叫ばれておりましたが、具体化はインドに次いでバングラデシュが2番目でしょう。意外なバス先進国に成長するかもしれません。

最後に余談ですが、よく「アバビルナバナ」とカタカナで書かれたバスについて質問されることがあります。あれは上述「日本のバス」を使った最大手の民間「市バス」会社、「アバビル」社が運行するミニバスです。バスは全て2002年度以降日本から輸入した新車!(見た目は信じられないでしょうが・・・)バス販売代理店の営業担当者が日本での留学(?)経験を活かし、カタカナで「アバビル」のロゴを作成させました。ついでに代理店の名前「ナバナ」も入れてしまったのはご愛嬌ですね。

(2004年6月10日)

## (9) 日本トレードショー 顛末記

(ジェットロ・バングラデシュ事務所長 西川 壮太郎氏)

不安におびえ眠れない夜・・・

終わってみれば、日本トレードショー(主催:ジェットロ)は、大成功だったと言えるかもしれません。目標としていた米国トレードショーの2倍近い来場者を獲得し、成約額(スポットセールを含む)は、分かっている範囲だけでも1億6千万タカ(約2

億3千万円)を超えました。出展企業の96%が「また次回の日本トレードショーにもぜひ参加したい」とアンケートにお答えいただきました。

しかし、ここにたどり着くまで、不安におびえ眠れない夜を何度も迎え、一体何回全てを投げつけてキャンセルしようかと真剣に考えたか数え切れません。二歳の娘よりも寝つきがよくて、いつも妻からうらやましがられている(あきれられている?)私が眠れなくなるとは予想もしていませんでした。

#### 裁判沙汰?

全ての間違いは、担当イベント業者の選択から始まりました。実は今だから言えることですが、この業者は不払いを理由に私(ジェットロ)を裁判に訴えようとしていました。

展示会を開催するには、様々な準備作業がありますが、最初の作業は出展業者を集めることです。「月×日までに社を集める」という契約になっていたのですが、この業者はそれを達成できませんでした。業者との会議の席上で「達成できなかった以上、全額支払うわけにはいかない」と私が述べた途端、ドアが壊れるほど思いっきりボタンと閉めて、立ち去ってゆきました。

翌日からこの業者に別件の用事で連絡しても、まったく返答なしの姿勢が10日間以上も続き、調べたところ、毎日、同社の顧問弁護士を呼んでジェットロを不払いで訴える手続きを進めているとのこと。心臓が飛び出るくらい(?)驚きました。

私は売られた喧嘩は買う性分の江戸っ子です。当方の落ち度はありませんし、「だったら、こっちから逆提訴してやる」と決意したのですが、以上の経緯を私が当国で最も尊敬しているH氏に相談したところ、「裁判で勝っても、あなたの立場としては負けます(裁判に時間が取られ、展示会は滅茶苦茶になる)。ここは負けて、勝ちなさい(業者に全額支払って、展示会を成功させるべき)」とアドバイスを受け、泣く泣く方針を転換しました。

早速、業者を呼んで全額支払い、その業者が行うべきサービスの大半はジェットロが行うという、およそ訳のわからない日々が始まりました。その日からほとんど毎日午前1時まで残業が続くことになり、帰宅してベットに入っても「今日やり残したことは無かったか」と心配で寝付けない生活になりました。

(この調子で、展示会の当日まで書いていくと、一冊の本になってしまうので中略。)

#### ブースがない!

展示会の日がやってきました。信じられないハプニングがいくつも発生しました。一番驚いたのは、地図上では完璧だったブースの配置が、実際に会場に来てブースを設営し始めたら予定数のブースが設営できなくなってしまったことです。

会場の一边の長さをブース一边の長さで割って計算すれば、いくつのブースが設営できるか、誰でも計算できるはずなのですが、業者はこれを間違えてしまったのです。会場地図くらいはちゃんと作れるだろうと信じていた自分を責めました。私の能力が

低いかもしれませんが、一人事務所として対応できる業務量をはるかに超過していたのです。当然ながら、出展者から「自分の会社のブースがない！」という猛烈な抗議を受け、緊急措置として別の場所にブースを移設しました。その際に玉突きのように、別の出展者であるN氏にご無理をお願いして、予備のブースに移動していただきました。(本件の対応のまずさにより、N氏から「来年は出展しない」と言われてしまいました。トホホ・・・)

3日間の会期中はハプニングの連続(展示物の盗難など)で昼食を食べる時間もなく会場を走り回っていたので、おかげで4キロ痩せることができました。展示会が終了し、後片付けが終わった翌日は何と13時間連続で寝てしまいました。こんなに長時間をぶっ通しで寝つづけたことは学生時代以来のことです。痩せたことがせめてもの良かったことかな、と思っていたのですが、展示会が終わって2週間経った今、完全に元の体重に戻ってしまいました(泣)

余談ですが、個人的には展示会と同じくらい力を入れていたのが、期間中に会場レストラン内で開催した「和食フェア」でした。食材をバンコクから調達するだけでなく、日本人シェフまでバンコクから招いて開催しました。当地にはまともな日本食レストランがないため、何を隠そう私自身が寿司を食べたいために企画したものでした。しかし、結果として最終日の閉店間際に私が食べに駆けつけたときは、すでに寿司・刺身はありませんでしたとさ。(2004年6月24日)

#### **(10) JDS「人材育成奨学計画」の挑戦** **(JICE 国際交流部留学生二課 中山 映氏)**

みなさんは「JDS」プログラムをご存知でしょうか？JDS(Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship = 留学生支援無償)とは、ODA 無償資金協力のスキームにおいて各国の若手行政官やビジネスマンを対象に、大学院(英語による修士課程)の奨学金及び本邦滞在費等を供与するプログラムで、アジア開発途上国の人材開発、とりわけ「各国における様々な開発課題の克服に貢献し得る人材の育成」を目的としています。

バングラデシュではERD(財務省経済関係局)を受入機関として2001年より開始されました。当初、第1フェーズとして3年間、総勢70名の留学生を日本へ送る計画が日バ両政府で取決められ、これまでに法律、経済、国際関係、IT等の分野を中心に1期生・2期生併せて48名が日本へ渡っています。そのうち現在3名が既に帰国してそれぞれ職場復帰し、日本で培った専門知識、国際化時代に対応し得る行動規範や視点、新しい環境への適応能力や柔軟性を最大限に活かしながら、バングラデシュの社会・経済の発展に貢献するべく努力しています。

6月13日の夜には、大使公邸において本年7月1日に来日予定のJDS留学生20名の壮行会が開催されました。平均倍率約20倍、4ヶ月間に渡る厳しい選考過程を勝ち抜いた留学生たちは今回で第3期生となります。去る10日にダッカでの2ヶ月間に渡る事前日本語研修を終えたばかりということもあって、留学生たちは終始和やかな表情を見せながら、振舞われた日本料理を楽しんだ後、堀口大使を始めERDラーマン

次官補、紀谷参事官、JICA 坂本所長ら JDS 運営委員を前に日本語のショートスピーチを披露、また日本の「四季の歌」、バングラデシュの「トネ・ダシネ・プシュペ・ボラ」など、両国の豊かな自然と文化を讃える代表的唱歌も合唱し、関係者に深い感銘を与えました。

JDS 留学生の選考過程においては、本プロジェクトの主旨に鑑み、高い語学力は勿論のこと、帰国後のバ国への貢献という視点も含めた研究計画の提出等が要求されます。書類選考、語学試験をパスした候補者は、日本の受入大学教授陣による専門面接(於：ダッカ)を経て、日バ双方から選出された本プログラム運営委員による最終面接に臨むこととなります。

また日本の大学での授業及び論文は全て英語が原則ですが、日本での円滑な留學生活の一助とするため、そして滞在する日本への知識をより深めて欲しいという主旨から、最終合格者は来日前後に日本語集中講座の受講が義務になっていることも本プログラムの特徴の一つです。

私ども JICE におきましては、ERD を中心とするバ政府及び日本大使館、JICA のご協力のもと、公募に係る総合窓口、選考過程の後方支援、来日前後のオリエンテーション及び日本語研修、そして来日後の定期的なモニタリング、緊急時対応等を担当し、バ国に貢献しうる人材を目指した本計画のサポートをさせていただいています。

先月中旬から JICE 東京本部の担当となった私は、当地プロジェクト事務所の渋谷コーディネーターと密に連絡をとりながら業務を進めておりますが、今回初めてバングラデシュに出張し、3 期生の見事なスピーチ、そして希望と意欲に満ちた彼らとの会話を通して、私自身も期待で胸が膨らむ思いがしました。

6 月 17 日には今年度第 1 回の JDS 運営委員会が開催され、新たに 3 つの新規分野(医療行政、教育、環境政策)を含む新年度の募集要項が決定されました。年内に帰国予定の 1、2 期生のフォローアップ等課題は尽きませんが、また新たな気持ちで業務に邁進していきたいと考えております。

今般、日本へ旅立つ 20 名の大半は既婚者のようで、中には今回の留学が決定したことによる「駆け込み結婚(?)」もあったようです。愛する家族ともしばしのお別れになってしまうということで、寂しさと不安を隠せない留学生もいましたが、これらの困難をも克服し、日本で充実した留學生活を収めて、家族が待つ祖国の発展に寄与してくれることを切に願っています。(2004 年 7 月 8 日)

### (11) バングラデシュへ ふたたび (詩人 白石 かずこ氏)

( 昨年わが国が誇る著名な詩人の白石かずこさんが、バングラデシュの若手詩人であるアミヌル・ラーマン氏と詩の朗読会・ベンガル語版の白石かずこ氏の詩集、日・英語版のアミヌル・ラーマン氏の詩集の出版会に出席するため当地を訪問されました。この原稿はその際に白石さんにご寄稿頂いたものです。)

17年前の初夏この国を訪れ、更に2年後のアジア詩人祭で訪れ、今回で3度目のバングラデシュ訪問となりました。「なぜ、どうして？」と問われますが、それはバングラデシュのこの世ならぬ美しい洪水の写真に魂が吸い寄せられたからです。

1987年2月27日、朝、私はぜひ詩人に会いたいという前エルシャド大統領が待つ東京のホテルを訪ねました。当時エルシャド大統領は昭和天皇の大葬のために来日していました。この時、「私も詩人です。」というエルシャド大統領の詩集に載っていた洪水の写真のあまりの美しさに、私は目の前にいる大統領の事も忘れて見入りました。

洪水が多い時は確かに災害ですが、とって水がなければ日照りの苦しみがあります。クリスタルのように澄んだ湖のように見える畠の上で、少年たちが船に子犬や幼い少女をのせて遊ぶ風景はまさに「水の神話」のように思われました。洪水の時には農夫たちは自分の畠に船を浮かべ昼寝し、網をかけてエビの捕れるのを待ちます。そのエビカレーの美味しさは格別です。私は画家で写真家の友人の菱沼真彦氏と21世紀には消えて行くだろう水の神話を撮りにバングラデシュを訪れたのです。

ところが、バングラデシュについての途端に、詩人たちが待っていてくれたのです。ここはタゴールの国、皆タゴールを敬愛し詩を歌う。農村からフェリーに乗って到着したチッタゴンでも詩人たちが私達の到着を待っていてくれました。リキシャ引きの男まで「コビ(詩)」という言葉を誇らしげに語りました。「水の神話」を撮りに行き、この国の魂の熱さ、清さに触れました。

1989年のバングラデシュ訪問の際には学生だったアミヌル・ラーマン氏からベンガル語で私の詩集が出版されるとメールが来ました。同時に彼も国際的に活躍する若い素晴らしい詩人になっていました。私の詩の本は英独西語に訳されましたが、ベンガル語にも翻訳されるとは光栄です。

昨夕、アミヌル氏が読む詩の声が会場を不思議な宇宙にし、人々は感動に酔いました。私もまた、日本語がベンガル語になるとまるでシンフォニーを聴くようにダイナミックに心を打つのに感動しました。特別に駐バングラデシュ日本大使、この国のコビ(詩人)達が集まって詩の朗読会、本の出版会を催すことができ、素晴らしいモニュメントになった今回のバングラデシュでの休日でした。(2004年7月23日)

## **(12) 砒素の村で山羊を貸す (アジア砒素ネットワーク・ジョソール事務所 中村 純子氏)**

アジア砒素ネットワーク(AAN)が活動しているジョソール県シャシャ郡に、砒素中毒患者が150人以上いるシャムタという村があります。この村にレザウル・モロルという青年がいます。1996年に村を訪れた医師により、彼は慢性砒素中毒と診断されました。20歳だった彼は、家族にも見放され、杖なしでは立つこともできないほど衰弱していました。それまでは、原因不明の伝染病と思われていたのです。

安全な水を飲むようになってから、彼は驚くほど回復していきました。彼が生計を立

とられるように、ヘルスセンターの医師からバンリキシャがプレゼントされました。彼にも新しい家族ができ、現在は奥さんと2歳になる娘と暮らしています。杖なしで立つこともできなかった彼の足が、今は彼の生活を支えているのです。でもバンリキシャをこぐ仕事は体力を使います。長い間砒素の毒に蝕まれた彼の体はやはり万全ではなく、手足に浮腫がみられたり、時々寝込んだりしています。医者は安静が必要といいますが、リキシャをこぐ以外に彼の生活を支える術はありません。

「体の負担にならない、何か座りながらできるような仕事、例えば炒りピーナッツやムリなどの軽食を売ったり出来ないの？」と聞いてみました。すると彼は「自分は砒素中毒患者だ。こんな手で作った食べ物など誰も食べたがらないよ。」と、角化症でゴツゴツした手のひらを私に見せるのでした。慢性砒素中毒はうつる病気ではないのに・・・。

そこで、私の青年海外協力隊員時代の経験から、彼に山羊を飼うことを提案しました。数頭の雌山羊を貸して、生まれた子山羊を育てて売る。これなら労力も使わず、辺りの草を食べて育つのでお金もほとんどかかりません。彼は、「それなら牛がほしい。」といいました。本人の希望を尊重して、1頭の子牛を貸すことにしました。まだ現金収入にはつながっていませんが、子牛は大切に育てられています。

堀口大使が開通式に参加してくださった、三日月湖を原水にした村落パイプ給水施設は、維持管理費として1世帯あたり毎月20タカのお金が必要になります。啓発の活動を通して村の人々の生活を見てきましたが、300世帯の中には、旦那さんがいなくて収入のあてがないような女性もいます。このような人々からも、毎月の使用料を集めていかなければなりません。

そこで今、毎月お金を出すのが難しい世帯に対して山羊を貸す計画をしています。生まれる子山羊を育てて得られる収入で、使用料を賄ってもらおうという計画です。というわけで、現在山羊のドナーを募集中です。興味のある方はご一報を。

[jun\\_nakamu@hotmail.com](mailto:jun_nakamu@hotmail.com) (2004年8月5日)

### **(13) シレット洪水緊急援助報告**

**(13年度2次隊・ポリオ対策 阿部 久美子氏)**

洪水の国バングラデシュ。毎年当然のように訪れる洪水に、人々は当然のように船での移動を始め、家の庭で魚捕りし、子供たちは洪水の水ではしゃいでいる。この国に来て3年目。またこの季節が来たか、と思いながらフィールドへ向かう。しかし、今年はなんだか様子が違った。一面田んぼだった平地が、すっかり海になり、家々が小島のように浮かんでいる。牛や山羊たちは行き場をなくし、海の真ん中に長く一本浮いている幹線道路でウロウロ。道の両脇は家から運び出した家財道具と避難民たちで埋め尽くされている。唯一水牛だけが水の中で気持ち良さげに群をつくって泳いでいた。今年の洪水は、ひどい。

腰まで浸かる水の中で、きれいな飲み水へのアクセスと電気が閉ざされ、服や鍋までも流され料理もできない。洪水被害が一番大きい私の任地シレットへ、JICA事務所か

ら緊急に薬品、ろうそく、ビスケット、そして政府メディカルチームの移動に係る船代の援助がきた。

私の配属先が県保健衛生局ということもあり、薬品と船代の配布は配属先をお願いし、せめてビスケットだけでも自分の手で子供たちに配ることにした。シレットにいるアメリカ平和部隊と VSO のイギリス人ボランティアもぜひ協力したいということで、彼らと共に船で村へ向かった。

もの凄い光景であった。点在する島々を目指して大海(洪水)を小舟で横断し、島(村)にたどり着くと、子供や大人までもがどっと押し寄せる。ビスケットを皆に配りたいのに、とにかく自分にくれとたくさんの小さな黒い手が伸びてくる。後ろからは母親たちが自分にもくれと私の服を引っ張り、一人で二つもらっているとっては喧嘩が始まり、大混乱。ビスケットはあっという間になくなった。

島になってしまった彼らの村で、食糧へのアクセスは男性たちが船で遠くの市場まで行く以外に手段がない。しかし洪水で仕事もできないその日暮らしの彼らは市場へも行けない。そうなるが一番必要なのは食糧である。今栄養を与えておかなければ、洪水後に発生する感染症や様々な病気にも罹りやすくなる。服も全て流されたという避難民からは着る物が必要だという声も多かったが、暑いこの季節に服よりも食べ物への援助の方が正解であった。緊急事態に、被害に会った人々のニーズに応えるということがいかに大変で重要なことか、今回の活動を通して痛感した。配属先に手渡された経口補水塩(ORS)をはじめ各薬品も不足していた物だったため、配属先の上司からも大変感謝して頂いた。

普段滅多に“ありがとう”を言わないベンガル人が3日連続“ありがとう”を言った。1年分の“ありがとう”を言われてしまった気分である。それだけニーズに合った援助が緊急にできたのだと思う。大変良い結果であった。(2004年8月19日)

#### **(14) バングラデシュ空手事情**

**(JICA シニア海外ボランティア 北村 哲郎氏)**

二度と日本に帰れないのではという不安の中、1985年12月、青年海外協力隊(空手指導)として初めてバングラの大地に足を下ろしました。なんともう19年も経ってしまいました。その後、縁があってビジネスで3年半、JICA・シニアボランティアで今回3度目のバングラ滞在です。

よく前は、日本人から「バングラに空手なんて必要なのか?」「農業関係の指導以外必要ないでしょう」と言われました。私は「空手を通して人間を育成することができる。国を動かすのは人間なのだから」と反論?したものです。実際、その当時の生徒の中からバンドルボンの県知事になったものもいますし、バングラ中に支部を持つ空手クラブを運営している者、大きな会社の社長を務めている者も出ています。私の夢は、生徒の中から誰かが“首相”になって、この国を引っ張っていってくれる事です。

さて、19年前のバングラの空手は“いんちき空手”がほとんどで、映画を見ただけや

本を読んだだけである程度お金を持っている者が、クラブを作って自分で黒帯を締めて指導者になっていました。習いに来る者も映画（ブルース・リーなど）でやっているのが空手と思っているので、ブルース・リーのマネが上手い者が良い指導者、選手でした。

赴任してすぐに全バングラ空手選手権があり、連盟に頼まれて審判をしたのですが、試合が始まってからも戦わないでそれぞれ勝手に「アチョ?!!」といいながらブルース・リーのマネを始め、観客もそのマネを喜んでいました。私はこれからの2年間を考えると気が遠くなりました。

最初の指導に行った時は私を馬鹿にした様子なので、選手全員（30人ほど）と試合をして全員をコテンパンにやっつけた（ケンカではないですよ）あとは指導がやりやすくなり、本当の空手の指導も順調に行き、その後の試合での「アチョ?」は段々となくなっていました。

スリランカで開催された南アジア大会に、バングラ初のナショナルチームを作り、金3、銀2、銅1で総合優勝するまでになりました。バングラの駐スリランカ大使も感激して私達を大使館に招待して下さり、観光までさせてくださいました。その後、審判育成や地方への巡回指導、第1回ウーマンズカップも開催することができ、日本の指導者がその後も続いてくれることを祈り、2年間の活動を終わりました。

今回19年ぶりに空手指導者としてバングラに来て一番驚いたのは、空手の専用練習場がないことです。19年前は、柔道と共同でしたが専用道場がありました。現在は、他の競技が使っていない場所（それもコンクリートの上）で練習しています。空手の技術も19年前より悪くなっているところもあります。それに、非常に指導者や選手などの態度が悪いことです。年月が経ち、前よりも全てが悪くなっていることに、驚くより呆れてしまいました。日本の指導者が長年不在なのが一番の原因です。空手をやっていた者が現在の連盟の幹部には一人もおらず、政治的な圧力で前の連盟役員を全員辞めさせたとも言われています。前の連盟の役員は今の連盟は無効と訴訟を起こしました。

私はこの2年間、たとえ指導環境がよくならなくとも、次の時代を担う今の生徒たちに100%自分の持っているものを伝え、この国の発展に少しでも協力でき、任期を終えたいと思っています。現在、指導はミルプール・インドア・スタジアム（土・月・水）及びナショナル・スポーツ・カウンシル（日・火・木）で4時?6時過ぎまでやっています。運動したい方は、ぜひベンガル人に混じってやって見ませんか!!実際に、数人の日本人が空手をやりに来ています。また、パントポットロードでも日本の空手道場（日・火・木）5:30?6:45と6:45?8:15の2クラスやっています。

空手を通してバングラデシュの人々と交流して見ませんか!!バングラデシュの見方が変わりますよ。詳しい内容をお知りになりたい方は、019-357581（北村携帯）までどうぞ。（2004年9月2日）

## **(15) マングローブ植林を体験** **(財団法人オイスカ 神田 亜紀氏)**

「足がはまった、誰か助けて？」泥まみれになることを覚悟した瞬間、黒い細い手がすっと伸び、子供の悪戯な優しい笑顔がそこにありました。

オイスカ・マングローブプロジェクトのあるコックスバザール県チッコリア郡は、「チッコリアシュンドルボン（チッコリアの美しい森）」と呼ばれる自然豊かな土地でしたが、外貨獲得の為、原生林を伐採しエビの養殖場を拓き 90 年頃には美しい森は姿を消しました。

そんな人間の愚行を嘲笑うかのように、91 年大型のサイクロンによってこの地域は甚大な被害を受けました。オイスカ研修センターで自然の大切さと開発の真髓を学んだ故チョードリー氏は、「サイクロンの被災の度に緊急援助を受け続けていては、地域の発展はありえない。地域を守る為に、防災林を再生したい。」と訴え、彼の熱意に応えたオイスカは、翌92年にマングローブ植林プロジェクトをスタートさせました。

8月22日から一週間、日本の労働組合「UI ゼンセン同盟」のボランティア 20 人が、電気も熱いシャワーもないプロジェクトハウスに寝泊まりし、地元の子供と植林を行いました。はじめは、なかなか地域住民に理解を得られなかった活動も、日本人のこのような無私無欲な労働を目の当たりにして、変化が現れました。現地の人でさえいやがる泥の中に足を踏み入れて汗を流す姿は、彼らの心に訴える何かがあったようです。

地元新聞でもこの活動は取りあげられ、通りがかった人に「日本から僕たちの為に植林に来てくれてありがとう。」と感謝されました。私達が 12 年間で再生した森は、面積でいえば、たったの 500ha です。「チッコリアシュンドルボン」を蘇らせるには、まだ時間がかかりますが、この試みの中で地域の人々は植林の大切さに気づき、日本からボランティアに来てくれた方は、帰国後、自らの生活を見つめ直すことから行動してくれています。

日本人とベンガル人の気持ちを一つにし、小さな苗を共に育てていくことで、いつの日か、あの手を差し伸べてくれた少年が大人になる頃、サイクロンの被害が軽減され漁獲も豊富な村が蘇ることを信じて、今後も活動を続けていきたいです。

(2004 年 9 月 16 日)

オイスカのウェブサイトは以下の通りです。

<http://oisca.org/indexj.htm>

オイスカのバングラデシュでの活動も紹介されています。

<http://oisca.org/project/bangla/index.htm>

**(16) 真実の国際エンゼル協会とは**  
(NPO 法人 国際エンゼル協会 小川 勲氏)

さて唐突ではありますが皆さま、「国際エンゼル協会」という NGO をご存知でしょうか。「ああ、名前は聞いたことあるけど、キリスト教系の団体でしょ？」いやいや、違うのですよ。「そうか。小川さん夫妻がやっている孤児院でしょ？」ああ、それは激しく違います！私たちのバングラデシュでの活動は来年で 20 年を数えますが、そう言えばこれ程実態が不明なままの NGO というのも珍しいものですね。そこでこの度は 20 周年前祝いの（？）、「果たして国際エンゼル協会とは？」というお話しをさせて頂きたいと思えます。しばしお付き合い下さいませ。

まずバングラデシュの活動におきましては、年間総予算 1 億円ほどの半分以上を充てています。そしてその中心に据えていますのは広い意味での教育支援活動です。86 年に開設された児童養護施設に始まり、奨学金制度、既存の学校に対する校舎の新規改築や備品の拡充、識字教室、職業訓練及び農業訓練の施設、図書館などがこれにあたります。またこのほかにノクシカタ製品の生産・販売、診療所の運営も行っています。

「ではそもそも国際エンゼル協会とは何を考えている NGO なのか？」バングラデシュでの諸活動を通じてその先に見据えているものは、私たち自身の国、日本の現在であり将来であるのです。おお、段々話しが核心に迫ってきましたね。しかしそれにはまず、私たちの成り立ちについて聞いて頂かなくてはなりません。

国際エンゼル協会は 1982 年に兵庫県伊丹市で発足しました。きっかけとなりましたのは代表理事川村百合子氏の次女、直子氏の存在です。生まれつき小児麻痺という障害を抱えながらも大学の福祉学科を卒業した直子氏は、それまでの過程で周囲から受けてきた善意を、今度は自分が社会に還元したいと希望しました。そうして母親と周囲の賛同者が集まってできたのが国際エンゼル協会なのです。

奉仕活動を行う場、として始まった国際エンゼル協会は、発足当初は障害者の方々が働く授産施設や養護施設へボランティアを派遣したり、バザーでお金を作ってはこうした施設へ寄付するという活動をしていました。しかし、次第に「日本にも困っている人はたくさんいるけれど、途上国にはもっと困っている人がいるのではないか」という考えが私たちの中に芽生えると、海外に目を向けるようになり、現在に至っているという訳です。つまり、私たちにとりましては「まず国際協力活動ありき」「まずバングラデシュ支援ありき」という訳ではないのです。日本側にとりましてバングラデシュでの活動とは、「自分たちが普段行っている奉仕活動が、こういう形で役立っている」と感じるためのものであるのです。

日本に基盤を置きながらバングラデシュを支援活動の中心に据える NGO として、もうひとつ焦点を置いているのが日本の青少年育成活動です。命を粗末に扱ったり、健全な人間関係を築けずにいる若者たちのことが話題になる昨今ですが、日本の将来を背負っていくこの世代にとって、バングラデシュは人生を歩いていく上での大きな学びや気付きを与えてくれる場所となるのです。

多感な時期の若者たちがバングラデシュに来て、お金がなくても遅しく生活をし、家族や人間関係の温かい繋がりを大切にしている人々、また新しい知識や技術を身に付けることを喜びとして輝く眼差しをしている同年代の人々と触れ合うことは、一生の財産となり得る貴重な経験になるのです。

「僕は今まで、あてがわれた環境に満足せず逃げてきました。けど今回バングラデシュに来て、辛い環境でも自分がいかにがんばって生きるかが大切だと教えられた気がします」

「今まで『当たり前』と思っていたことは、実はとても感謝すべきありがたいことなんだと思うようになりました。『当たり前』と思っていたから感謝の気持ちを持たず、自分も生かせなかったんだと思います。これからは今まで『当たり前』と思っていたことを一つ一つ大切に、今まで生きながら生かしていなかった自分も生かしてやろうと思います」

「今までは自分のために使っていた時間を、少しボランティアに使おうと思うようになりました。でも現地に行った人たちだけが生活を変えるのではなく、エンゼルの皆さんのように自分たちの生活を少しボランティアに使うという小さな力が集まることが、大きな力になるのではないかと思います。そして私もその大きな力の一部になりたいです」

毎年行っているワークキャンプの参加者や昨年末に招聘した和太鼓グループ「はぐるま」の少年たちが残したこれらの言葉こそは、彼らがバングラデシュに来た意義の大きさを語っています。

さて、ここまで私たち国際エンゼル協会について多面的に眺めて頂きましたが、いかがでしたでしょうか？もしかしたらこう考える方もいらっしゃるかもしれません。「でも、それってバングラデシュや地球の人口を考えたら大海の一滴だし・・・」至極もったもな一言が胸に刺さります。これこそは、まさに私たちが時折考え込んでしまう疑問であるのです。しかし一方で、マザーテレサはこんな心強い言葉を残されています。「でもそれは必要な一滴です。」

空しい一滴ではなく必要な一滴となるよう努力して参りますが、何しろ試行錯誤、手探りでここまで活動を進めてきた私たちです。今後とも皆さまの温かいご指導、ご鞭撻を頂きながら、よりよい活動を目指して励んで参りたいと思います。これからも引き続き、どうぞよろしくお願い致します。

本協会のことをもうちょっと詳しくお知りになりたい方は、「愛を運ぶ天使たち『国際エンゼル協会 21年の歩み』」(著者：鴨野守氏、発行：アートビレッジ)を是非ご一読下さい。現在私の手元にも若干ありますので、ご関心のある方はぜひご連絡下さい！(2004年9月30日)

エンゼル協会のウェブサイトは以下の通りです。

<http://www.angel-ngo.gr.jp>

## (17) 校歌

(ダッカ日本人学校校長 浅井 克悦氏)

淀の流れを汲み分けて、水の通り路いと繁く。  
煙は高く空を覆い、鷺洲の里は賑わえり。

東太湖の水受けて 容々西に二十余里 流れて止まぬ澱江の  
浪路の末の漣標 努力の潮我が領と いそしむ健児千五百

1、2行目は四十数年前に卒業した小学校の校歌です。3、4行目は高校の校歌です。いずれも創立100年を越えた学校の校歌ですので、歌詞は時代を感じさせます。しかし、この二つの校歌については、今でも歌うことが出来ます。ところが中学校の校歌は思い出せません。大学については恥ずかしながら、まともに授業に出席していませんでしたので思い出すことが出来ません。

なぜ思い出せるものと、思い出せないものがあるのか？何が違うのか？ふと考えてしまいます。小学校は6年間歌い続けたし、高校は運動会や高校野球の応援で校歌を大声で歌いました。一方の中学校と大学ではあまり歌う機会がなかったし、ほとんど思い出として残っているものはありません。

多分、そのときの学校生活が充実していたかということも関連があるのかなと考えてしまいます。確かにその高校は、勉強はともかく、政治色の強い学校でした。毎日友人とけんけんがくがくの議論を戦わせていました。きっと自分なりに青春を謳歌していたのでしょう。そのせいで大学にはいるのに大変苦労しました。

また自分が教師として勤務した中学校は4校(うち2校が管理職として)経験していますが断片は思い出せても、今歌えとって歌えないのが現状です。それは、私が勤めていた東大阪市の中学校では校歌を歌うのは入学式と卒業式だけという現状があります。それでは覚えようにも覚えられないものです。

広々と 自然に恵まれ開けゆくベンガルの国 バングラに 今こそ始まる  
我が校の その名もダッカ 日本人学校

父母と 希望を胸にここに来て元気な友にかこまれて 徳をば 智をば  
磨かんと その名もダッカ 日本人学校

世の中の 移り変わりは常なるも 若竹の如く 清らかに 万国の友と  
語らいて 正しく伸ばそう 我等の力を

この歌は、歌詞を読めば分かるとおりダッカ日本人学校校歌です。作詞・作曲は初代小山田大使の令夫人小山田 淑子様です。本当にすばらしい歌だと思います。

この校歌は一生忘れることはないでしょう、ダッカ日本人学校では行事のあるごとにみんなで力の限り、元気よく歌っています。入学式に始まり、終業式、始業式、学習

発表会と卒業式と続きます。それにダッカ日本人学校では、保護者の方の転勤等で年度途中で子どもが去っていくことがあります。そのお別れ会（年に数回あります）にも歌っています。

その時、校歌の途中で泣く子どもたちを何度となく見てきました。子どもたちにとってダッカ日本人学校校歌は単なる校歌ではなく、愛校心の象徴になっているのかなと思うことがあります。この校歌に対しての大きな思い入れ、そしてそれとともに脳裏に浮かぶ、ダッカ日本人学校とダッカ生活が走馬燈のように思い出されるのでしょうか。私ばかりでなく、子どもたち、教師、そして同窓生そしてかつての派遣教員も忘れずにこの歌を歌うことが出来ると思います。それもただ単に、回数を多く歌ったからではなく、その時の情景とともに心の奥深くに刻み込まれているからです。

今、日本でダッカ日本人学校の同窓会を立ち上げようという動きもあります。まだ大規模では開かれていないようですが、もし同窓会が開かれたとき歌う歌は、

広々と 自然に恵まれ開けゆくベンガルの国 バングラに 今こそ始まる  
我が校の その名もダッカ 日本人学校

だと思っています。いつまでもこの校歌がダッカの地で歌われ続けることを信じています。最後にこのようなすばらしい校歌を作詞、作曲していただいた小山田 淑子様  
に感謝し、今も元気にダッカの地で歌われていることを伝えたいものです。  
(2004年10月14日)

ダッカ日本人学校のウェブサイトは以下の通りです。  
<http://www.ne.jp/asahi/japaneseschool/dhaka>

### (18) 村づくりのしごと

(JICA 専門家、バングラデシュ農村開発公社 海田 能宏氏)

#### ウポジラ役場

皆さん、ウポジラ(郡)の役場を訪れたことがありますか。真ん中に大きな池があり、郡長のオフィスを中心にしていろいろな部署がこの池を取り囲むように配置されています。こういう役場はバングラデシュの独立前後に次々に建てられてゆきました。

それまでは役場はサブディヴィジョン(今の県にほぼ同じ)にあり、ウポジラ(旧称タナ)は警察署管区という治安維持の単位でした。今はユニオン役場(Union Parishad Complex)がどんどん建てられていて、来年中には全ユニオンの半分まで完成させる計画だということです。2003年9月にはグラム・シヨルカル(名称としては村落政府)がユニオンを9つに分けたワードという単位で結成されたこと、皆さんご承知のとおりです。

地方分権と地方自治・行政を巡っているいろいろな議論が交わされていますが、地方行政の中心が県から郡に、そして徐々にユニオンという人口3万人弱の「行政村」に移りつつあるのは、具体的な目に見える形で確認できます。

## コミラ・モデル

ところで、郡役場ができはじめた頃、1960年代を通じてコミラ・モデル或いはコミラ・アプローチと呼ばれる農村開発運動がアクテル・ハミード・カン博士主導の下に展開していました。これは時代を反映して、農業技術を近代化して農村の生活を向上させることを主眼にはしてはいましたが、たいへんに多面的かつ総合的であり、政府と農村を結び合わせる仕組みについて深い洞察を提示していました。

実は、先に述べたウポジラ役場のレイアウトそのものもコミラ・モデルを反映していて、いろいろな部署が協力して住民へのサービス行政を行うことを形にしたものでした。これは、植民地の統治行政を継承した政府としては画期的な改革でした。

私は、BRDB（バングラデシュ農村開発公社）に勤務しています。BRDBは今でこそマイクロ・クレジット（小額融資）に特化した機関になっていますが、独立直後に発足した頃は総合農村開発プログラムという名称で、コミラ・モデルを全国展開させるべく関係部署を結び付ける役目を担っていました。

私はここでこの4年間 JICA が協力してきた PRDP（参加型農村開発行政支援プロジェクト）のフォローアップをしつつ、PRDP のウポジラ全体への展開を計画中です。

### PRDP（参加型農村開発行政支援プロジェクト）

PRDP はユニオンレベルでのサービス行政が農村住民へ浸透してゆき、それと共に住民の声が地方行政に届くようなシステムを「リンクモデル」という名でつくろうとしています。

これには少し長い経緯があります。PRDP に関わってきた人たちは1986年以来、バングラデシュ農業大学やバングラデシュ農村開発研究所や BRDB と一緒に農村調査・研究をしてきました。JICA に「研究協力」というカテゴリーがあって、こういう細々とした息の長い仕事を支えてくれたからです。

この中で、痛感したことは、国や県はおろか、郡やユニオンとすら村落と結ぶ公的なチャンネルができていないということです。国民の8割が農村に住むこの国において、これでは村づくりはおろか、国づくりもできそうにもありません。

PRDP ではユニオンに UCCM（ユニオン連絡協議会）というプラットフォームを作り、そこで毎月 UP（Union Parishad）と開発関連部署の普及員（ユニオンあたり20数人が配置されている）と地域の NGO と VC（村落委員会）の代表者の4者が集うことにし、そのアレンジを UDO（ユニオン開発官）という BRDB の「新設」吏員がする、ということにして、4年間にわたり4ユニオンで実験してきました。これが生き活きと機能し、村びとたちは普及員の訪問を歓迎し、普及員は喜んで村落を訪れるという関係ができてゆきました。

PRDP のもう一つの特徴は、VC（村落委員会）の作りかたにあります。選挙にしないで、全村集会の場で村民の面前で「推薦とサポート」という伝統的な形で選びます。

すると、こうして「自然に」選ばれる人たちはグラム（自然村）の下部単位であるパラとかショマジという地縁血縁社会単位を代表する形になります。結果的にマタボールと呼ばれる有力者が多く選ばれるのですが、政治色はなく、日本の町内会の役員を髣髴とさせる人たちが VC（委員会）を構成することになります。

こうした VC を中心にして、村びとたちの共通の関心事を吸い上げ、PRDP はマイクロ・インフラという形で補助事業を実施しています。共通の関心事といってもマイクロ・クレジットや IGA と呼ばれる収入向上プログラムは避けています。VC 委員たちや一般の村びとたちの公（おおやけ）意識を刺激するには、こういう個人的な利得に繋がるものよりは、集落全体のトイレづくり、保健衛生家族計画の啓蒙、小学校の修理、集落道の修築などのような公共的なプロジェクトのほうが好ましいと思うからです。公的なチャンネルを通した農村開発は技術普及と公共事業への補助に限る方がいいのではないかとも思うからです。

#### 草の根の村づくりを目指して

PRDP の「リンクモデル」は、少しオーバーですが、コミラ・モデルの総合的かつ協同的という精神を受け継ぎ、コミラ・モデルのユニオン版になろうと目指しています。しかし、今までにないシステムをつくり、それを支える人材をつくるのは簡単ではないようです。

この国には「公僕」がいないと言われます。たしかにそうです。しかし、普及員たちの郷土びいきを刺激し、専門知識を尊重し訪問を歓迎する空気の中から公僕は育ってゆくのでしょうか。事実、農業技術や井戸・サニテーション、それに保健関係の普及員の仕事ぶりが認められるにしたがって彼らが生き活きとしてきました。BRDB の UDO は公僕の魁（さきがけ）になってくれるでしょう。

一方、村落の自治は堅固です。人材もいます。その力を村の公（おおやけ）の発展に向けられるような制度ができると、大きな指導力を発揮するでしょう。まだ植民地的な統治と被統治の感覚が残るこの国の治政（ガバナンス）を変えるのは、草の根の人たちが澁刺（はつらつ）と働ける制度を作るということではないでしょうか。

（2004 年 10 月 28 日）

#### （19）バングラに暮らして 15 年 （チッタゴン日本人会会長 馬場 智樹氏）

まず始めに簡単な自己紹介をさせていただきます。私は、この国の輸出加工区（チッタゴン EPZ）に日本向け肌着の縫製工場を 15 年前に設立し、それ以来ずっと当地に駐在しています。

この 15 年の間には、超大型サイクロンに見舞われて、チッタゴン加工区が全部浸水したり、銀行がある朝突然倒産したり、ハルタルと呼ばれるゼネラルストライキが荒れて、街中で銀行やバスが燃やされたりと、日本では信じられないような色々な事がありました。今この 15 年を振り返ってみると、無事今でも操業出来ているのが奇跡のような気がします。今回は、この 15 年のバングラ暮らしの中で 弊社で働いてい

るワーカーの発言で今も忘れられないものを2、3紹介したいと思います。

弊社のワーカーですが、工場では無断欠勤が多いため特別の理由が無い限り休みを認めません。そんな中で、あるワーカーが田舎で父親が病気になった、見舞いに行くので1ヵ月休ませて欲しいと言ってきました。見舞いに行くのは構わないが1ヵ月は長い、お金も必要だろうし、ずっと傍についていても直るわけではないだろうと言うと、お金も必要だけど、家族が病気の際に傍についていられないくらいなら、お金は不要ですと、これには思わずうなりました。分かった、それなら行っておいでと言うと、お金が無いので貸してくださいと...

また、あるワーカーは、田舎から親戚が来るので来週休ませて欲しいと言ってきました。その理由ではだめだと言うと、現場に戻り1時間位して又事務所に来て今度は来週熱が出るので病欠させて欲しい、現場ですっといい方法を考えていたのでしょうか。このままでは仕事にならないので許可しました。

最後に、創業間もないころ私の部屋にはテレビもありませんでした。それを知ったあるワーカーが、ボスはまずテレビを買え、我々の給料を上げるのはその後でいい、ボスがこの国が嫌になって帰ってしまったらそのほうが私たちは困るからと。

気が狂ったような運転、進まない交渉ごと、いろいろ問題はありますが、この国に進出して本当によかった。日本に一時帰国しても戻ってくるとほっとする今日この頃です。(2004年11月10日)

## (20) 和太鼓はぐるまについて

(NPO 法人・国際エンゼル協会 バングラデシュ事務所駐在員 小川 勲氏)

バングラデシュ在住日本人の皆さま、こんにちは。国際エンゼル協会の小川です。本日は日バ交流メールマガジン編集部のご厚意により、皆さまへのお知らせをお送りさせて頂いております。既にご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、来たる23日、ダッカのオスマニ・メモリアル・ホールにて、和太鼓はぐるま(福井県武生市)の公演が行われます。これは、本協会が日本の青少年育成事業として昨年に引き続き招聘するはぐるまが、22日から28日までのバングラデシュ滞在中に各地で行う公演の一環として行われるものです。今回のバングラデシュ来訪は交通費を自ら負担してのものであり、公演も全てボランティアで行われます。バングラデシュ在住の皆さまにおかれましては、この機会に是非はぐるまの演奏を聴いて頂きたいと存じます。

ここで、和太鼓はぐるまという団体についてご紹介させていただきます。はぐるまの演奏者は、様々な家庭の事情により多感な思春期に人生の道を踏み外し、周りを苦しめ、それ以上にまた自分自身も苦しんできた青年たちです。保護観察を受けている子、少年院にいた子、引きこもりだった子など、それぞれの背景は違います。しかし彼らに共通しているのは、強い感受性が故の傷つきやすさです。そんな彼らは、「はぐるまの家」で共同生活をしながら、和太鼓を通して再び自分自身を取り戻して社会でやり直すための活動を行っています。和太鼓を通して、彼らは内に籠もる思いをありったけぶつけて自分自身を表現します。「自分だってこれだけできる」という自信も身に

付けます。

こうして日々自分自身の内面と向き合いながら、社会での生き直しを求めて精一杯もがいている彼らのエネルギーに満ちた姿を、ぜひご覧になって下さい。音楽に興味があるかないか、和太鼓に興味があるかないかに関わらず、ひとたび彼らのステージに触れられましたならば、きっと、大きなうねりとなって迫りくる彼らの魂の叫びに圧倒され、感動して頂けることと思います。また当日の進行は、はぐるまの代表・坂岡嘉代子氏の語りを挟みながらのものとなります。寝食を共にしながら常に彼らの成長や苦しみを温かい眼差しで見守り続ける坂岡氏のお話は、はぐるまの演奏と共に皆さまの心に深く刻まれることと思います。

お忙しいところとは存じますが、皆さまどうぞお誘い合わせの上、23日のダッカ公演にお越し頂けますよう、よろしくお願い致します。また、はぐるまの昨年のバングラデシュ公演についてのレポートが本協会のホームページに掲載されていますので、どうぞご覧になって下さい。(2004年11月18日)

[http://www.angel-ngo.gr.jp/topics/2003\\_12\\_24.htm](http://www.angel-ngo.gr.jp/topics/2003_12_24.htm)

(坂岡嘉代子氏プロフィール)

昭和21年福井県生まれ。16歳で脳脊髄膜炎発病以来、青春を闘病生活に生きる。その後、県手話通訳を経てろうあ者、非行少年のための太鼓グループを結成。昭和63年「和太鼓はぐるま」としてプロデビューさせる。平成2年「はぐるまの家」開設。現在各地で講演活動を推進。著書に「家族を夢見て」「親子に架ける橋」「十指に子を抱く」などがある。平成15年に法務大臣賞を、平成16年に和太鼓はぐるまと共に、福井新聞文化賞を受賞。

### (21) 旭日双光賞を受賞して

(AOTS バングラデシュ・ネパール連絡代表、AOTS ニューデリー事務所顧問  
アジア文化会館同窓会会長 モアゼム・フセイン氏)

(11月9日、モアゼム・フセイン氏は、日本とバングラデシュ間の友好親善を促進した貢献により、東京にて旭日双光章を受章され、本25日、フセイン氏の叙勲を祝してレセプションが開催されました。フセイン氏は文部省留学生として東京大学で博士号を取得後、バングラデシュに戻り、母国バングラデシュと日本との交流・相互理解促進を目的として、日本で留学や研修をした同窓を組織化して生け花・日本語教室を立ち上げた事をはじめとして、様々な日本関係の団体の活動に従事してきました。日本人の奥様との間には2人のお子さんがあり、私生活でも2つの文化の交流を更に深めていらっしゃいます。)

日本で学生として過ごした10年と、その後の職業人としての33年の計43年間に亘って、私は自分なりのやり方で協力可能な分野で母国バングラデシュと日本の一層強い絆を築こうと努力してきました。特に海外技術者研修協会(AOTS)は、そのための格好の場を提供してくれました。アジア文化会館同窓会、AOTS同窓会の会長として、また16年間に亘って務めたAOTSダッカ事務所長として、私は自然とバングラデシュと日本の友好親善の促進に焦点を当てて活動する事になりました。

私がバングラデシュと日本との間の絆を強める上で果たした貢献の多くは AOTS を通じてこそ可能となりましたので、私は AOTS にとても感謝しています。また、バングラデシュ日本協会、バングラデシュ日本留学生会 (JUAAB)、日本・バングラデシュ商工会議所 (JBCCI)、JETRO ダッカ事務所もまた、私に重要な役割を与えてくれました。

バングラデシュと日本の友好親善促進のための私のささやかな貢献に対して、日本政府より旭日双光章を頂きました。叙勲式は 11 月 9 日に東京の外務本省にて行われ、引き続き皇居にて天皇陛下への謁見を賜りました。私と妻の営子にとっては素晴らしい経験となりました。

今回の叙勲は、堀口大使の強い推薦があってこそ可能となったものですので、私は日本政府に対してのみならず、堀口大使に対しても深い感謝の念を表したいと思います。しかしながらこの名誉は私 1 人のものではなく、これまで私を支え、仕事を与えてくれた全ての組織、友人、そして私の祖国バングラデシュのものであります。

私が前に申し上げたとおり、AOTS は私の人生から切り離せないものです。私と AOTS との関わりは 40 年以上前に始まりました。私を育ててくれた人生の師である二人の人物は、AOTS の創始者である故穂積先生、そしてその後継者の山本氏です。東京大学で私に造船・溶接構造の破壊力学を教えて下さった教授のお陰で私は母国や外国で大学教授として生活の糧を得る事が出来ました。しかし AOTS の二人の人生の師は、私にもっと他の極めて重要なこと、即ち人道主義・平和的共存のための相互協力、互恵的な対等のパートナーシップ等を教えてくれたのです。これは、私がこの世界の市民として責任を果たすために欠くことのできない要素となりました。ですから私は、大学での先生方以外に、AOTS の素晴らしいお二人の人物から受けた大きなご恩を決して忘れることはありません。

私が AOTS から受けたもう一つの重要な恩恵は、皆さんそれが何か分かりますか？ AOTS は私に営子という、素晴らしい人生の伴侶を与えてくれ、私達は既に 36 年間、平和な結婚生活を過ごしてきました。彼女は私のインスピレーションのもとであり続けているばかりではなく、二人の息子 Robin と Jiro を授けてくれ、私を父親にしてくれました。

営子と私は、3A コーポレーションの小川氏と、元朝日新聞記者の久保田教授にも感謝しなければなりません。彼らは「アジアン・パートナー」、「頼もしいアジアの友人達」という本を通して、私達を日本ばかりでなく海外でも広く紹介して下さいました。最後に私は東京大学の先輩・学友、AOTS の同僚や先輩、アジア文化会館同窓会、AOTS 同窓会、JUAAB、JBCCI、JETRO の友人たち、そして堀口大使を初めとする大使館の皆さん、私を人生の様々な局面で支えてくれた皆様に感謝を表したいと思います。

この勲章を頂き、私はまだやり終えていない仕事や新たな責任を果たすべく、更に邁進して行く所存です。引き続き、皆様のご支援とご協力を宜しくお願い致します。

(2004 年 11 月 25 日)

### 3 . バングラデシュ案内

#### ( 1 ) 独立戦争博物館

在バングラデシュ日本大使館広報文化班の河野秀美と申します。今般、バングラデシュ名所案内を新たに寄稿することとなりました。第1回では、ダッカ市にある独立戦争博物館 (Liberation War Museum) をご案内します。

独立戦争博物館は、1996年3月22日、政治に左右されずにバングラデシュ独立達成までの歴史を整理し、広く一般国民、特に若い世代に知らしめようという志を持った8名の発起人と協力者により設立された私立の博物館で、本年度で創設8年を迎えています。

独立博物館には、バングラデシュの近代史、すなわち英領統治時代、インドの独立、東パキスタン時代からバングラデシュが独立を達成した1971年12月16日迄のバングラデシュがたどった波乱万丈の歴史が、当時の出来事を伝えた新聞記事や写真、当時の歴史的人物が使用した様々な物品、独立戦争に用いられた武器等の展示物を交えて淡々と説明されています。

特に1952年2月21日の言語運動 (ベンガル語の公用語化運動・パキスタン政府のウルドゥー語の公用語化に反対した学生達のデモ隊にパキスタン軍が発砲した事件) 後の史実を物語る資料には、バングラデシュを貧困に苦しむ開発途上国という点でのみ捉えがちであった私に、バングラデシュ国民が自らの言語・文化・国という価値を守るために大きな犠牲を払いつつ戦った歴史を改めて思い起こさせてくれました。

1971年3月25日からのパキスタン軍のバングラデシュ国民の虐殺、レイプなどの犯罪行為を示す資料・写真等の展示は戦争行為の残虐さ・バングラデシュ国民の味わった苦しみを如実に伝えています。私はこの博物館を訪れてバングラデシュという国を再発見し、日々の生活の中で、ともするとバングラデシュの人々に尊敬・尊重の念をもって接することができなかった自分を反省する機会を得ました。私たちがダッカに暮らし、日々接しているバングラデシュの人々に対する理解を深めるためにも、是非多くの人々にこの博物館を訪れて頂ければと思います。

設立者の方からは、バングラデシュの政治的対立に巻き込まれず中立の立場を確保するため、国民が独立という目標に向かって一つにまとまっていた1971年12月16日までの歴史のみを取り扱っているということ、当国の歴史教育にはBNPとアワミ連盟の政治的対立が反映され、政権が変わる毎に教科書の記述が変わることから、博物館は特に中・高校生に対して、バングラデシュの独立に拘わる正しい歴史を伝える事を主要な目的としていること等を伺いました (博物館では中・高生を対象に教育プログラムを実施しています)。また、バングラデシュが現在の困難な状況に打ち勝つためには、この博物館がよってたつ「多様性の尊重」や「ベンガル人の団結」といった価値が国民に共有される必要があるということもおっしゃっていました。

この独立戦争博物館はハイコート地区他に隣接するセグンバギチャ (バングラデシ

ユ・シルポコラ・アカデミーもこの地区に所在)地区に位置し、英領統治時代の民家を改造した白壁の美しい建物を改造して作られています。博物館にはティールームや絵はがきやキーホルダーなどの博物館グッズを販売するショップも隣接しています。(2004年4月15日)

開館日：日曜日を除く月曜? 土曜日

開館時間：午前10時? 午後6時

入場料：3タカ

住所：5, Segun Bagicha, Dhaka-1000

電話：880(国番号)-2(市街局番)-955-9091

FAX：880-2-9559092

電子メール：[mukti@citechco.net](mailto:mukti@citechco.net)

## (2) パクシー橋からジャムナ橋への旅

3月14日(ベンガル正月の祝日)に、日本のODAで建造されたパクシー橋(開通間近)とジャムナ橋(1988年開通)を、日帰りで訪問しました。バングラデシュの大河を見ながら日本との関わりを実感できるお勧めの旅です。

マニクガンジのパトゥリア・フェリー乗り場から約20分で、対岸のドウロトディアに到着しました。パクシー橋に向かう途中、干上がって川幅が300メートル程のガンジス支流ゴライ・マドゥマティ川をフェリーで渡りました。野球帽に黒のサングラスの陽気な船員は、外国人が珍しいのかとても親切で、私たちのために早く船を出せと命令しつつ、何かごちそうでしょうか、キュウリを食べるか等聞いてくれました。

パクシー橋が近づくと、道路の舗装が急に良くなり、車がとてもスムーズに走り出しました。休日でしたが橋付近には働いている人もおり、私たちは数人の女性を含む作業員と話しました。白くほっそりした印象のパクシー橋から300メートル程離れたところに、ハーディング橋という赤茶色の列車用の鉄橋が併走しています。作業員の人によれば、歩いて渡る事ができるとのことでしたので、隣のハーディング橋からパクシー橋を眺めることにしました。

ハーディング橋からの眺めはとても素晴らしく雄大でした。遙か西のインドとの国境の側を見ると、ガンジスの流れとその周囲の風景は広大で、河筋と森の緑と空がとけあって霞んで見えました。東側には開通式間近のパクシー橋の全体像が見え、自転車や徒歩で橋を渡る人もいてのどかな様子です。

来月中旬にジア首相も参加して開橋式が行われる予定のパクシー橋は2001年11月に工事が始まりました。総工費221億円(国際協力銀行(JBIC)による融資179億円、残りはバングラデシュ政府の自己資金)全長1,786メートル、ハーディング橋と同様に16本の橋脚に支えられています。

隣のハーディング橋の工事はイギリス人技師らの手により1910年に開始され、12年に完成、15年にハーディング・インド総督が出席して開橋式が行われました。独立戦

争時には迫撃砲の攻撃を受けて橋の一部が落下しましたが、1972年10月にバングラデシュとインドの鉄道会社の合併事業により再び開通しました。大切に修復を重ねて利用されてきたようで、その日も錆止めのペンキを塗る作業が続いていました。

橋のたもとの茶店で遅い昼食をとっていると、通りがかったパクシー橋建設事務所勤務のフセインさんが親切にも橋の案内を申し出てくれました。彼の先導でパクシー橋を車で往復し、途中で止まってパクシー橋から東を見ると、パクシー側からベラマラ側に向かって、水の干上がった河床に大型トラックが何十台も列を作ってフェリーを待つ様子が見えました。橋が開通したらあのトラックはもう何時間もフェリーを待つ必要がなくなるのですね。

その後事務所でお茶を頂きながら橋の敷設工事の写真を見せてもらいました。驚いたのは1つ1つの橋脚を支えるため、河川の底深くに長さ約91メートル、直径約3メートルもの柱が4本も埋め込まれているという事です。

そこからジャムナ橋まではわずか2時間です。ジャムナ多目的橋は全長4.8キロ、幅18.5メートル、日本の円借款約213億円の拠出も得て、1994年10月に着工、1988年6月に開通し、自動車、鉄道が通れるばかりでなくガスや電気も送ることができ、首都ダッカと北部地域を結ぶ重要な役割を果たす橋です。パクシー橋がほっそりと女性的な感じの橋なのに対し、ジャムナ橋はどっしりと大きく男性的で渡りきるまでの時間も大分長く感じました。

行きはフェリーで、帰りは日本の協力で敷設された橋を渡って、パドマ(ガンジス)・ジャムナ・メグナという3つの大河とその支流の懐に位置するこのバングラデシュという国、そして日本との関わりを肌で感じる旅となりました。(2004年4月29日)

### (3) カウランバザール

ダッカ市のファーム・ゲート、シヨナルガオン・ホテルのすぐ近くにある「カウランバザール」は、食べることにこだわりのあるバングラデシュ人の台所を垣間見ることが出来る、お勧めの市場です。

カウランバザールは、18世紀の後半にマルワリ商人(北インド出身の商人)のカルワン・シンという人物により開かれ、19世紀の後半には陶器、焼物その他家庭用品の市場として発展しました。現在も様々な食品・生活雑貨が販売されており、魚、野菜、米の卸売市場も併設されています。

朝7時頃には、魚売りがバザール周辺の歩道までいっばいに魚を広げ、前の道路は魚を持ち運ぶ人たちでごったがえしています。バザールの中では、ベンガル人の好むイリシュ、エビ、鯉等馴染みの魚、名前もわからない様々な魚が所狭しと並び、売る人も買う人も入り乱れてものすごい活況です。地面が水浸しで歩きづらいますが気にせず入っていくと、至近距離から興味津々といった視線を投げかける連中を押しよけるように、陽気な魚売り達が盛んに話かけてきます。

先月末に訪れた際には、残念ながら魚市場は閉まった後でしたが、隣の野菜市場の方を見ないかと声がかかり、ショポンさんという魚売りがずっと私たちを案内してくれました。野菜市場への道すがら、茶店の店先の丸い鉄板の上で美味しそうなルーティ（小麦粉を練って焼いた薄焼きのパンのようなもの）が焼かれています。油がジュージュー音を立て、いいにおいが漂っていて、早速試してみることにしました。みんなでちょっとだけ味見してみるはずが、結局卵焼きまでつけて5枚も食べてしまいました（全部で20タカ）。食べていると早速人だかりが出来、じっと見入られてしまいます。

野菜市場はコンクリートむき出しの建物にあります。その外側にも内側にもぎっしりと野菜が山積みされています。いつの間にか数人の子供達が案内に加わっていて、これはスイカ、あれはジャガイモ、と教えてくれます。ある一角ではレモンばかりが売られていましたが、切ってもいけないのに、あたりはレモンのさわやかなにおいでいっぱいです。

最近の報道によれば、政府は首都への必需品の流通増加、価格の安定化等を達成するため、農産物卸売市場をハティルジール、トンギ、アミン・バザール、ジャットラバリ、キルガオン、ラルバーグの6カ所に新設し、カウランバザールをハティルジールに移動する計画とのことです。

大きな市場を通り抜けると、農村開発庁（BRDB）本部の前の通りに出ます。夜にはこの通りいっぱいにも店が出て、たいへんにぎわいになります。市場を背に向こうを見ると5つ星のショナルガオン・ホテルがすぐ近くです。

ショポンさんはホテルの前まで私たちを見送り、是非又来てくれと言いました。彼に年齢を聞くと18歳未婚とのこと。「既婚か、子供はいるか」と初対面でも良く尋ねられるのに、彼が何も聞いてこないの、私の方から自分は30歳未婚だと言うと、「はっは！」と一笑。皆様、この国では女性は10代で結婚する人が多く、30歳というとは一般には立派な「行き遅れ」です。彼はそんな私をかわいそうに思ったのか、その後、自分も実は30歳だと言ってくれたのでした。（2004年5月13日）

#### （4）ショドルガット

ダッカ市の旧市街にあるショドルガットは、私がダッカで一番バングラデシュらしさ、活気を感じるお気に入りの場所です。平日はショドルガット周辺の細い道がリキシャで埋め尽くされ、ひどく渋滞するので、車で行くなら金曜日または平日の早朝をお勧めします。

ショドルガットは潮の満ち引きにより水かさが大きく変わるブリガンガ川に開かれた港で、昔からダッカへの物流に重要な役割を果たしてきました。現在でも南部・南西部のポリシャル、チャンドプール、ボラ、ファリドプール、クルナとダッカ間を運行する約100艘の客船、その他様々な物資の運搬船等が発着し、果物、野菜、干物の市場として毎日大変なにぎわいを見せています。元々は大型船舶も利用できる港でしたが、川底にシルトが堆積して浅くなったこともあり、現在大型船は運行出来なくな

っています。1820年代頃からシヨドルガットの東側に行政や事務所が立ち並ぶようになり、北側は市の中心街として発達してきました。

シヨドルガットの建物の2階に上がって眺める景色はいつ見ても活気に溢れています。正面にはたくさんの客船が並び、船着き場は物売りや乗客でひしめき合っています。川面には無数の手こぎの船が人や野菜や様々な荷物を載せて忙しく行き来しています。正面に向かって左右には、それぞれ1989年・2001年に開通した、オールドダッカとケラニゴンジをつなぐバングラデシュ・中国友好橋が架かっているのが見えます。建物の裏、旧市街側に回ると、細い道が色とりどりのリキシャで埋め尽くされている様子が伺えます。

私達は小舟に乗るために船着き場に下りました。船に乗らないかと、たくさんの船頭が声をかけてきましたが、一人の船頭と30分40タカ(1タカ=約2円)で交渉がまとまり、船に乗り込む事にしました。船着き場と大きな客船との間の隙間に木製の小舟がつないであり、客船の脇の40センチくらい張り出した所を伝って、隣の小舟に飛び降りるように言われました。小舟に乗って出発しようとする、他の船頭が、500タカ、500タカとはやし立てています。(多くの外国人は500タカ払って乗っているでしょう。)

さて、どうやって船と船の間を通り抜けるのか。隣り合って停泊中の2艘の客船の船底と水面の間の1メートルぐらいの隙間を通り抜けるときは全員が頭をぐっと低く下げました。船底から汚物が垂れ流されているのが間近に見え、臭いにおいがしました。

船に乗ってブリガンガにこぎ出すと、日差しは強いのですがそよ風を受けてとても良い気持ちです。停泊した小舟の上から私達に無邪気に手を振る子供達の笑顔はとても明るく、私の気持ちまで明るくしてくれました。

船頭さんに聞くと、木製の小舟は4,000タカで作ったということでした。船を下りてお金を払おうとすると、船頭さんが「バクシーシ、バクシーシ(お恵みを)」としきりに繰り返します。私達は60タカを払ってシヨドルガットを後にしたのでした。(2004年5月27日)

## (5)ラルバーグフォート

ダッカ市の旧市街を訪れるなら、前回紹介した「シヨドルガット」とともにムスリム王朝の残した「ラルバーグフォート」の見学は欠かせません。美しく手入れされ季節の花が咲く庭園にはゴミ一つ落ちておらず、旧市街の喧噪も嘘のように静かです。家族連れや恋人達が楽しそうに集う様子を眺めていると、ほのぼのとした気分になれます。

ラルバーグフォートは16世紀から18世紀中葉のムガル王朝によるベンガル支配の時代を伝える数少ない歴史的建造物です。この城塞の建設はムガル帝国第6代皇帝アウラングゼーブの治世の1678年、皇帝の第3王子で15ヶ月間ベンガル大公の職を

勤めたモハマッド・アゼムにより開始され、その後チッタゴンの攻略に大きな功績を残し、善政を行ったことで有名なシャイスタ・カーン大公に引き継がれました。しかし 1684 年に大公の娘、ビビ・パリ (Fairy Lady) が急死したため建設は中止されてしまいました。当時は南の城壁のすぐ横をブリガンガ河が流れていました。

ラルバークフォートへは、当時未完成のまま放置された北門から入ります (現在の門は後に建設したもの)。現在見学できる建物は、入り口正面のビビ・パリ廟 (ビビ・パリとその親戚と言われる女性の棺が安置されている)、向かって右側のモスク、左側の現在博物館として用いられている「ハマーム (浴場)」のある建物 (Diwan-i-Aam)、フォートの南東 (向かって左側の端) にある大きな城門、そこから西に延びる城壁と要塞の名残などです。

しかし近年の発掘調査により、このフォートには上下水道、噴水、屋上庭園などの設備が施された 26,7 の建造物が存在していたことが分かりました。当初の城壁は現在のシャイスタ・カーン・ロード以東にまで延びていたようです。南の城壁の北側には厩舎や行政事務所、西側には貯水池と結ばれた噴水や美しい庭園が存在したとされています。西の城壁の東側、モスクの裏側からは下水設備が多数発掘されており、住居は主にそのあたりにあったのでしょう。Diwan-i-Aam の 1 階にあるハマームには当時、台所、オープン、貯水設備、バスタブ、トイレ、脱衣所等がしつらえられ、ハマームの真下には水をわかす為の部屋や使用人の通路が造られていました。

ムスリムとヒンドゥーの建築様式が見事に融和したビビ・パリ廟の中央の部屋は総白大理石造りで、ビビの棺が安置された中央の部屋を囲む 4 つの角部屋には釉薬をかけた花模様の美しいタイルが埋め込まれていました (現在のタイルは模造されたもの)。

さて、私達がのんびり城壁の縁を歩いていると、博物館から管理人らしきおじいさんが出てきて「金曜はお祈りの為に、12 時半から博物館が閉まります。閉まる前に博物館を見ませんか。」と勧めてくれました。私達が博物館にかけつけた頃にはもう扉に鍵がかかっていましたが、彼はその扉を開けさせ私達を中に招き入れてくれました。

私達はあまり彼を待たせてもいけないと、展示されたムガル時代の甲冑や食器、貨幣、絨毯、絵画、書簡等を足早に見て回り、お礼を言ってチップ (30 タカ : 1 タカ = 約 2 円) を渡そうとしました。しかし彼は固辞して受け取りません。しかし、それでも彼は私達とゲートまで歩く間中ずっと、自分の好意が如何に特別なものか何度も力説していました。きっと彼はこれまで外国人からもっともっと高額なチップをもらっていたのでしょう。(その 30 タカは結局、おじいさんと一緒だった青年に渡しました。)  
(2004 年 6 月 10 日)

開館日 : 日曜? 金曜 (土曜休館)

午前 10 時? 午後 5 時まで (但し、金曜日はイスラム教の祝日の為、  
午前 10 時? 午後 12 時 30 分、午後 2 時 30 分? 午後 5 時まで)

入場料 : 2 タカ (パンフレットは 20 タカ又は 5 米ドル)

## (6) アーサン・モンジール

ダッカ旧市街の更なる見所としてあげられるのが、アーサン・モンジール、別名ピンク・パレスであり、バングラデシュの最もすばらしい建築物の一つとして知られています。

ムガル時代にアーサン・モンジールはジャマルプールのザミンダール(地主)に所有されていましたが、その後はフランスが貿易センターとして用いていました。ダッカの統治者(Nawab)一族の祖であるカジャ・アリムツラは1830年にフランスより建物を購入し自らの住居としました。その後の1859年に息子のカジャ・アブドゥル・ガニが居城の建設に着手し、1872年に完成させましたが、1888年の竜巻、1897年の地震により城はかなりの損害を被りました。しかし、ガニの息子でその名に城の名前が由来するカジャ・アサヌツラはその都度修復作業を行って城の保全に努めました。

このアーサン・モンジールは多くの歴史的行事の舞台となってきました。英領統治時代の英国人統治関係者が多数この城を訪れていましたし、19世紀後半以来、東ベンガルのムスリムの指導者として中心的な役割を果たしていたナワブ・カジャー族により、全インドムスリム連盟、ひいてはムスリム国家の組成に繋がるような重要な会議がこのアーサン・モンジールで開かれました。

しかし、主権国家の成立とともに1952年に一族の地所が失われ、城は人手にわたりました。1985年に政府がアーサン・モンジールの歴史的建築物としての重要性を認識して一帯の土地を買い上げ、修復作業に着手するまで、ずさんな管理により城には不法に居住者が住み着き、長い間スラムのような状態のまま放置されていました。修復作業が完了した1992年以来、アーサン・モンジールは博物館として用いられています。館内には様々な物品・絵画等が展示され、一部の部屋はかつてのナワブ一族の裕福な生活が忍ばれる美しい家具・調度品で飾られています。内部の木製の階段の手すりや客間の天井の装飾も優雅で一見の価値があります。また、ブリガンガに面した2階のベランダからそよ風を受けながら眺める緑溢れる景色もすてきです。

私達が訪れたのは金曜の午後で、家族や友人同士が連れ立ってにぎやかに参観していました。みんな思い思いに着飾り、休日を心から楽しんでいるといった風です。私はバングラデシュに観光にきた友人とそのお父さんと一緒にでしたが、本当に皆から良く話しかけられました。笑顔で、どこからきたの?一緒に写真を撮ろうよ!等々。友人とお父さんは気さくで明るくて人懐っこいバングラデシュ人がすっかり好きになってしまい、一緒にたくさん写真に収まりました。写真を撮っていて人が集まりすぎると、交通整理を買って出してくれるおじさんまで現れました。「用心してかからねば」といったいつもの私の心の中の壁も取り払われ、周囲のベンガル人とも一緒になって楽しんだ休日になりました。(2004年6月24日)

開館日：木曜日を除く毎日

土曜日? 水曜日：午前10時? 午後5時まで

金曜日：午後3時? 午後7時まで

入場料：2タカ

## (7) ダッカ近郊の家庭訪問

今回はバングラデシュの村の暮らしの様子についてご案内したいと思います。今回訪問したのはダッカ・バリダラ地区より車で約1時間あまりのガジプール県カリゴンジ郡、ナゴリ・ユニオン(バングラデシュの最小の行政単位)のコラン村です。コラン村の人口は約5,000名、村人のほとんどがキリスト教徒ですが、ヒンドゥー教徒の住民もいます。

首都ダッカとジョイデプール、マイメンシン県をつなぐ幹線道路から外れると建物がまばらになり、視界に入る緑がぐんと濃くなってきます。線路や小さな橋をいくつか渡って木々に覆われた細い横道に入ると、集落や畑がありました。途中で当地シェラトンホテル等に豚肉を卸しているという農家を訪れました。

道のすぐ脇の竹葺きの屋根に竹製の囲いの中で、2日後に出荷されるという体長約1メートル前後の黒豚約10匹が寝ています。その囲いを数人の男達がたばこを吸ったりしながらゆったり見張っていました。聞いてみると1匹あたり約5,000タカ(1タカ=約2円)で売れるそうです。奥にもいるというので行くともう少し小ぶりの豚が眠っていました。こちらはおよそ3,000タカ前後、更にその奥のピンク色で青い目の体長約1.3メートル前後の豚が1匹、こちらは約1万タカ前後だそうです。豚小屋のそばには大量の稲わらが積み上げられていて、そこから2メートル程低い土地は普段は田圃ですが今は川から溢れた水で池になっており、そばで雌牛がゆったりと草を食べ、生後1月ぐらいの子牛が寄り添っていました。

更に奥へ車を進めると、道路脇に雑貨屋や小さな野菜市場が集まっている場所がありました。そこが今回訪問するマルシエル氏の集落への入り口でした。マルシエル氏は大使館員の家でこれまでの約18年間、料理・家事手伝いとして働いて来ました。当地では中流以上の家庭では料理・家事手伝い、子守、車の運転などの為に使用人を雇うのが一般的で、当地の外国人の生活も同様にこうした使用人によって支えられています。

マルシエル氏の家族は妻と息子夫婦、3歳の女の子1人の5人で、牛3頭、山羊1頭に鶏をたくさん飼っています。お嫁さんは妊娠していて、3ヶ月後には家族が一人増えるそうです。家はきれいに掃き清められた中庭を囲む4棟で構成されています。マルシエル氏と妻の住む家の向かいが息子夫婦の家、二つの家の間に台所・食料貯蔵室、食堂用の別棟があり、その向かいに納屋兼牛小屋があります。トイレは牛小屋のとなりの少し奥まった所にあり、コンクリート造りで2部屋あり清潔な様子でした。どの建物もトタン屋根と白塗りの壁(牛小屋は煉瓦がむき出し)の美しい作りでした。

部屋の中にも外にもチリー一つなく、なべや壺もぴかぴかで、毎朝泥で塗り直されているのでしょう、竈も新品同様の美しさでした。家に入って部屋の正面にはたくさんのキリストの絵、赤ちゃんの絵などが飾られています。大きなベットが一つ、鍵のかかる飾り棚(特別な時に使う為のティーカップなどがきれいに並べてある)、サリーや服を掛け、靴を並べる棚があり、きれいに整理整頓されて本当に気持ちの良い家でした。家の裏手は大きく立派に枝を広げ、たくさんの実をつけたジャックフルーツの木

2本に覆われており、祖父の代からこの場所に住んでいるという歴史を感じました。その他にもザボン、マンゴー、グワバ、オリーブ(ジョルパイ)、マホガニー等生活に役立つ木々が整然と植えられているのに感心しました。

家より3メートル程低い場所にある向かいの田圃は雨期の今、川が溢れて池になっていますが、池までの斜面を利用してネットが張られ、キュウリが植えられていました。目の前の池の水面にはバングラデシュの国花であるシャブラの花のつぼみが顔を出しています。向かいの田圃は320キロもの収穫がある良い土地なのですが、家の新築工事に95000タカの借金をしたため、借金を返済するまで稲作が出来ないということでした。また息子さんには定職がないので仕事を探している由でした。

家や周りの土地を見せてもらい、何時の間にか集まった隣人達も交えてたくさん写真を撮り、青空の下、中庭でお茶や果物、クッキーなどを頂きました。豊かな自然と素朴で優しい人々とふれあう機会を得て幸せな時間を過ごしました。(2004年7月8日)

## (8) バングラデシュの洪水

バングラデシュは1954年以降、過去に6回(55、63、74、87、88、98年)国民生活に深刻な影響を及ぼす大規模な洪水に見舞われてきました。国内主要河川に設置された水位計が危険水位を越えると洪水と判断されますが、1954年以降最悪の洪水となった1998年には国土の約68%が水没しました。ダッカ市が最も影響を受けたのは88年で、当時市内の約55%が水没したそうです。現在の洪水の状況もかなり深刻で、21日現在で全土64県のうちの42県、約1千5百万人が直接被害を受けました。ダッカ市のプロゴティ・ショロニ(ビッショロード)以東のバッダ、ランプーラ、キルガオン、ショブジバーグ等も例外ではありません。

今回は17日にマニクゴンジ県ギオール郡ポイラ村周辺で体験した洪水の様子をお伝えしたいと思います。このポイラ村周辺では、バングラデシュとネパールで農村開発やストリート・チルドレンの支援活動を行っている「特定非営利活動法人 シャブラニール=市民による海外協力の会」が事業を展開しています。

ポイラ村の「STEP」事務所(2003年にシャブラニールのパートナー団体として独立)にも水が迫っていました。事務所No.2のダースさんによれば、ジヨムナ川の支流のギオール川からあふれた水で既に多くの家が浸水しており、昨夜は多くの村人が鶏や家鴨などを屋根の上に上げて、学校や比較的高い土地にある家に避難したそうです。

舟で近くの家で行われた女性ショミティの集会を見に行きましたが、集まった女性達は、これまでは自家栽培の野菜を食べることができ、余分な野菜を売って収入を得ることもできたのに、畑を失って、今や自分達が食べる野菜や家畜の餌まで買って賄わなければならないと口々に訴えていました。ダースさんは、例年の予定範囲内で起こる「増水」であれば土地が肥え、魚が捕れるという良い面もあるが、「洪水」となると被害は深刻だと話してくれました。

村人達は毎年雨期の増水に備えて事前に食料や家畜の餌などを蓄えています。洪水に

なれば魚を捕り、舟の船頭となり、あるいは出稼ぎに出て過酷な環境の中でも自分たちに出来る精一杯の事をし、家族と共にたくましく生きる。浸水した木々の間に網を張り魚を捕る、バナナの幹をつないで舟にするなどの生活の知恵も随所に見られました。

行きは舟に乗りましたが、帰りは涼やかな風を受けながら夕闇の迫る農村風景を眺めつつリキシャに乗り、道が切れると舟に乗り換え（2回舟に乗りました）村から約10キロのボロンガイルまで戻りました。途中道が寸断された部分があり、そこも何とかリキシャで通ることができましたが、リキシャ引きは着ているルンギの裾を短く折り込み、一生懸命自転車をこいでいました。自分の重さが申し訳なく思われました。（ポイラ村での「STEP」の活動等は次号で紹介させていただきます。）(2004年7月23日)

バングラデシュ洪水予想警報センターは毎日下記のウェブサイトに洪水の状況をアップデートしています。<http://www.ffwc.net/>

### (9) 女性ショミティ訪問

シャプラニール＝市民による海外協力の会は、農村開発の手段として「ショミティ（農民達が自発的に作る生活向上のための相互扶助グループ）」を導入し、この「ショミティ」の様々な活動を支援しています。今回は、シャプラニール・ダッカ駐在員の中森さん、シャプラニールから独立したばかりの現地 NGO「STEP」の事業コーディネーターのダースさん他の案内で訪れた、チョトポイラ村の女性ショミティの活動を紹介したいと思います。

今回の集会には、村の3つの女性ショミティから約20名が集まりました。集会は週に1度開かれ、貯金やローンの手続をするほか、生活や村の問題について話し合い、結婚の法律、育児や掃除の仕方など生活向上に必要なことを勉強します。会員は全員自分の貯金通帳を持っています。貯金は少しでも毎週必ずするようにして（平均4？5タカ（1タカ＝約2円））、皆の預金をまとめて銀行に預け、1年ごとに利息を各会員で分配します。貯金は多くの場合、子供の教育費、娘の結婚費用（当地には花嫁側が花婿側に持参金を提供する「ダウリー」という習慣があります）、家の修理費など主に子供・家族のために使われるそうです。

しかし、自分のアクセサリーを買うという発言もあり、自分のためにもお金を使っていると聞いて嬉しく思いました。カラフルなサリーやアクセサリーを身に纏うお洒落な彼女たちです。これは貯金で買ったのよと金(?)のイヤリングを見せてくれた女性もいました。会員は、貯金総額の4倍までの金額をSTEPから借りることもできます。ローンの使い道は種籾やリキシャ（夫の仕事のため）の購入など各世帯によって多種多様です。お金の返済期間はお金の利用目的毎に異なり、例えばビジネス目的であれば1年、じゃが芋（地域の特産品）の栽培なら3ヶ月と決まっています。

ところで、この女性ショミティでは当初誰も読み書きを知らなかったそうですが、シャプラニールの成人識字教室の結果、今では全員自分の名前や住所が書けます。集会でも参加者名や預金の総額、話し合いの内容などがきちんと記録されていました。シャ

プラニールでは、村人が一度おぼえた読み書きを忘れないよう、作文コンテストを開き、2ヶ月に1度新聞を発行し、図書館を開くなどして、村人が主体的に楽しめる工夫を凝らしています。皆は新聞を回し読みしたりして、とても楽しんでいる様子です。最近作文コンテストで優勝したリリさんはヤギをもらって、最近そのヤギが2匹の子を産んだと嬉しそうに話してくれました。

女性たちは恥ずかしがりながらもよく笑い、その表情はとても生き生きとしていました。ショミティの活動をしている彼女たちは自分で自分の生活を向上させるため努力したという確かな自信、達成感を持っているようでした。(次回は同じ村の少女ショミティの活動をご紹介しますと思います。)(2004年8月5日)

シャプラニールの活動に関する情報は下記のウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.shaplaneer.org/>

### **(10) 少女ショミティ訪問**

「特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会」は農民達が自発的に作る生活向上のための相互扶助グループである「ショミティ」を導入し、この「ショミティ」の様々な活動を支援しています。この「ショミティ」、最近は大人によるものだけではなく、子供や少女のショミティもあります。

私達が訪れたマニクゴンジ県ギオール郡チョトポイラ村の少女ショミティは2004年2月に約12~16歳の少女29名が作ったショミティです。シャプラニール・ダッカ事務所の中森さんを通して少女達の話聞いていくと、とても活発に活動していることが伺えました。

週に1度の集会では貯金を集め、結婚制度や法律、衛生・健康問題について話し合い、学校の勉強を一緒にすることもあります。村の地図の作成、村の出生率調査、独立運動の一環としてのベンガル語公用語化運動などテーマを決めての壁新聞作成、シャプラ新聞への投稿、他のショミティとの交流、遠足の企画、その他村道の補修、ポリオの接種、イード祭の時に村の貧しい人にお金を寄付するボランティア活動等もしています。

元々メンバーの家の庭先で行われていた集会も、現在では村のイベントで演劇を催してメンバー自らが集めたお金に他のショミティ、有志の寄付を合わせて作った集会場で行われています。壁には地図や新聞、年間行事予定などが貼られ、来訪者を歓迎する「Welcome」という飾りが付いていました。

結婚で9名が辞めて現在は総勢20名のショミティメンバー達はとても快活で明るく、質問にも屈託なく応えてくれました。なりたい職業は学校の先生や看護婦さん、NGOの職員など。結婚は?と聞くと、結婚は是非したい、子供は男女1人ずつ等と答えが返ってきました。女の子の結婚にはダウリー(持参金)の支払でお金がかかるので、女の子はあまり欲しくないのではないかと想像していたのですが、そうでもないようです。

好きな人はいるの？という質問にも数人が恥ずかしそうに顔を赤らめながら話してくれました。みんなの好きなタイプは背が高く健康的で、ハンサムな人という事で、所変われども女性の男性に対する好みはあまり変わらないものです。ちょっと違うのは色白の人がいい！という意見が多かった事。それから、髭をのばした人は好まれないうので驚きました。

自分の夢を語り、自ら主体的に色々と活動し、人生を切り開きたいという意志を持つ少女達の明るい笑顔を見ていて、少女の活動を暖かく見守る村人達の健全さ、シャプラニールが導入し、そこから独立した STEP に引き継がれた「精神」が着実に村人達の間根付き、更なる広がりを見せていることが伺われました。(2004年8月19日)

シャプラニールの活動に関する情報は下記のウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.shaplaneer.org/>

### (11) カーゾン・ホール

カーゾン・ホールは、ダッカ市のロムナ地区、オールド・ハイコートの近くに位置する、赤い煉瓦の外壁と周囲を囲む緑のコントラストが美しい、ヨーロッパとムガールの建築様式が見事に融合された、ダッカを代表する歴史的建造物です。カーゾン・ホールという名前は、1904年に当時のインド総督として定礎式を行ったカーゾン卿に由来しており、本年度で工事着工以来100年を迎えています。

工事着工翌年の1905年、カーゾン・インド総督はベンガル州を(西)ベンガルと東ベンガル及びアッサムに分割するベンガル分割令を施行しました。しかし、この政策により反英感情や分割反対運動が高まり、また、インド軍の改革を巡る軍との意見の対立等のため、カーゾン卿は同年インド総督を辞職しました。

当初、カーゾン・ホールは知事の宿舎、公会堂として利用する目的で建てられましたが、ベンガルが再統合された1911年以降はダッカ・カレッジの建物として、1921年のダッカ大学設立後はダッカ大学理学部の教室、研究室、事務所、会議場等として使用されています。しかし、最近建物の老朽化が進んでいるため、ダッカ大学の学生が大学側に建物の修復を求めています。大学当局は、カーゾン・ホールを含むダッカ大学に所属する歴史的建造物の修復・保全計画を準備しているそうです。

カーゾン・ホールの着工以来100年の間に、イギリス支配、ベンガル分割、東パキスタンとしての独立、バングラデシュの独立がありましたが、特に1948年、カーゾン・ホールは東パキスタン時代のバングラデシュで起こった「言語運動」の舞台となりました。ダッカ大学の学生達は、このカーゾン・ホールで、モハマド・アル・ジンナーのウルドゥー語のみをパキスタンの公用語とするとした決定に、初めて反旗を翻したのです。

英国ビクトリア時代、ムガール帝国の雰囲気醸し出すこの建物には細部にまで様々な装飾が施されており、建築に携わった人々の高い芸術性が感じられます。良く手入れされた美しい庭園も、市民の憩いの場になっています。私は、バングラデシュに着

任した当初に、このカーゾン・ホールを訪れました。値段交渉に若干とまどいながら、ダッカで初めてリキシャに乗ったのもここでした。歴史を感じさせる美しい建物と庭を眺めて、良いひとときを過ごした事を覚えています。皆さんも、是非一度、構内を見学してみても如何でしょうか。(2004年9月2日)

## (12) 国立博物館訪問

バングラデシュ国立博物館は、「ダッカに博物館を」という市民の願いを受けて、1913年に当時の中央官庁事務所(現ダッカ医科大学病院)に設置されました。翌年には約380点の展示品の一般公開を始めました。当初は「ダッカ博物館」という名称でしたが、1983年には「バングラデシュ国立博物館」となり、シャハバードに移転して現在に至っています。現在の館長は、画家のマハムドゥル・ホック氏です。80年代初頭に筑波大学芸術学部で留学し、今年3月の館長就任直前までダッカ大学芸術学部で教鞭を執っていました。今回は時折日本語を交えて、ホック館長から色々とお話を伺ってきました。

4階建ての建物には43の大小展示室、劇場等の設備があり、バングラデシュの動植物の見本、民族・宗教文化を伝える様々な装飾品、家具・調度品、独立前後の歴史を伝える写真や物品、その他絵画、彫刻等、多種多様な展示が行われています。ホック館長によれば、博物館には4万5千枚もの古コインのコレクションがある他、仏教、ヒンズー教の彫刻、古ノクシカタ、バングラデシュで用いられてきた舟のミニチュア・コレクション等が特にすばらしいので、皆さんに是非見てもらいたいとのことでした。私は、1943年のベンガル大飢饉の様子などを描いた当国を代表する画家の1人であるジョイヌル・アベディンの絵画コレクションも、個人的に一見の価値があると思いました。

ホック館長は、現在改修中の4階フロアへの世界各国の美術・芸術品等の展示コーナー立ち上げに力を入れています。これまでにイラン、中国、韓国からの芸術品の提供が決まっており、私が訪れた時はイランからの学芸員が展示物の展示作業を行っていました。日本からの帰国留学生であるホック館長は、もちろん日本コーナーを設けることに非常に熱心です。

博物館以外についても色々興味深いお話を伺いました。ホック館長は、日本で様々な出会いを通じて、全国民に行き渡った教育を背景とした日本の社会秩序・文化、個人の人を立って行く知恵、ライフスタイル等から様々なことを学んだそうです。自国には何が欠けていて何が必要なのか、どうしたら人を導いていけるのか、等々様々な考えをお持ちでした。自国とは異なる様々な事象を鋭く見つめ、考え、経験から学び取り、培った知恵が、現在画家としての芸術活動と国立博物館の館長、管理職としての非常に異なる種類の仕事を両立させている大きな原動力なのだろうと思いました。

ところで、私はアポイントの時間丁度に伺ったのですが、その後すぐ外国から帰国中の氏の古い友人も入室してきました。お茶が出され、私達二人と交互に話し始めても、2機の携帯と3台の設置電話には何度となく電話が入り、事務員も仕事を持って入って来ます。いつものベンガルスタイルでしたが、しばらくするとホック館長は自宅で

友人が自分を待てるよう丁寧に案内し、部屋の外に出て他の仕事を整理し、インタビューに戻ってくれました。その後は電話も人も殆ど入らず、日本スタイルでじっくりお話をして下さったのです。ホックさん、貴重なお時間を有り難うございました。  
(2004年9月16日)

バングラデシュ国立博物館

開館日・開館時間(木曜休館):

土曜? 水曜・午前10時30分? 午後4時30分

金曜日　　・午後3時30分? 午後7時

入場料: 2タカ(3歳以下無料)

### (13) ボンゴボンドウ記念館訪問

バングラデシュを独立に導きボンゴボンドウ(ベンガル人の友)との尊称を得ながらも、クーデターで親族と共に暗殺された、シェイク・ムジブル・ラーマンの記念館を訪問しました。

シェイク・ムジブル・ラーマンは、今日のアワミ連盟の前身である、東パキスタン・モスリム・アワミ連盟の執行委員選挙(1949年)以来、東バングラデシュの権利拡大のために活発に活動し、そのかどで東西パキスタン時代23年間のうち約12年は牢獄で過ごしました。同人のカリスマ的な指導力は1971年の独立に極めて大きな役割を果たしました。しかし独立後は経済復興が進まず、物価が高騰してアワミ連盟政権は急速に国民の信頼を失っていきました。そして1975年8月15日、軍の青年将校によりムジブル・ラーマンとその親族他計17名が殺害される事件に発展したのです。

記念館はムジブル・ラーマンの旧自宅で、人で賑わうダンモンディ湖に面していながらも、しんとした雰囲気醸し出しています。記念館の初めの部屋には、独立前後の写真、新聞記事などが展示されています。中には、73年にラーマン首相が日本を公式訪問した際に田中角栄総理(当時)と写っている写真や、バングラデシュの独立、独立後の経済復興に尽力した故早川崇議員と写っている写真もあります。当時日本国内の有志は独立支援のため街頭募金を行うなど、国内世論を喚起する活動を行いました。また、日本は1972年2月、他の西欧諸国に先駆けてバングラデシュを国家として承認しました。

2階には台所、リビング、寝室等があり、家族の写真や当時の日用品も展示されています。参観者を見守る職員が、この始めの寝室ではムジブル・ラーマンの末息子のRusel 他が銃弾を浴びせられて殺された、天井のしみは血痕だ、などと教えてくれました。

次の寝室に移動する途中の階段で、ムジブル・ラーマンが侵入した将校の銃弾に倒れ、階段を転げ落ちました。ムジブル・ラーマンが転落し、絶命した階段はガラスで覆われています。階段や部屋の壁、木のドア、あらゆるところに大きな銃弾の跡が残っていました。その次の部屋には銃弾に倒れ、息絶えたムジブル・ラーマンの写真も飾られていました。その隣の部屋は息子夫婦の寝室ですが、部屋の飾り棚には日本の姫だ

るまなど、様々な日本人形が飾られていました。

ハシナ・アワミ連盟総裁と妹のレハナ氏は外国にいたため、暗殺を免れました。しかし、家族の思い出の詰まったこの家を訪れるのはどんなにつらいただろう、と想像しました。この国の2大政党の党首は両名とも家族を暗殺されています。事実として知ってはいても、その悲しみやつらさを初めて身にしみて感じた思いでした。そしてこの二人の女性の対立にも由来するこの国の政治の行方の困難さにも、思いをはせました。(2004年9月30日)

ボンゴボンドウ記念博物館

開館日・開館時間(水曜休館):

木曜日から火曜日まで(午前10時?午後5時)

入場料:2タカ(12歳以下無料)

### (14) プラネタリウム訪問

9月27日に一般公開が始まったBhasani Novo Theatreに行ってきました。2つのチケット販売所の前には、入場券発売開始前から既に長蛇の列が出来ていました。並んで待ちましたが、私達の順番が来る前に売り切れてしまいました。結局次の回のチケットを入手することが出来ましたが、皆約3時間待ちでした。

プラネタリウムのドームの直径は23メートル、275名が観覧可能です。中央の映写機の後ろ側から座席が埋まりました。日本の「後藤光学」が納入した設備は素晴らしく、観客席からはプログラム開始前にも拘わらず、禁煙サインの後に映し出される後藤光学の文字、製品説明、スピーカーの作動確認などの度に、拍手と歓声があわき起こりました。その後ダッカの全景がスクリーン全体に広がり、夕闇が訪れ、スクリーンが星でいっぱいになると、更に大きな歓声があわきました。観覧者が本当に喜んでプログラムに見入っているのが伝わってきて、とても楽しく観覧しました。

現在は2本立て1日4回の公開ですが、来場者数がこなれて来た段階で、時間毎にプログラムを決めて連続上映が行われます。現在プラネタリウムはベンガル語のみ、IMAXの3D映像「アフリカ・セレンゲティ」は英語の上映ですが、プラネタリウムの英語版、バングラデシュ各地の名所などを紹介する「Bangladesh」というベンガル語プログラム、その他のIMAX3Dフィルムも、今後上映される予定だそうです。

また、3Dアニメーション劇場、シミュレーター・アトラクション設備の導入も決まっているようで、今後更なる内容の充実が期待できそうですね。

入り口のある1階には、韓国企業が納入した太陽系の惑星、地球から見える星座、黄道上の星座、日食・月食が起こる仕組み等の模型が展示されています。投影される3Dフィルムが巻き取られる様子がガラス越しに伺える部屋もあります。

この建物の設計はバングラデシュの建築家アリ・イマーム氏が担当しました。地下1階には約100台が収容可能な駐車場、未整備の展示スペース、フードコート等があり、地下2階には更に広いホールがあります。地下2階から階段を上がると事務所、講演

会場などがありますが、複雑な作りで、自分が何階にいるのか分からなくなりました。

案内してくれた会計担当のシャムスディン氏の事務所で休んでいると、事務所員の1人が「チケット7枚を都合するように頼まれたのですが」とやって来ました。きっと、ここで働いている人はみな知人・友人からチケットの事前確保を頼まれて大変なのでしょう。

12億3千万円もの総工費を全てバングラデシュ政府が賄って建設されたこの施設が、国民のプライドとして、バングラデシュの人々の将来への夢や希望、愛国心を象徴する施設となる様な気がしてとても嬉しくなりました。(2004年10月14日)

Bhasani Novo Theatre (プラネタリウム)

住所: Bijoy Sarani, Tejgaon, Dhaka1215

電話: 811-0184、0155、0127、913-8806

休館日: 日曜日

上映時間: 11時、1時、3時、5時

(開演の1時間前から切符の発売開始、1名が入手可能な入場券は2枚まで)

入場料金: 30 タカ

プログラム: ベンガル語・英語2本立て

プラネタリウム Mohashunnya Mohakashe 「無限の宇宙」(約45分)

Africa the Serengeti (約40分)

**発行：在バングラデシュ日本大使館**

Embassy of Japan  
Plot#5&7 Dutabash Road  
Baridhara, Dhaka, Bangladesh  
電話(880-2)881-0087  
FAX(880-2)882-6737  
<http://www.bd.emb-japan.go.jp/>

**\*日本・バングラデシュ交流メールマガジンの購読を希望される方は  
編集部(担当：飴谷・河野)までご連絡下さい。**

[mail@embjp.accesstel.net](mailto:mail@embjp.accesstel.net)

**\*メールマガジンのバックナンバーは次のウェブサイトにてご覧になれます。**

<http://www.bd.emb-japan.go.jp/mmbacknumber.htm>